真説 狗川黒の告白

The Extreme Boy Meets Girl

麻技准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真説 狗川黒の告白 The Extreme Boy Meets Girl

【Nコード】

N6266M

【作者名】

麻技准

【あらすじ】

「あなたが好きです。私の全部をあげるから、覚悟をしなさい。」
「ミステリアスな少女、いぬがわくろ 狗川黒に転校初日のホームルームでクラス全員が見ている中いきなり告白され、最低だった僕の学園生活は激変する!? 毎週土曜日、AM9時頃更新。」

プロローグ 甘い罠（前書き）

この作品は、同作者による作品『狗川黒の告白』の前年齢対応版です。

ブローグ 甘い罠

午後一時、三十分過ぎ。

昼休みの時間だ。

この時間帯の校内は、昼食を終えた学生達で溢れていた。

そんな中、僕と彼女は、科学準備室にいた。

この学校はクラスの教室がある第一校舎と、被服室など特別教室がある第二校舎の二つに分かれており、科学室は人目を避けたい僕たちにとって、絶好のスポットだった。

「さて… そろそろ始めましょうか」

教卓と黒板の間に立ち、彼女はにこり、と笑った。

「そ、そうだね」

僕は、そんな彼女に対して小さく頷いたが、あまり気乗りはしていない。

「緊張してるのね、かわいいわ」

彼女は僕を真っ直ぐに見つめ、少し挑発的に微笑んだ。

小悪魔的、というよりも、魔女とか、サキュパスとか、そういう類に似た笑顔であった。

どうやら、ここまで来ておいて弱腰な僕を、どうにかして乗り気にさせたいようだ。

まあ、確かに無断で化学室に入っておいて乗り気にならない僕にも非があるんだけど

「でも、こんな場所に来ておいてつれないじゃな」

「ちょー！！誰か来た！」

口から心臓が飛び出るかと思いながらも、僕は咄嗟に彼女の口を塞ぐ。

教室の外の廊下から、男子生徒の嬉々とした声が聞こえたのだ。

慌てながらも彼女の身を屈ませ、僕は教卓の後ろに隠れた。

「大丈夫よ、まったく不粹ね。男子はこれだから嫌いだわ」

あのう、僕も男子なんですけど。

「もちろん、あなたという絶対的例外はあるけどね」

僕の心を読んだかのように、彼女は付け加える。

「さいですか…」

ほっとしている、僕がいた。

どたどたと、と慌しい足音と、騒ぎ声が、通過していく。

「はあ… はあ… 今のはちょっと驚いたね」

教室の前の廊下を数人の生徒が通り過ぎたのを確認し、僕は汗を拭いながら少し戸惑う。

「まあ、ちよつとだけね。でも、ちゃんと閉めたから、問題ないわよ」

肝が据わつてらっしやるらしく、彼女はしれつと言いながら、スカートのエをパンパンと払い、立ち上がった。

勿論、この時間、この教室は施錠されているのだが、手際のように彼女の手によって、入室することが出来た。

職員室から拝借したのだろうか、彼女はこの教室の鍵を持っていったのだ。

「ほら、あの通り」

彼女が指差した教室の入口には『KEEP OUT』と書かれた黄色い規制線が幾重にも貼られており、まるで、事故か事件現場のようである。

しかし僕は知っている、彼女は入室した時、鍵をしていない。

見つかるか、見つからないかの、ギリギリのスリルを、この人は楽しむつもりだ。

僕も先ほどから彼女のように楽しもうとは思っただが、彼女のよくな度胸と反骨精神の塊を真似ることなど、どうやら出来ないようだ。

「あれは閉めたことになんないよ…」

「ふふっ、そうね。ここと… 同じね」

彼女はクスクスと笑いながら、僕の黒い制服のズボンの股間部分を指差す。

あ。

社会の窓が、開いていた

「はうっ?!」

僕は慌ててチャックを上げる。

恥ずかしさに、顔が熱くなるのが、自分でもよく分かったよ

「まあ、さっき私が開けたんだけどね」

悪びれるどころか、誇らしげに彼女は胸を張って語る。

犯罪ですよ、それ。

「あなたって人は…」

僕は呆れるよりも驚いた、いつ、チャックを開けたんだらう。

「ふふっ、ズボン下ろしはイジメだけど、チャックを開けるのは社交辞令よ」

「社会の窓空ける社交辞令がはびこるようなら、社会は終わりだよ

…」

やれやれ、と僕は肩をすくめた。

「というか、こんなことして… いいのかな?」

今更過ぎる台詞を、僕は吐き出した。

もう、後戻りなど出来ないのに。

いけない事だというのは、分かりきっているのに。

僕は彼女に、『また』訊いてしまった。

「いいに決まってるじゃない。誰に迷惑かけてるわけでもない」

そして彼女は、弱腰な僕の背中を押す。

もう何度、僕は、この台詞を聞いたんだらう。

そして、何度、この台詞に助けられたんだらう。

僕はこの台詞こそ、彼女の信念だと、思っている。

滅茶苦茶な女だよ、本当に。

「そ… そりゃ、そうだけど…」

そして、僕は、何度この台詞でお茶を濁してきたのだろう。本当は、楽しみたいくせに。

彼女に誘惑されるのが、嬉しくて仕方ないくせに。

「じゃあ、やめておく？」

彼女はやや挑発的な上目遣いで僕を見つめ、問いかける。

もう答えが決まっている質問を。

「うう… いや、やる。ちょっと待って…」

そして僕は頷き、彼女を見た。

腰まで届くほどに長い黒髪を。

挑発的な視線を送る、切れ長の瞳を。

少しだけ赤く染まっているシャープな顎のラインと、ぷりっとした唇を。

少し背が高いスタイル抜群のボディラインと、それを包む紺色のセーラー服を。

僕の握り拳くらいのサイズはある、放漫な胸を。

右から。

左から。

見つめる。

そして僕は、思わず生唾を呑んだ

「じゃあ、カラフルクイズの答えを聞こうかしら」

くすくす、と少々サディスティックな笑みを浮かべて、彼女は僕の瞳を真っすぐに見つめる。

「…」

僕は彼女に見とれつつ、しかし、彼女の問いに対する答えを考えていた。

彼女の拳動に、全身に、必ずヒントあるはずだ。

僕はこんな馬鹿馬鹿しいやり取りでも、本気だ。
そういう性分の、人間だから。

「…」
彼女に気づかれなないように鼻をきかせる。
カビくさい教室の中で、微かに、大人っぽい香水の香りが漂っている。

なるほど、今日の彼女はいつもと違う、年相応の女子高生の香りだ。

「分かったかしら？」

彼女は待ちくたびれたといった様子で、首を思い切り傾げて問いかける。

勝算はある、先程の匂いが最大のヒントだ。

大人っぽい、下着を穿いているにきまっている。

僕は、深く頷いた

「黒」

僕が短く言う。

すると、彼女は、してやったり、といった表情で、笑った。

まさか…

まさか!!

「ふふっ…」

心臓がバクバクと脈打つのが分かる。

みさんのクイズに出てる人の気分だ。

まあ、このクイズは何が貰えるかわからないけど。

とりあえず今日は、当たっていると信じたい。

先の笑顔は一週間やって、やっと当たったのね、的な笑顔であると信じたい。

頼む！神様！

あ、いや、神様はこんな背徳的な僕たちに力は貸してくれないよ

ね…

ならば、信長様！！

僕に力を

「は・ず・れ」

彼女は紺色のスカートを、ピロツと、上げ、大腿部の根元まで露わになっていく

僕は、目を見開き、息を荒くさせる。

履いていたのは、レースの編み目が大人の女性の雰囲気醸し出す、白い下着であった

年相応の香りがするフレグランススプレーは、罔だったのだ。孔明の罠だったのだ！

自分のイチモツが股間の辺りに少しずつ TENT を作っていくのを感じ、僕は思わず前のめりになる。

「狗川には敵わないなあ… 全く」

やれやれ、と、僕はため息をもらす。

因みに、僕はこのクイズに正解したことがない。

彼女は、僕を助けてくれた、クラスメートだ。

そして、同志でもある。

彼女の名は、いぬかわくろ 狗川黒

彼女と僕の出会いそれは、二週間前に遡る

ブローグ 甘い罫(後書き)

18禁バージョンとは少し違います。

第1話 私はあなたの彼女です。

1

その日も、僕は死にたかった。

朝起きて、顔を洗い、朝食を作って食べ、着替えて、洗濯をして、歯を磨いて、家を出る。

勿論、かわいい義理の妹や、ヤンデレ気味のお節介な幼なじみなんてテンプレートな攻略対象など僕にはいないので、得に楽しいこともなく、一人で淡々と朝を過ごし、普通に登校し、学校で過ごし、一日の大半が無意義に終わる。

フラグを立てようにも、相手がいない。

いや、相手がいないのではない、自分自身のスペックが低すぎて、見合う相手がいないのだ。

こんな性格であるから、女子と話をするのも億劫おっくうになり、それによりコミュニケーション能力も向上せず、故に女子と話せない無限ループの真っ最中。

メビウスリングからドロップアウトできない、というのは、こういうことである。

そこからの脱却は、例え隕石をはじき返した、かのサイコフレームが共鳴しても不可能であろう。

そして、ベルトコンベアに乗せられたかのように、毎日の全てが流れ作業で過ぎていく。

容姿は普通、いや、中の下くらい。

身長は173センチで、髪型はギャルゲーの主人公調。

今は学ランを着ているが、普段はジーンズにパーカーくらいしか

着ない。

趣味は特にないが、ゲームや音楽が好きだ、いつも家の中で熱中してる。

唯一の自慢は、今まで、ルール通りに、真面目に生きてきたことだけだ。

でも、そんなことは何の意味もない。

要領よくやることはやって、見えない所で不正を働く奴らが、一番この世界を楽しんでいると思う。

例えば不良。

僕のクラスにもいるが、今は好き勝手にやっている奴らは、将来、彼女とサクサク子供を作って、働いて、幸せになりやがってくれる。例えば政治家。

不正を働いても、ほぼ大丈夫。

とかく、この世の中、真面目に生きている人間が、バカを見て笑われる。

それを知ってもなお、ルールに従うしかない。

ルールに従い生きていけば、他人の言うとおりになれば、自分に責任を持たずに生きていける、と思っているチキン。

童貞をこじらせ過ぎて、天使にもなれない、クラス変えの度に見下せる他人を探す最低最悪な人間。

他人の不幸を聞きつけると、エヴァ量産期のように笑うことが出来る最悪人間。

とかく、根暗で、真面目人間の皮を被った悪魔。

童貞が四十を過ぎれば魔法使いになれるというが、そんな事態になつたら僕はまずこの世界を片っ端から破壊しているであろう。

そんなことばかり思考して生きているから、異性どころか、同性の友人すらいなのだ。

しかし、仕方ない。

仕方ないのだ。

僕の責任ではない。

ウギヤールと生まれた頃から、僕を取り巻く状況は最悪であったが、それにしても自分はよくやっている方だ。

僕が先生なら、自分自身に二重丸をくれているであろう。もちろん、成績はオール5をくれてやる。

これがのび太くんなら、確実に小学生の頃に自殺しているぞ。

だから、僕には責任はない。

全ては親の、社会の、周囲の、ゆとり教育の、政権交代の、不況の、世界の、全宇宙の責任だ。

そう思い、弱くて自分からは何もしい自分を正当化する、無責任艦長も真っ青なくらいに無責任で、無気力で、無頓着で、無意味に生きている男

それがこの僕、ももやま・いつか桃山逸珂である。

都内の高校に通う二年の男子生徒。

友達はいない、彼女なんて、いるはずない。

今現在、春だが、別に関係ない。

出会いの季節だが、それはモテる奴限定の話だ。

多分、僕のような人間は、何度、輪廻転生を繰り返しても、こんな感じなんだろうなあ

「ふああ… 超、眠い……………」

だから僕は朝だというのに死んだように机に突っ伏し、窓際の一番後ろの席からクラスを眺めていた。

ホームルームが始まり、皆は席にすっかりついていてる。

といつても、先生の話を聞いているのは、三割程度であるが。

化粧を直す者、携帯でメールしている奴、隣とバカ騒ぎをしている輩、飯食ってる馬鹿。エトセトラ、エトセトラ…

「みんな、リア充ばっかだ…」
死ねばいいのに。

本当に、そう思った。

掛け値なしに、僕は皆に対して、そう思っていた。

まあ、そこで大量殺人を行わないのが、殺人鬼との違いであるが、とりあえず、リア充どもは脳内で4回づつ撲殺している。

死と4をかけているのである、かかってないか…

「はぁーい！みんな！先生の話をきけー！！つうかそこ弁当食うなー！！そこはPSPやってんじやなーい！！」

教卓の前に高校生のような女が立ち、相変わらずまとまりのない皆をまとめようと、声を張り上げている。

彼女は僕のクラスメイトではなく、れっきとした教師であった。

彼女の名前は初鮫恋春。

首に二重に巻いていても腰まで届くほどに長い金髪に、鮫のような鋭い歯、真ん丸い瞳が特徴的な幼い顔立ち。

身長は僕より頭半分くらい小さく、華奢な体型をしている、今日は赤いスーツ姿である。

経歴不明で、ボロツちいアパートに一人で暮らしているらしい。可愛いのに、彼氏がいないのか。

「……」

どれだけ可愛くても、彼氏がいなくても、僕には意味がない。

彼女は、僕なんて、その鮫のように鋭い歯牙にもかけない。

まあ、当たり前だけけれど。

だから僕は、初鮫先生は、嫌いじゃないけど、好きになれない。まあ、向こうもそうなんだらうけど。

「今日は転校生の女の子がいます、皆さん、仲良くして下さいね」先生の一言に、クラス中の男子共が騒ぎ出す。

僕は、とても居心地が悪かった。

うるさいなあ…

「先生ちゃんが転校生なんじゃねーの？」

男子の一人が先生を茶化す。

「うっさいなあー！！」

先生も先生で、挑発に乗って気だるそうに叫ぶ。

クラス中がドツと笑ったが、本当に、今の一言は面白かったか？僕は寝ぼけ眼をこする、もう眠りにつきたかった。

ああ、今日も変わらない一日だ。

「先生、私、もう出てきていいですか？」

意外だった、転校生も僕と同じ考えのようだ。

閉ざされたクラスの前の入り口あたりから、凜とした声が聞こえた。

よかった。

なんとなく、周囲を拒絶するような声色。

空気を読まないタイミング。

なんとなく、僕に似ているのだらうか、まあ、女だから、別に、仲良くなれないんだらうけど。

「はい、では、ええと…いぬかわくろ 狗川黒さん。よろしくお願いします」

先生は真面目な声で仕切りなおしを図った、そこはさすが教師で

あり、サマになっている。

しかし、それだけ聞いて、僕は瞳を閉じて、眠りにつこうとしていた。

夢はいい、夢なのだから。

何をしても自由だ、責任もとらなくていい。

教室のドアが開く音が響き、クラスは、なぜか静寂に包まれる。

そして、静かなクラスの中に上履きの足音、黒板の上をチョークが走る音が、順番に、小気味よく響いた

「皆さんはじめまして。この通り、難しい狗つて字に簡単な川、ちび黒サンボもしくは仮面ライダーブラックの黒で、狗川黒といいます」

やはり凜とした、綺麗な声だった、少しハスキーな感じがするが、そこもまた、いい。

しかし、ちびくるサンボとか、あんたいくつだ。

「仮面ライダークウガ世代ですが、一番好きな平成ライダーは龍騎です。好きな芸人はタイムマシン三号、好きなお菓子はうまい棒です、あとの趣向は秘密です」

な、なんかマニアックな人だな。

確かに、僕も一番龍騎が好きだが。

因みに、次点でブレイドである。

「以上、皆さん向けの挨拶は終わり、ですが 結構、簡素な自己紹介だな。」

他人に理解してもらおうと自己アピールしないと、この学校はやっていけないぞ。

美人なら男はそれでもいいんだが、女子にはぶられるときついぞ。まあ、関係ないけど。

眠い。

寝てしまおう。

どうせ、彼女が美少女だろうが宇宙人だろうが、未来人だろうが、機械生命体だろうが何だろうが、僕には関係ない。

「くん」

容姿を確認するまでもない。

「逸珂くん!!」

先ほどの凜とした声が叫んでいた、と、同時に、僕の脳天にチヨークが直撃する。

いきなりだったため僕は一気に覚醒し、思わず顔を上げた。

「いたあっ!?!」

空気のような存在でいたいから、感情的にならないようにしたいのに。

あまりに理不尽過ぎて、僕は、思わず叫び、立ち上がった。

「何するんです か!! 危ないじゃ」

しかし、僕の言葉は尻切れになってしまふ。

目を奪われてしまった、というのは、このときのためにある言葉なのだろう。

あまりに、彼女が綺麗過ぎたのだ。

チヨークの軌道上にいた転校生は、想像以上の、いや、想像していなかったレベルの美少女であった。

僕は周囲を確認した、やはり、このレベルの女はいなかった。

腰まで届くほどに長い黒髪。

挑発的な視線を送る、切れ長の瞳。

少しだけ赤く染まっているシャープな顎のラインと、ぷりっとした唇。

少し背が高いスタイル抜群のボディラインと、それを包む紺色のセーラー服。

かなりのサイズがある、放漫な胸。

上履きと、黒いストッキングを履いている、綺麗で細い脚。

全身の黒い衣類とその表情から、どこことなく、黒猫のような少女であつた。

特に、人間を達観したような視線で見ているその表情は本当に猫のようである、名前は狗川であるが。

しかし、どこのパーツを見ても、完璧である、服屋のマネキンも形無しである。

このまま、いい服を着せればファッション雑誌の表紙を飾れるのではないだろうか。

クラスが静かになつたのも頷ける、皆、彼女に見入っていたのだ

「大好きなあなたを振り向かせたかったのよ。私のかわいい桃山逸珂クン」

彼女は小悪魔のように微笑みながら右手を腰にあて、左手でこちらを指差し、僕の瞳を真っ直ぐに見つめて近づいてくる。

綺麗だつた。

まるで吸い込まれそうなほどの、目力であつた。

ん？

なんで、僕の名前知ってるんだ？

ん？

というか、今、最初と最後に何て言った？

「私はあなたの恋人です。文字通り私の全部をあげるから、覚悟を下さい。」

立ち上がっていた僕の目の前に、彼女が接近した。

気がふれて僕が手を出せば、その豊満なバストが余裕でつかめるくらいの至近距離、完全に他人ではない間合いである。

僕は耳と目と脳を疑った。

「なっ……」

言葉が出なかった。

意味が分からなかった。

転校生の美少女が、いきなり僕に告白をした。

いつフラグが立った？

「ふふっ、やつぱり驚いているようね、嬉しいわ。でも、こんなのは序の口よ。あなたと私の桜色のスクールライフは今、始まったばかり。授業中、昼休み、放課後、登下校、どの時間も私と一緒にいられるのだから、まあ、楽しむことね。私も楽しみだわ、というか、今凄く楽しい。ゾクゾクするわ」

彼女は頬を真っ赤に染め、身震いしながら、僕を見つめて言葉を紡いだ。

僕はわなわなと震えて、ただただ彼女の言葉を聞いていた。

一応、人違いの可能性も考慮し、周囲を見回した。

クラスは騒然としている、みんな瞳をおっぴろげて、口を半開きにして、のけぞっていた。

失神している奴もいるみたいだが、さすがにそれはオーバーだろう、いや、そうでもないか。

初鮫先生も、自分の金髪で首を絞めていた、どこのデスマタルですかあんたは。

「ふふっ、以上、逸珂くん向けの自己紹介はあなたのお口の恋人、
狗川黒が提供しました……」

君はどこかのお菓子メーカーですか!!

なんとということだろうか。

みんなの目の前で、ホームルーム中に告白されてしまった。

意味不明。

支離滅裂。

とりあえず、僕は彼女に対してろくなりアクションがとれなかった。

「なっなんなの…」

僕は、力なく呟いた。

初めての感覚に驚きながらも、僕は思考を整理しようとしたが、やっぱり無理だった。

腰が抜けたわけではないが脱力してしまい、ふらふらと机に座った。

彼女はクラスの皆に一礼する、皆は、のけぞった格好のまま、小さく頷いた。

そして、彼女はそのままの位置から、僕の隣の席の男子に「そこ、いいかしら?」とだけ訊き、そいつを移動させた。

「ってことで、これからよろしくたのむわね。逸珂くん」

そして僕を含むクラス中の皆がほぼ固まっている中、いきなり告白し、驚くべき手際で僕の隣に座った少女、いぬかわくろ 狗川黒は少し控えめに笑い、ウインクをした。

ストイックな感じがしたけど、全然禁欲的じゃない!!
欲望丸出しじゃないっすか!!

いや、突っこむべきはそこじゃない、この際、そこには触れない

第2話 私は欠けているから

1

午前中の授業を、僕は普通に受けた。

この学校は授業中席についていれば校則通りなので大丈夫、という暗黙のルールがある。

故に、例えば大声で叫んでも、ゲームをしていても、先生は叱らない。

僕も授業中は眠ることが多く、今日もそうしようとしたが、目が冴えてしまい、起きていた。

ホームルームで突然転校生の美少女に告白されたのだ、無理もない話である。

僕は、隣にいる彼女 狗川黒を横目でチラチラと見たのだが、普通に勉強をしており、別段変わったことなどなかった。

彼女も、授業を普通に受けていた。

いや、違う。

彼女は普段通りにしてるだけなのだろうが、しかし、それは僕とクラス全体を驚嘆させた。

そして、彼女について知ったことが多々あった。

まず彼女は、サウスポーターである。

しかし、左手が疲れたら右手を使うらしく、両手共に使っていた。尚且つ、頭が相当よいらしく、英語の授業ではスラスラと英文を読み、日本語の部分すら英語にして読んでしまい、先生が慌てて制止したくらいだ。

二限目の数学も、三限目の古文も、興味本意で次々と指命・質問されたが、即、返答し、先生達を絶句させた。

驚いたのは四限目の体育の授業だ。

今日は男女に分かれての野球の授業だったのだが、何と彼女はホームランを二回も打っていた。

それだけではない、更に驚いたのは、その二階回のホームランにクラス全員がざわめき、野球部の準レギュラーの男子が彼女に直接対決を申し出たのだ。

準レギュラーの男子のポジションはピッチャーであったが、彼が三回投球し、狗川がヒットを打てれば、彼女の勝ち、という勝負。結果は、一本目からホームランで、終わり。

彼女の凄さに、皆は驚嘆していた。

準レギュラー君は、泣いていた。

因みにホームルーム中の「あなたの彼女です」発言を冗談だと皆は受け止めていたため、僕はそのホームラン後も普通に授業を受けることが出来た。

が、しかし、何度か、彼女についてクラスメイトに本当に付き合い合っているのかを訊かれたが、僕はとりあえず違う、と答えておいた。だって、知らないもん彼女のこと。

午前中に分かったのは、彼女は僕が思っている以上に完璧ということだ。

因みに、ここでいう彼女とは、付き合い合っている恋人の彼女という意味ではない、念のため。

そして午前中の授業が終わり、本来なら、友達のいない僕には窮屈なはずの昼休みがやってきた

2

僕達は、図書室にいた。

この高校はクラスの教室がある第一校舎と、第二校舎に別れてお

り、第二校舎の一階にあるこの図書室は本の墓場
ブックガッソー

と呼ばれている。

利用者が、殆どいないのだ。

本の墓場をどう読んだらブックガッソーになるのか全く分からないが、新品の本が殆ど読まれる事なく死蔵されていく様は確かに墓場と呼ぶのにふさわしい、のかもしれない。

だから、この墓場と呼ばれた場所は、僕にとっては学校の中の唯一の聖地だった。

一人で、いられるから。

今日はいつもいるハズの司書さんも見えていなかった。

一人だけ、僕より背の小さい眼鏡の男子が本を読んでいたが、とりあえずスルー。

「ここなら、落ち着いて話せそうですね」

僕は、入り口から一番遠く、前後に本棚があり一番人目につかないテーブルに座った。

因みに、僕達というのは、僕と謎の転校生、狗川さんである。

「確かに、いい場所ね」

僕が彼女に声をかけ、ここまで連れてきた。

狗川黒。

転校生、しかも美少女。

腰まで届くほどに長い黒髪。

挑発的な視線を送る、切れ長の瞳。

シャープな顎のラインと、ぷりっとした唇。

少し背が高いスタイル抜群のボディラインと、それを包む紺色のセーラー服。

転校前の制服なのだろう、僕達の高校の制服は白いセーラー服だ。かなりのサイズがある、放漫な胸。

そんな狗川を、四限目の移動授業の混乱に乗じて、連れ出したのだ。

「ふふっ、いくら私が皆に注目されまくりの転校生だからって、人目を避けて… 肉食なのね、肉食なのねえ」

なぜ二度繰り返すの?!

そして彼女は、およよ、と嘔泣きを始めた。

紺色のブレザーの裾で、彼女は出てもいない涙を拭う。

「私、食べられちゃうのねメェ」

そして彼女は小悪魔的な笑みを浮かべつつ羊のように鳴き、セーラー服の胸の赤いリボンに手をかけた。

いくらドン臭い僕にも、次の行動は予想出来た。

脱ぐ気だ。

「違いますから!」

とつさに、彼女の手を握り、制止する。

彼女はえーっ、と残念そうに小さく呟き、椅子に座った。

何なんだ、本当にこのヒト。

規格外過ぎる。

「あ…」

手を握っていた事実気づき、僕は少し胸が熱くなるのを感じた。初めてだった、女の子の手を握るのは。

「ふふっ、握られちゃった」

柔らかかった。

傷一つない、まるで柔らかかな宝石のような、手であった。

人間の手って、やわらかいんだ…

あ、いやいや、そんなことで感動している場合じゃない。

今、問題なのは、まず彼女が何者なのか、である。

「あの… 僕、あなたと会ったことありましたっけ?」

「それは秘密ね」

即答だった。

驚くほどに早い回答で、僕は言及できなかつた。

彼女はふふつ、と笑い、口をしつかりと閉じてしまった。
どうやら、よほど秘密にしておきたいらしい。

「秘密なんだ…」

僕も、そこまで秘密にされて、それを知ろうとするほど、野暮ではなかった。

彼女と会ったことがあるのかわからないが、彼女は僕を知っている。

それだけ分かれば、まあ、この際いい、そう思った。

彼女が僕のことを好きというのは、何かの間違いなのだから。

だから、詳しいことは知らなくていい。

「というか、あなた、誰なんですか？」

でも、僕は訊いていた。

彼女の大体のことを知って、そして誤解を解こう。

こちらも彼女のことを少しは知らない、否定しづらい。

僕は君を知らないし、君とは釣り合わないし、多分、何かの人違いであることを、伝えよう、そう僕は思っていた。

「そうね、自己紹介がまだだったわね。私は狗川黒、家庭の事情で隣町から引っ越してきた転校生よ。」

長い黒髪を手でなびかせ、彼女は言う。

雑然としていた。

さっくりとしていた。

というか、それぐらいホームルームの段階でご存知であった。

「あの… 詳しくお願い出来ますか」

だから、僕がこう質問することも、当然の反応である。

「詳しく？そうね…」

彼女は自分の胸に手をあてて、頬を桜色に染めて僕を真っ直ぐに

見つめる。

「Cカップよ」

一瞬、僕はその谷間を凝視してしまうが、その後すぐ目を逸らした

「僕、今何も聞かなかったんで!!」

彼女は冗談よ、といって小さく笑った。

僕は、からかわれているのか?!

「でも、逸珂くん。私のこと、もう大体は知ってるじゃない」

規格外な彼女に、予想外の質問をされ、僕は少し驚いた。

「えっ?」

大体知ってるって、知らないですけど。

今日会ったばかりだし。

「例えば左利きだとか、運動神経抜群だとか、携帯はAUで、ストラップはドコモダケだとか、バイリンガル過ぎて教科書の日本語部分すら英語で喋っちゃうとか、野球部の全力投球を打ち返しちゃうとか」

僕は言葉が出なかった。

四限までの授業で彼女を見つめていたことを、彼女は完全に見抜いていた。

それを分かっているなお、彼女は普通に、授業を受けていたのだ。

「今日のパンツは白のレースだとか」

彼女は視線を自分の足元に移す。

「ぶっ!?!」

僕は、テーブルに頭を打ち付け、オーバーリアクション気味に驚いた。

「やだ、赤くなってる、かわいいう」

彼女は本当に楽しそうに笑った。
多分、今日一番の笑顔であろう。

「からかわないでくださいよっ!」
僕は恥ずかしくなり、図書室内だというのに、叫んでいた。
今日は人がほばいないからいいが、いつもならば怒られているだ
ろう。

「ふふつ、喜んでるくせにい
お見通しだった。」

僕は彼女にからかわれて、困りながらも、多分、今、かなりにや
けている。

結構、いや、かなり楽しい。

でも、それじゃいけない。

「うつ… いいですね完璧だと… 僕とは大違いだ」

僕は、自嘲的な笑みをして見せた。

そう、彼女は完璧だから。

だから、僕とはあまりにつりあわない。

彼女の話聞いて、僕はそれを痛いほど感じていた。

「ん?」

彼女は僕の様子の变化に、少し表情を曇らせる。

「僕はどうしようもない低スペック人間だから」

僕は頬杖をしながら、俯く。

そうだ、僕はただただ、ルールに縛られているだけの存在。

他人に迷惑をかけていなければ、いつかは報われると思っている、
人間。

「きつと、彼女とか好きとか、君の勘違いだよ」

僕は机に突っ伏した。

そう、多分、人違いだ。

君みたいな娘が、僕を好きなわけがない。

「そんなことないわ」

冷静だった彼女の語気が強くなる、椅子から立ち上がったようであった。

「私は全然、不完全な人間よ。欠けているの、三日月のように」

突っ伏した僕の背後から、彼女の声が聞こえる。

三日月って、かなり欠けてるじゃないか。

というか、欠けている部分が殆どじゃないか。

そんなことはない。

君は完璧だ。

四限までの授業中の君を見た僕には、分かる。

勉強も、運動も出来る。

僕以外の男と付き合ったほうがいい、もっと釣り合う奴と。

そう、君に似合った完璧な男子とばら色の高校生生活をエンジョイするべきなんだ。

授業中にメモ帳の切れ端を投げ合って、休み時間には常にイチヤイチヤし、登下校の際には手を繋いだりなんかしちゃったり、休日にはデートしたり、その後は家に泊まったり、まったり泊めたり、エトセトラ、エトセトラ

君は、そうあるべきなん

「あなたがいて初めて、私は満ちるのよ」

机に突っ伏した僕の背中に、彼女が覆いかぶさる。

そして、驚くほどに柔らかい彼女の両方手の指先が、僕の両手上から包む。

まるで指先から全身に暖かい光が走り、彼女に包まれているような感覚であった。

「えっ?!」

彼女の言う満たされている、とは、こういう感覚なのだろうか。彼女も今、多分、満たされているのだろうか。

「ねえ… 私、迷惑かしら?」

呼吸を感じる、彼女の、リラックスしきった息づかいを。

「べ、別にそんなんじや…」

背中に押し付けられた、放漫な胸から、心臓の鼓動を感じる。

彼女は全身から力が抜いたようで、心地よい重みを背中に感じた。

「じゃあ、私が迫ってあげる… ルール通りに生きて、息苦しくなってる逸珂クンを、私が境界線上の連れてってあげる」

彼女は、強く、僕の手を握った。

僕は、確かに、今までの自分が、ルール通りに生きることが息苦しかった。

でも、彼女は、その外側の世界へ、導いてくれる、というのだ。いや、外と今の間、ルールを外れないギリギリのラインの上、境界線上の世界。

そして、僕も多分、同じように

「って、もう時間なの?」

彼女が素っ頓狂な声をあげる。

予鈴が鳴っていた、授業開始5分前のものであった。

彼女は名残惜しそうに、僕の体から離れ、背後の本棚にもたれ掛かる。

僕は椅子から立ち上がり、そんな彼女と向き合った。

「でも分かったから、狗川さん。君が僕のこと好きだって、分かったから」

そう、彼女は、勘違いではなく、僕を好きなのだろう。

理由は相変わらず分からなかったが、それでも、それだけは、理解できた。

だから、今はそれだけでいい。

これから、彼女のことを知っていけばいい、境界線上の世界で

「ありがとう、今日ほど生きててよかったと思った日はないわ」

オーバーだあな、と言おうとしたが、やめておいた。

きつと彼女は、大袈裟に言ったわけではない。

理由は全く分からないが、彼女は僕が好きなのだ。

だから、僕は、彼女と仲良くしていこうと思う。

「こちらこそ、よろしくね、狗川さ… はむっ?!」

僕の口は、彼女の手で塞がれた。

彼女はニコリ、と微笑んだ。

「く・ろ」

口の動きを強調し、彼女は自分の名前を言う。

下の名前で呼べ、ということだろう。

何となく、彼女の言いたいことが分かった。

「く… クロっ、行く?」

初めて、僕は女の子を下の名前で呼んだ。

ちょっと気恥ずかしく、俯いてしまったが、彼女はそんな僕の手

を、優しく握り締める。

「そうね、逸珂くん」

狗川黒は、僕の横に立ち、満面の笑みを見せた。

春の暖かい風が、開けっ放しだった図書室の窓から吹き、彼女の長い髪と、スカートを揺らす。

彼女は笑顔のまま、髪を手で押さえつつ、初めの一步を踏み出す。

そして、僕達は走り出した

つづく

第3話 ふふっ、保健って楽しいわね。

1

五限の授業は、保健だった。

さっきまで体育だったのに保健が別にあんのかよ、というツッコミは無用である。

この授業は、我らが2年C組の担任である初鮫恋春先生が担当である。

初鮫先生は寛容だ。

授業中、眠っていても許してくれる。

ただ、暗黙のルールで、授業を妨害しなければ、というものがある。

それさえ破らなければ、初鮫先生の授業は何をしてもいい、とクラスの間中は思っている。

昼休みの後ということもあり、午後の授業の時間はやむを得ず眠ることが多いのだが、今日は色々な事が起きすぎていて、僕は目が冴えていた。

睡魔が来なかったわけではない。

それ以上に問題なことか、あるのだ。

やばい。

腹が減ってしまった。

休み時間に、狗川黒と図書室に行っていたため、全く食事が採れなかったのだ。

僕は腹を押さえつつ、少し前のめりの体勢になる。

「初鮫先生！」

いきなり、僕の隣の席の黒が手を挙げる。

「きゃっ?! なんですか狗川さん？」

先生もいきなりのことに驚き、甲高い声をあげる。

クラスの皆も一瞬だけざわついた。

「まだ保健体育の教科書がないので、隣のコに見せてもらっていいですか？」

ニコツと笑い、了承を求める黒。

「ええ、いいですよ。桃山くん、見せてあげてね。あ、でも桃山くん、ザビエルさんとか足利氏に落書きとかしてないですよね？」

断る理由もないため、笑顔で了承する初鮫先生。

でも付け加えた一言が、やっぱりどこかズレている。

僕は歴史上の人物に落書きなんかしません。

「大丈夫ですよ、とうかしてないです普通に」

しかし、クラス中はその一言が面白いらしく、何人かの生徒がクスクス笑った。

相変わらず僕は、みんなの笑いのツボが分からない。

今の一言、そんなに面白かったのか。

「作戦成功ね」

僕にしか聞こえないような小声で黒は言い、小悪魔的な笑みを見せる。

そして、彼女は自身の机と僕の机を密着させ、その隙間に教科書を置いた。

「ちょ、授業中は私語は駄目だつて」

僕は割と真剣に言葉を返すが、彼女は相変わらずニコニコしており、悪びれる様子が全くない。

「大丈夫よ、ヒソヒソと話すくらいなら。皆に迷惑かけないようにするし」

多分、彼女にとって、他人に迷惑がかからない行為は悪いことではないのだろう。

「ええー」

なるほど、これが境界線上の世界か。

名前はかっこいいけど、そんなに凄いことではないなあ、と思った。

ただのヒソヒソ話じゃないですか。

まあ、それでも確かに、僕にとってはルールの外と中の境界線だけれど。

「陰」

そうそう、境界せん？

「は？」

僕は、耳を疑った。

隣から、なにやら卑猥な単語を囁かれた気がしたのだ。

「勃」

「ブツ！」

僕は噴出してしまった。

何ということだろうか、彼女が保健の教科書の、何やら男女の性のお話のページを開き、頬を少し赤らめていた。

因みに、今授業でやっているのは、人体の構造などについてであ

る。ちょっと範囲が違う。

「ふふっ、逸珂くん、かわいい」

僕の反応を見て微笑む黒。

なんて人だろつか、考えられん。

「かつ、からかわないでって…」

「むちむちボディのスク水ブルマ」

間髪入れずに彼女は呟く。

というか、何か保健じゃないマニアックな単語になってるし

「も、もう…何を」

リアクションに困り、何も言えないヘタレな僕がいた。

というか、一つし下のサイズの水着を着て窮屈に頬を赤らめてくねくねと体を動かしている黒のことを考えてしまっていた。

なんたることだ、不潔過ぎる。

脳に苔こけが生えているのではないか、おそらく。

「ふふっ保健って楽しいわね」

「中学生男子ですかあなたは」

僕が少し呆れたようにツッコむが、彼女はそれでも嬉しそうに笑う。

「それより、逸珂くん、お腹減ったんじゃない？」

なんか、いきなり話題が変わった気がするが、とりあえず気にしないことにした。

彼女は本当に観察能力に長けているらしい、何もかもお見通しであつた。

「うっ…」

彼女は仕方ないなあ、といった表情で、机の中からソイジョイ（莓味）を取り出した。

「ほら、食べて」

僕は教科書を縦に置き、差し出されたソイジョイを隠しつつ受け取った。

「だけどさ…」

受け取ったソイジョイを、僕は机に隠そうとする。

確かに、このうえなく腹は減っているが、授業中に食べていいんだらうか。

「栄養補給は必要よ」

心配そうに言う黒。

「君はいいの？」

僕は彼女に返そうと、ソイジョイを差し出す。

彼女の好意は嬉しいが、昼休みに食事がとれていないのは彼女も同じだと思ったからだ。

「私は授業開始三十秒前におにぎり食べたわ、そっちのが良かった？」

彼女は僕が差し出したソイジョイを、受け取らなかった。

相変わらず驚くべき手際である。

確か五分前の予鈴が鳴り図書室から帰ってきて、残り時間はもう一分なかったハズだ。

僕が教科書やらを用意して臨戦体勢を整えている合間に、彼女は取り損ねたランチを食べたというのか。

「それは… 興味はあるけど」

そんな彼女が作ったライスボールの味は非常に興味深い、とりあえず今は無理だと思った。

授業中におにぎりを頬張れるほど、僕に勇気はなかった。

というか、ソイジョイも、あまり気乗りはしないけど。

「うれしいわ、今度作ってあげる じゃ、今はコレね」
彼女は本当に嬉しそうに笑った。

そんな彼女の厚意を、僕はむげにすることが出来なかった。

「じゃ… 頂くよ」

僕がそう言うと、彼女は本当に嬉しそうに頷く。

「うん」

小さなソイジョイを更に一口サイズにちぎり、数回に分けて食べた。

これが今の僕の、境界線上、いや、多分、ギリギリアウトだ。でも、先生も黒板に長つたらしい文を書いていて、気づかなかつたので、なんとかなつた。

「美味しかった…」

とは言うものの、ハラハラしながら食べたため、味わうことなど殆ど出来なかつた。

「あ…」

僕は机に視線を落とした。

食べカスが、机に落ちてしまっていたのだ。

よし、ティッシュで包んどこう。

さて、ティッシュは確か学ランの右ポケットに

「…えーッ!?!」

右ポケットに手を突っ込んだ僕は、叫んでいた。

「きゃうん?!何なんですか桃山くん?!」

黒板に文字を書いてた初鮫先生が驚き、ビクンと奮えて振り返る。

そして、クラス中の皆の視線が僕に突き刺さる。

僕が聞きたいよ!!

「つと」

僕はとりあえず隣の黒にエクスキューズな視線を送る。

彼女にフォローしてもらおう。

というか、彼女の仕業だろうこれは。

なんとか、クールな一言でこの場をやり過ごそう。

そんな視線を真っ直ぐに彼女に送った、が

「が・ん・ば・れ?」

僕は小さく呟く。

笑顔を見せる彼女の口の動きを読み取ったのだ。

頑張れ？

つまりは、この状況を自分で打開しろ、と？

あなた、どんだけなんですか！

「えーと… あの、初鮫先生のかいさに今更気づきまして、思わず叫んでしまいました！！フォーマルなスーツを着ているのにかわいさが更に強調されてしまうなんて奇跡です！！それだけです！すみませんでした！！」

慌てた僕はとりあえずそれらしい言葉を羅列した。

先生が納得してくれることを祈り、僕は頭を何度か下げ、謝罪する。

「えっ… そんな困ります、生徒にイキナリ告白なんかされちゃっても私にはカレが っっていうか気づくの遅ッ!？」

意外といった表情でビツクリする初鮫先生。

というか自分のかわいさにそこまで自信が!？

というか先生、独りモンじゃなかったの!？

クラスの男子共が呻いていた、先生に彼氏がいたという事実が、あまりにショッキングだったんだろう。

「すみません先生！僕の目がフシアナでした！」

なぜか僕は、更に謝罪の言葉を口にしていった。

話がそういう方向に向かって全力疾走していたから仕方ない。

僕にはもう、そうするしかなかった。

「えーい廊下に立って枯れ山水でも見てしっかりお目々鍛えなさい
!!!」

「はっ!!はい!!」

初鮫先生は怒っていた、けれど全然迫力がない。

というか、本当にかわいい。

失礼かもしれないが、まるで妹に怒られた感覚だ。僕には妹いな
いけど。

プンスカ、という擬音がよく似合う人だな、と思った。
僕はとりあえず頭を下げ、黒と視線を合わせる。

「…」

ごめんね、という意味なのだろう、彼女は無言のまま手を合わせ
て片目を閉じて、謝罪のポーズをしていた。

目元と口元が完全に笑っていたが。

もっ、何なんだろうこの人は…

ため息をつきながら、僕はとりあえず廊下に出た

彼女が僕のポケットに入れた、とんでもない物を、^{プツ}気にしながら

つづく

第3話 ふふっ、保健って楽しいわね。(後書き)

18 禁バージョンとは、ちょっとだけ違います。

第4話 私の最高傑作です。

午後の廊下は、春の暖かい陽気に包まれていた。

「はあ… ありえないよ先生。こんなの…」

僕は廊下に出て、壁にもたれかかった。

そして、向かい側の壁にある、大きな枯山水の複製品を見つめて、ため息をもらした。

というか先生、コレは如何なものなんでしょうか!?

廊下に立たせるのってよくないですよ本気で。

最近のうるさい保護者が聞いたら黙っちゃいませんよ。

まあ、いいですけど。

何より、事の発端は先生じゃないし。

そう、何よりもありえないのは、狗川黒の行動である

「黒… ありえないよ、コレはさすがに」

狗川黒、なんていうエクセントリックな女の子なのだろうか。

よりによって僕の間隙について、ポケットに『こんなもの』を入れるなんて。

というか、いつの間に入れたんだろう。

そう、あの時、僕が奇声を上げたのは、ポケットの中に彼女の私物が入ってたからだ。

まあ、それが爪切りとかなら、まだビックリするだけで済んだの

だ。

よりによって、彼女は

自分のパンツを、僕のポケットに入れたのだ。

いつのタイミングで入れたのかは完璧に分からない。

授業開始前か、はたまたあの図書室でか、まさかとは思うが午前中の授業の段階で入っていたのか。

一番考えられるのは、四限の体育の授業の時間の中で、更衣室に忍び込んで入れた、というパターンであるが、もし彼女がそれを行ったとしたら、手際が良すぎる。

というかパンツを入れたら、その後の授業はノーパンで受けなければならぬではないか。

というか、体操着に赤いブルマにノーパンなんて、犯罪ですよ黒さん。

まあ、これだけのことをする彼女にことだ、用意周到にスペアの下着くらい持っているのだろう。

「あつ…」

僕は思わず、変な声を出してしまった。

なんか、胸が熱くなってきた。

心臓が異様に早く脈を打つのがわかる。

意味が分からない。

彼女の姿で、興奮している、というのだろうか。

いや、そうなのだろう。

「ヤバイ…」

僕は瞳を閉じて、前のめりになった。

そんなことは、絶対にいけない。

と心の中の天使が頭上で囁くような感覚がした。
何という古典的表現であろうか、もう絶滅したのかと思った。
触りたい、今、彼女の下着に。

触っちゃいな、大体、彼女からお前のポケットに入れたんじゃないか。
えか。

そして、頭上で心の中の悪魔が囁いた。
なにやらヤリを持っている僕だ、これと天使はワンセットである
が、今回は、悪魔の主張が正しいような気がした。

だって、彼女から下着を入れてきたんだぜ、これは、もう触って
くれって意思表示じゃないか。

頭上の悪魔が天使を蹴飛ばし、再び囁く。
確かに、そうなのだ。

このパンツは狗川黒が入れてきたものなのだ、別に、僕が脱がせ
たわけでも、更衣室からパクったわけでもない、彼女がやったのだ、
しかも、面白半分で。

なら、触るくらい、全く問題ないではないか。
いや、むしろ彼女は、触った感想くらい普通に訊いてくるかもし
れない。

なんで嗅がなかったか、くらい訊くかもしれない　あ、いや、
流石にそれはないか、ただの痴女じゃないか。

とりあえず、触ってみよう。大体、黒は僕の彼女だろう。彼女の
パンツを触るのは義務だ。

頭上の心の悪魔が勝利を収めた、

というか、彼女は彼女ではないが。

哀れ天使は、白い羽をもがれ、ずたぼろになって消えていった。

僕は悪魔に心を支配されてしまったのだ、と、良心が痛まないように、そう思うようにした。

そう、全部、悪魔の仕業だ！！

ありもしないものに責任転換し、僕は目を閉じて、男の夢が詰まった右のポケットに手を入れた

「うおっ…」

柔らかかった。

僕は学ランの右ポケットで

シルクの感触が触覚を刺激する、こんなにさわり心地のよい物体が、この世界にあったのか。

というか、これが彼女の下半身を包んでいたんだよな。

色は白。

目を閉じたまま、彼女の全身を想像する。

スタイル抜群の、彼女。

余分な肉がついていない体に、けしからない豊満な谷間、そして、すらっとした両脚。

なぜか想像上の彼女は下着姿で、僕の部屋でグラビアアイドルのようなポーズで僕に艶かしい視線を送っていた

我ながら、酷い妄想である。

匂いとか 嗅いだら変態だよなあ。

駄目だ、それだけは。

それだけは

「ん？」

最低な事で悩んでいると、僕は何かがパンツの中に包まれていことに気づいた。

僕は器用にその紙だけポケットから取り出してみた。

「これは」

それは、ぐちゃぐちゃに丸められたメモ帳であった。

僕は内容が気になり、それを両手で掴み、思い切り開いた

「私の最高傑作です」

僕は、思わず声に出して読んでしまった。

イントネーションも完璧で、なぜか台詞に力が入った、無駄に。

達筆で、バランスの良さのなかにも柔らかかみのある字で、書かれてあった「私の最高傑作です」、と。

ありえない。

これは、パンツの、ひいては性的なアピールなのか。

にしたって、童貞には刺激が強すぎる。

確かに、凶暴といったら凶暴だ。

出来ればもうちょっと、刺激の弱いものからにしてほしい。

飛行機だって、徐々に離陸するではないか。

「へーっ君ってパンツ職人なんスか？」

僕は心臓が口から飛び出るくらいに、驚いた。

「なっ!？」

目の前から女の子の甲高い声が出たのだ。

ありえない、聞かれていたなんて。

聞かれてしまっていた。

声に出して読みたくない日本語を、思わず口に出した一言を、他人に聞かれてしまった。

僕は心臓が飛び出る思いであった。

「だ、誰ですか君はっ……」

また叫びたかったが、とりあえず教室の中の先生に今度はどこに立たされるか不安なため、それだけは耐えた。

ノサツプあたりに立たされ、択捉島を見ながら頭を冷やせと言われるかもしれない。

「ねえ、君の最高傑作のそのパンツ、貸してくれないっすか？」

その少女は、首を傾げて、僕に意味不明な要求をする。

「うっ……」

叫びたい気持ちを耐えつつ、僕は思い切り後退りをした。

何なんですか、本気で。

というか、質問に答えてくださいよ。

僕は眼前の少女を見つめて、そう思った

そして、僕は、その少女を思わず二度見した。

可愛かったのだ。

眼前の少女は、初鮫先生や黒と同じレベルの造形の完成度の高さであった。

僕より頭半分ほど低い身長で、少し丸みを帯びた女性らしいラインの体。

そして、それを包む、この学校指定の白いセーラー服。

黒に負けず劣らずの、いや、彼女よりも若干大きい、豊満で、尚且つ弾力性のあるバスト。

午後の太陽に輝く、ポニーテールにまとめられ肩甲骨のあたりまで伸びた緑色の髪。

すっと通った鼻に、丸い瞳、少し幼い顔立ち。

そんな彼女は、ニコニコと太陽のように明るく笑っていた。

「へへへっ、ねえ、貸して下さいっスよお」

大きな枯山水をバックに天井に立ち、僕のことを見下ろしながら

つづく

第5話 なんでパンツを被るのさ！

1

「ねえ、そのパンツ貸してくれないっすか？」

叫びたい気持ちを耐えつつ、僕は思い切り後退りをする。

ここで叫べば、教室から初鮫先生がズバツと参上して、僕は択捉か竹島で立つてるとか言われそうだからだ。

どちらにも、遠慮しておきたい。

そして、僕は後退りして壁にもたれ掛かりつつも、まじまじとその少女を見つめた

「な、なぜ… パンツを」

僕より頭半分ほどの身長で、少し丸みを帯びた女性らしいラインの体。

そして、それを包む、この学校指定の白いセーラー服。

黒に負けず劣らずの、いや、彼女よりも若干大きい、豊満なバスト。

午後の太陽に輝く、緑色のポニーテールの髪。

すっと通った鼻に、丸い瞳で、ヒマワリのように笑顔を咲かせている。

そんないでたちのふわふわとした印象の美少女が、大きな枯山水をバックに、僕の眼前の天井に立っていた。

「というか 君は誰？」

そう、逆さなのだ。

彼女だけではなく、胸や髪やスカートなど、逆さになっていたら本来下に垂れるものすら、天井に向かって伸びており、重力を無視しているのだ。

「私？ああ、私は猿白砂^{さるしろ・さばく}麦^{むぎ}って名前っス」

ニコツとはにかみ、彼女は華麗に一回転しながら床に着地する。そして、その華奢な脚で僕の前に立ちふさがった。何となく、ではあるが、天然系の印象を受けた。悩みがなさそうである。

「なんだか、頭の上に蝶々が飛んでいるし…」

「え、見たことないけど、同級生？」

僕は記憶力があまりよろしくない方であるが、こんな特徴的な特徴をもつ少女、一度見たら忘れない。

断言できる、僕は彼女を見たことがない。

「君がこのクラスでしょ！？隣のA組だよ。まあ、私はあまり人前には顔を出さないからねえ、まあ、成績も恐るべき低空飛行っスよ。」

彼女はアハハとのん気に笑う。

「どうやら、あまり低空飛行な成績にはこだわっていないようであった。」

「あ、それよりさ、パンツ貸して下さいっス」

そして、申し訳なさそうに頭を下げ、再び謎の要求を突きつけた。

「な、だから…なんでパンツが欲しいの？」

「一応、この学ランの中にはパンツがあるが、僕のものではないため、あまり手渡ししたくなかった。」

持ち主の狗川に返さなければいけない、ハズなのだ。

まさか彼女もプレゼントするつもりで僕に渡したわけではないだ

ろう。

「穿いてくるの忘れたんで、朝寝坊しちゃって」

スカートを押さえながら、頬を膨らませる。

「……」

言葉が出なかった。

僕は、ただただ、驚いていた。

パンツを穿き忘れるような頭が明るい少女がこの日本に、しかも、同じ学校にいたなんて。

天然という簡単な言葉で、こういう少女を片付けていいんだろうか。

なんだか、違うカテゴリーに属している気がしてきた。

気のせいだと、思いたい。

「はい、どうぞ」

僕は白い布切れをポケットから出し、彼女に差し出す。

「あ、ありがとうっす」

彼女はそれを、頭に被った。

それで、僕は狗川のパンツの形状をしっかりと確認することが出来た。

いや、確認してしまったのだ。

レース調のアダルトな感じのパンツであった、しかも、肌を覆う面積が少ないときたもんだ。

というか、それは大した問題ではなかった

「なっ、なんでパンツを被るのさ！」

僕に言われ、彼女はさすがに慌てた様子でパンツを頭から脱がした。

「あ、ごめ、逆さになってたらこっちがお尻なのかと思ったっす」

彼女は少しだけ照れながら、パンツを穿き始めた。

と、同時に、すさまじく大胆な更衣シーンを視界に入れないよう

に、俯いた。

「な、なんなの……」

なぜ尻と頭を間違える！？

なぜ人前で着脱する？！

と、ツツコミを入れる気すら萎えていた。

まあ、いいよね、多分。

この状況なら百人の中で九十九人はツツコムだろうから、僕は別にいいよね、スルーしても。

「よっしゃ、これで完璧っスー！！」

彼女は穿き終えた様子で、くるくると廊下で華麗にターンをしてみせた。

「完璧なのはいいけど、お尻が冷えるから今度は忘れないようにね」

まあ、春だから体を壊すほど冷えることはないだろうけれど、もし今度穿き忘れたらスカートの中を見られないように気をつけて欲しい、と思う。

次はパンツ貸せないし。

「ありがとっ！！気をつけるよっスー！！へへっ、私、キミのこと気に入っちゃったかも、名前は？」

彼女は赤面しながら笑い、僕の手を握り締める。

石鹸やシャンプーのような、いい匂いがした。

恥ずかしながら、僕はどきどきしていた。

胸が、熱く、心臓が速く脈打つのが、自分で分かった。

「ぼ、僕は、桃山逸珂、普通の高校生だよ」

彼女の手から自らの手を離し、照れながらも僕は笑った。

ちよっと根暗だけれど、僕は普通だと思った。

極めて普通だ、普通過ぎて、物足りないくらいに普通である。

「いい名前っスね、逸珂ケン… か あ、そうだ!」

彼女は何かを思い出したようで、ぱん、と手を合わせる。

「はい、どうぞっス!」

そして、彼女はスカートのポケットの中から、何かが入っている茶色い紙袋を差し出した。

「え、なにこれ…」

生理用品!? んなわけないか。

手のひらの乗るサイズの茶色い紙袋には白いシールが貼ってあったが、何が入っているのか、よくわからなかった。

そんな得体の知れない物を、彼女は少し強引に手渡した。

「かにパン!!」

両手でピースサインを出し、彼女は、にぱっ、と笑う。

「は、発明ボーイ?」

今の僕の発言にはとりあえず意味はない。

つつか、平成生まれは知らんだろうかニぱん。

しかし、かにパンということは、カニが入ったパン、ということであろう。

袋越しに触った感触からすると、揚げたカレーパンに近い表面であるらしく、匂いも美味しそうである。

さすがに温かくはなかったが、先ほどソイジョイを食べていなかったら、多分今、食べているであろう。

「じゃ、また会いましょう逸珂っち!」

僕がにパンに集中している間に、彼女は枯山水の絵の横の窓に腰を下ろしていた。

彼女の動きが速すぎて、虚をつかれたような感じである。

「って危なっ!」

慌てて制止する僕の声と同時に、彼女は笑顔のまま体を後ろに反らし、頭から落下した。

おい、ここは二階

「………… マジですか」

窓に身を乗り出して下を見たが、誰もいなかった。

まあ、大丈夫だろう。

気休めではなく、僕はそう思った。

だって、重力を完璧に無視して、天井にぶらさがれる人間が窓から落ちて怪我をするとは思えない。

きつと、着地したか、壁を伝ってどこかに行ったのだろうか、おそらく、多分。

「なんだっただろう……」

僕は、春の日差しが差し込む静かな廊下に一人取り残された。

かにパンの袋を学ランのポケットにしまいながら、僕はにやけていた。

どうやら、お尻と頭を間違える美少女に、気に入られてしまったらしい。

告白されたり、パンツを貸したり、本当に今日は慌ただしい日だ

2

ようやく下校時間だった。

やっとだ。

思えば、今日は色々ありすぎた。

朝のホームルームではいきなり転校生の美少女に告白されて接吻され、昼休みに図書室行って、知らない間に学ランにパンツ入れられたり、そのパンツを宙ぶらりんの美少女にあげたり…… 本当に、色々なことが凝縮し過ぎである。

誰か脚本家を呼べ、この世界を作った奴がいるならば、僕が文句を言ってくれる。

まあ、それは冗談として、とにかく、僕の普通の一年分くらいのイベントが一気に押し寄せたかのような濃密な一日であった。

「今日は、忙しかったな……」

僕と狗川は、学校の敷地内から出て、桜の並木道の真ん中を歩いていった。

桜は満開、そして生暖かい風が吹いていて日差しもよく、いかにも春といった感じだった。

そうだった。

僕は、あまりに卑屈になっていたから気づかなかったが、春、だったのだ

「ねえ、あれ、どうしたの？」

隣を歩く狗川は、少しだけ赤面し、僕の顔を覗き込む。

あれ、とはパンツのことであろう。

僕がポケットに入れられてから特に話題にしなかったため、彼女の意外に思ったのだろう。

「ああ、パンツ穿き忘れてた女の子がいたから、あげちゃったよ」
僕は正直に言った。

彼女は首を傾げて、少し残念そうな表情であった。

「勿体ないことをするのね……」

僕は意外だった。

彼女が、僕の言葉を疑わない。

よく、パンツ穿き忘れた少女の存在を信じるな、と思った。

もし僕がそんな話を聞いたら、まずそんな話をする奴を疑う。

彼女は、僕を信用してくれている、ということなのだろうか。

というか、どのようにあのパンツを取り扱えばよかったのだろうか。

「まあいいわ、しかし 変な子もいるものね」
それ、あなたが言いますか。

「あ、今の台詞を聞いて、お前が言うなってツッコミを入れたら、
負けだからね」

自覚してらっしゃる?!

黒さんは自分が、まあまあ変なキャラと思ってる?!

まあ、変なキャラだから、僕を好きなのかな。

それとも、わざとキャラを作ってるのかな。

でも、本当に今日は彼女のせいで

いや、彼女のおかげで

「ぷっ… は、ははは!?!」

僕は笑いが込み上げてしまった。

だって、有り得ないことばかりで、おかしいんだから。

今までの自分の悩みが、おもいきり矮小であるように感じられた

「ひひふふっ! 有り得ないし! だってポケットにパンツ入ってたんだ
よ?! しかも、宙ぶらりんのノーパン美少女もいるし! なんだかや
ばっ、ツボにハマったあっ!?!」

僕が思い切り笑うので、彼女は満足そうに、静かに笑う。

「いきなりね、逸珂くん。でも、そういう突拍子もない所も、しゅ
きよ」

突拍子もない彼女が真顔で噛んだので、隣を歩く僕は更に笑って
しまった。

「あっ!?! 笑わないでよ逸珂くん、噛んじゃうのは仕方ないんだか

ら!!」

彼女は噛んだことに気づいた様子で、赤面し、僕のにやけた顔を両手で押さえた。

珍しく慌てているようすで、彼女も気にしているようであった。意外な一面である、多分、大切な台詞ほど噛んでしまうのであるう。

「ご、ごめ!!でも… やば、まだ腹いた… パンツがつ面白ッ!!」

彼女を笑うつもりはない、が、まだ僕は笑っていた。

「もう、でもいいわ。あなたの笑顔が見れてよかったわ」

彼女は僕の顔から手を離し、ふふっ、と満足そうに笑う。

僕は、こう思った。

生きてるって、楽しいのかもしれない。

生きていても苦しいことだけしかない、と思っていたが、違うのかもしれない。

黒は、明日は何をしでかすんだろう。

僕には全く予想がつかない。

だけど、いや、だから面白い。

きつと明日からも、こんな日々が続いていくのだろう。

僕は心から、そう願いたい。

なんか、最終回みたいなモノログで今日という日を締め括るが、次回に続く

第6話 じゃあ、彼女二号でいいです！

1

朝が来た。

一昨日までのベルトコンベアに乗せられたような日常から大きく逸脱した昨日、そして、それに続く今日が始まった。

とりあえず、朝ご飯を作り、洗濯を干し、朝食を食べ、着替えをして、鞆を背負い、玄関で靴を履く。

そう、ここまでは、とりあえずで済ますことが出来る範囲である。「さて、行くかな、あ、そうだ」

靴を脱ぎ、キッチンにまで戻り、スポーツバッグに昨日貰ったかにパンを入れる。

かにパン。
蟹のパン。

茶色い紙袋に包まれた、恐らくは蟹の中身が入った、揚げたカレーパンのようなパン。

今日の昼食で食べてみよう、きっと、美味しいハズである。

「これ、貰ったんだよね」
突然、不安になる。

昨日までの全ては、本当にあつた話だったのだろうか。

このかにパンも、本当は僕が買ったものなんじゃ、ないだろうか。狗川黒も、猿白砂麦も、ただの夢だったんじゃないだろうか。

「…ギャルゲーじゃあるまいし、そんなにいきなりモテ期が来るのか…」

と、いかにもギャルゲーの主人公のような台詞を吐き、僕は靴を履いたまま、俯いた。

タイトルバリの玄関の床に散る砂を見つめて、僕は、静止した。

「このまま、このままでしたら」

この家は、パンドラの箱だ。

眼前の白い扉を開けなければ、今日は来ない。

昨日のままだ。

今日は、彼女のいない今日かもしれない。

開けてみなければ分からないが、開けなければ、可能性は可能性のままではいられない。

僕は傷つかないで済む。

なら、ここで、止まっていた方が、いいんじゃないか。

自分の弱さに、僕は呆れつつも、まだ、動けないでいた。

無限大の可能性がある外の世界と、内側の世界の境界線上である、扉の前で。

「僕は」

しかし、扉は開いた。

僕が開けたわけではない。

扉が勝手に、開いたのだ

「おはよう、逸珂くん」

使途迎撃用の要塞都市のミサイルハッチの如く、勢いよく開かれた扉。

そして、彼女は爽やかな微笑を僕に見せながら、挨拶する。

狗川黒

いぬかわ・くる

謎の転校生。腰まで届くほどに長い黒髪。

挑発的な視線を送る、切れ長の瞳。

少しだけ赤く染まっているシャープな顎のラインと、ぷりつとした唇。

少し背が高いスタイル抜群のボディラインと、それを包む紺色のセーラー服。

かなりのサイズがある、放漫な胸。

どこをとつても完璧ではあるが、話の大事な所で噛むのというかわい一面の持ち合わせているのは二人だけの秘密だ。

「お、おはよう… 黒」

僕は啞然としながらも、彼女と初めての朝の挨拶を交わす。

しかし、ふと疑問が残った。

いや、残ったというには、あまりに大きすぎる問題であった。

「とつかかなんで僕の家を知っているの?!」

そうだ、学校の前の桜並木を抜けると二本の道に分かれるのだが、僕は右へ、彼女は左に別れて帰ったはずだ。

帰り道の途中で、彼女がついてきた様子もなかった。

どうして、とつか、どうやってこの位置を

「愛のなせる技よ」

「納得の出来る回答を求めたい」

僕としては珍しく、間髪入れずに言及した。

愛では相手の家の位置は確認出来ません。

「ふふつ、仲間の異星人に頼んで調べて貰ったのよ」

にやり、と笑い、彼女は青空を指差した。

「あなたは宇宙人ですか!!」

この娘は宇宙人だったのなら、まあ、今までの行動も、僕の好きな理由もなんとか納得できる。

宇宙人だから、地球人と価値観が違うのであろう。

だから、僕のような人間を好きなのだ、おそらく。

「というのはもちろん冗談で、これを辿ったのよ」

彼女は真顔で、手のひら大の布袋を差し出す。

その中には、青、黄色、赤、黒、紫色の米粒がぎっしりと詰めら

れていた。

「こ、米… 五色米？」

五色米とは、忍者が暗号のために使う道具である。

その色の組み合わせで、暗号を作っていた… らしい、確か。

「いつの間にそんなものを」

忍者の道具を持っていることはもはやつつ込むまい、多分自作したのだろう。

彼女は、自作した五色米をたよりに、僕の家に来たというのだ、驚くべきことに。

しかし、これを辿る、ということは、僕がこの五色米をもっていないといけない。

だが、僕はこの五色米を持たされた記憶がない。

多分、気づかないうちに、どこかに取り付けたのだろう。

本当に、どのタイミングで、そして、僕のどこにそんなものを取り付けたというのだろうか。

「昨日、一緒に帰るときにあなたの鞆に取り付けておいたわ」

彼女はくすくすと小悪魔的な微笑をたたえながら、僕のスポーツバックを指差す。

慌てて確認すると、彼女の持っている布袋と同じものが、底に貼りつけてあった。

こちらの袋は空であり、よく見てみると、米粒大の穴が開いていた。

この袋の中に五色米が入っていたのであろう。

僕が歩くと少しずつ、米が零れ落ちて、家までの道しるべになる、といった仕組みだ。

こんな凝ったギミックが作れるなら、GPSとかの方が、正確だと思うが、それは完璧にストーカーくさいやり方ではあった。

いや、今の段階でも既に、それに近いが。

というか

「あなたは忍者ですか!！」

これは美少女がやるからまだ笑いで済ませることが出来るけど、僕がやったら確実にポリス沙汰ですよ!!

というか、あなたのキャラだからギリギリのラインで許されてますよこの行為は!!

「いいえ、ケフィアです」

真顔で断言する黒。

いや、あなた健康食品じゃないから!!

本当に黒は、謎だらけである。

しかし、まだ彼女と出会って、二日目だ。

嘘みたいな本当の日常が、また始まる。

彼女の秘密はV3の26の秘密の如く、少しずつ明らかになっていくだろう。

そうやって彼女のことを知っていくことから、始まるんだとおもう。

彼女とか彼氏とか、恋人になるとか、それ以前に、僕は彼女を知らな過ぎる。

「あつ」

相変わらずキチンな理論を脳内で展開していた僕、は思わず間の抜けた声を出した。

彼女は玄関の中に入り、座り込んでいた僕の手を引く。

その勢いで、僕は立ち上がった。

「ふふっ、さあ行きましょう」

僕の隣で、彼女はなにか企んでいるかのような意味深な笑みを見せた

校門の前にある桜並木は、僕達の通う高校の人気スポットである。広い一直線の道は、太い幹の桜の木が幾つも立ち並んでおり、学校の用務員（って言い方はもう古いんだっけか）のおじいちゃんが清掃しているため、綺麗である。

しかも今は春、桜がしっかりと咲いており、花びらが舞い散っている。

僕と彼女は、丁度人間一人分のスペースを間に開けつつ、並んで歩いていた。

僕は、昨日よく眠れなかったために、すこしふらふらと、そして彼女は、まるでモデルのようにクールに歩いていた。

何か、対照的である。

まるで、ミロのビーナスの横に、お盆のナス人形が置いてあるようだ。

「あ、そういえば、五色米を作ってて思いついたんだけど」

彼女はぼん、と手を叩いて、こちらを向いた。

「え？」

五色米、黒が僕のバックにくっ付けた忍者の道具。

こうして彼女と僕が歩いているのも、彼女の作戦通り、なのだろう、恐らくは。

「ゴシキ・マイって、なんだかアイドルでいそうな名前ね。」

アイドルというか、この作者がつけそうな名前だな。

と、意味不明な思考が一瞬頭をよぎったが、すぐ忘れることにした。

「というか、よくあんな精巧に袋とか作れるね。手先、器用なんだ？」

彼女は、少し残念そうな顔をした。

「ちゃららららん」

そして、黒は謎の効果音を自分から口にした。

「ん？」

僕は意味がわからず、首を傾げる。

なにやら、今の効果音は、ギャルゲーで好感度が下がったときの音に聞こえたのだ。

多分、彼女は何か不満があるのであろう。

傾げた首の上の顔についた僕の眼球は、彼女を凝視していた。

なにか、ヒントがあるはずだ。

僕はなにか、勘違いをしているのか

「あ……」

彼女の手には、目かとまった。

彼女の細くてすべすべとした手は、親指と薬指のあたりに絆創膏が張られていた。

おそらく、五色米が落ちるギミックを作る際に怪我をしたのであろう。

僕は、胸がじん、となるのを感じた。

彼女は勉強や運動は完璧であるが、特別起用な人間じゃない。

僕と一緒に登校するために、怪我をしながらも、五色米が落ちる袋を作ったのだ。

しかも、タイミン的に、転校する前に作ったのであろう。

「ありがとう、黒」

クールな彼女が、僕のために夜な夜なソーイングセットを片手に裁縫をしている想像を勝手にして、僕は感謝の言葉を口にしていた。素直に、僕は嬉しかった。

「え。ここは、ツッコミ所だったのに……」
「こう素直に言われると、なにか、じんときちやうわね」

黒は照れているらしく顔を逸らし、胸に手を当てて瞳を閉じ。

彼女の的には、僕に「五色米入れる袋作るのに、なんでそんなに必死に!？」とツツコミをもらったほうが、気が楽なのだろう。

だけど、僕は彼女の努力が嬉しかった。

だから、僕も思ったことを素直に言ったのだ。

「嬉しいと思っただ。僕は」

僕は多分、笑っているのだろう。

本当に嬉しい時の笑顔なんて、何年ぶりだろうか。

彼女のおかげだ、僕が、こんな気持ちになれるのも。

「ふふっ、ねえ… 逸珂くん？」

黒も、嬉しそうであった。

赤面しているのが恥ずかしいらしく顔は逸らしたままであったが、彼女は小さな声で僕に話し掛ける。

「逸珂くん。じゃあ、お決まりのアレ、やってくれないかしら？ なんだか… 嬉しいから」

そして、彼女は僕の手を握りしめ、桜の木の影へと走った。

「え？」

突然の事態に、僕は気が動転しつつも、彼女と共に、桜の影。

お決まりのやつ、と言われても、僕にはわからなかった。

彼女と出合ったのは昨日であるし、二人には決まったサインや行為などない、ハズである。

「ほら、主人公が指切ったときにするアレ」

あ、ああ、アレね。

ギャルゲーやアニメでよくやる、調理実習か何かで主人公が指を切って、ヒロインが舐めるっていう、不衛生で全く合理的じゃないのに、グツとくる行為。

あれをやるというのか。

あれ、女が男にやってなかったか？

「え… ここで？」

ここは学校の皆が登校する校門の前、大きな桜の木の影に隠れたのはいいが、横から見たらまる見えである。

僕は戸惑っていた、彼女にも分かりやすく、戸惑っていた。

「ねええ、おねがい… ペロツてるだけでいいからっ、ね？」

黒は、僕のために頑張ってくれた。

その愛情に報いることが出来なくて、なにが男か。

大体、登校中に女の指を舐めてはいけないという校則はない、はずだ。

僕とて男根をもって生まれた生命体だ、草食系に類するわけではない、もてなかつただけだ。

断じて、女性を愛せないわけではない、と思う、愛したことがないから、分からないが。

「でも」

僕はごくり、と唾を飲んだ。

ここでやらねば、男ではない。

僕は桜の木に彼女をゆつくりともたれかからせる。

「あんっ」

妙に色っぽい声を出して、黒は顔を少し背けながら、しかし、こちらを弱い瞳で見つめる。

「…」

僕は、無言のまま、彼女の差し出した左手を左手で握り、一指し指に巻かれた絆創膏に指をかけた。

そして、ゆつくりと、剥いでいく。

「はうんっ… ちょっといたあい」

絆創膏を剥いだ黒は顔を赤くさせながら、小さく呻く。

指先は、小さな針の傷が、2、3できていた。

「ごめ… でも、消毒しておくね」

本来ならば口の中の雑菌をとりつける行為なんだろうが、僕は興奮したまま、ペロツと、唾液が少しだけついた舌を出した。

すっかり歯磨きしておいて、よかった。

自身の心臓がばくばくするのが、恥ずかしいくらいにわかった。

彼女の握った右手の脈が、早くなるのを感じる。

そして、僕はゆっくりとその舌を、彼女の指先に

「はう」

僕の舌先が、彼女の指先の皮膚に触れた、その時

「はーいつ!!おっはよー!!」

水爆の如く元気な挨拶が、頭上からかけられる。

そして、僕達の真横に人体が振ってきた。

「ひっ!!」

思わず、僕は黒の手を離して背後にのけぞる。

「なっ何よっ!?!」

さすがの彼女もびっくりしたらしく、木にしがみ付いて叫ぶ。

そりゃそうだ、人間がいきなり降って来たのだから。

「あ、ごめん!!驚いた?!」

降って来た人間は謝罪の言葉を口にして、両手で地面に着地しながら脚を十字で組む。

ロビンスペシャルだ。

技をかける相手こそいないものの、その逆立ちをしている体勢はロビンマスクの伝家の宝刀、ロビンスペシャルであった。

「というか、こいつは、いや、この少女は

「き、君は確か…」

驚きながらも、僕はその少女を見つめる。

僕よりも頭半分ほどの身長。

少し丸みを帯びた女性らしいラインの体。

そして、それを包む、この学校指定の白いセーラー服。

黒に負けず劣らずの、いや、彼女よりも若干大きい、豊満なバスト。

午後の太陽に輝く、緑色のポニーテールの髪。

すっと通った鼻に、丸い瞳で、ヒマワリのような笑顔を咲かせている。

「さ、猿白砂麦?」

そう、その少女は猿白砂麦であった。

「サハラ砂漠?」

黒は少し怪訝な表情で呟く。

サハラではなく猿白である。

「おはよう逸珂くん!!そして、はじめまして綺麗な女の人!!私は猿白砂麦です!!」

逆立ちの体勢から、両脚による普通の直立の体勢に戻し、元気よく挨拶をする猿白。

しかし、黒は僕とのお約束を邪魔され、少し機嫌を損ねていたらしく、小さく会釈するだけであった。

「私は狗川黒よ。しかし、何者なのかしら?」

そして、首を傾げて猿白をの全身を確認するかのように見つめて、つっけんどんに問い掛ける。

「いやー、私は逸珂くんの舎弟っス。パンツのお礼もまだしてないですし」

猿白は、黄色い蝶々がとまった頭を小さくぺこぺここと下げながら、僕の方へ視線を移す。

「というか、舎弟だったのか彼女は。」

「や、もつかにパンもらったしいいよ。僕、そんな凄いことしてないし」

僕は視線を逸らしながら、小さく呟く。
「そうだ。」

僕はただパンツを貸しただけ、それはパンになって返ってきた。それで、僕としては十分である。

「ああ、私のをあげたのってこの子ね。へえ…」

黒は、意味深な笑顔を僕に視線を送っていた。

「何がいいのだろうか、よく分からない。」

僕が他の女の子とかかわるのが、彼女としては気になった、ということなのだろうか。

「いいえ、お礼もそうなんですけど… あのファーストコンタクトで私の体に、魂にズバツと稲妻が走りました。私は、逸珂クンに惚れちゃったんです！！もう、どうにもならないほどに、だから」

朝の日差しが差し込む、花びらが舞う桜の木の下で、猿白は真っ赤になりながらも僕の両手を握り締める。

「え…」

彼女の潤んだ瞳が、真っ直ぐに僕を見つめる。

これでは、まるで告白ではないか。

「というか、本当に」

「だから、私を先輩の彼女にして下さい！！！！」

「却下よ」

思い切り頭を下げる猿白。

しかし、彼女の告白に、凄まじい速さで待ったをかける黒。

いや、待ったというか、却下というか。

とにかく、黒はいつものクールな表情のまま、猿白を真っ直ぐに見つめる。

「こ、この人が彼女さん…こんな綺麗で、完璧っぽい人が逸珂先輩の彼女さん…」

猿白は、まるで巨大なご神体を見るかのような瞳で、黒をまじまじと見つめる。

というか、黒はとりあえず彼女ではない。

そして、なぜ同学年なのに、さっきから呼び方が先輩なんだ！？

「ぼ、僕は」

しかし、僕は、どうすればいいか、分からない。

狗川の告白に対する明確な答えも、僕はしていないのに。

それに加えて、猿白の告白にたいして、どうすればいいかわからない。

別に猿白が嫌いとかじゃない、ただ、まだ僕達は出会ったばかりなのだ、黒にも言えることであるが。

だから、早すぎると思うんだ、答えを出すには。

「じゃあ、二号で！！彼女二号でいいです！！」

断固として拒否する姿勢を崩さない黒に対し、猿白は涙目で少し食い下がる。

それは彼女にとって苦渋の選択だったに違いない、黒の次でいいから、彼女になりたいというのだ。

しかし、この僕になんでそこまでこだわるのであるのか。

僕なんて、並以下の容姿で、成績も低空飛行、性格もあまりよろしくないのに。

なぜ、僕なのだろう。

そして、猿白も、なぜ、僕にそこまでの好意を抱いているのだろう。

僕は、食い下がってまで、彼女になろうとするほどの熱意にただただ、驚いた。

だが、そんな提案、黒が了承するわけが

「それならいいわよ」

狗川黒はにこりと爽やかに笑い、猿白と握手を交わした。

猿白はふるふると震えながら、黒と握手を交わした手を見つめた。

そして

「わーいわーい!!」

その場で軽やかにジャンプして両手を挙げ、全身で喜びを表現する。

「いいんかい!!」

僕はとりあえずツツこんでいた。

二号ならいいのか、彼女でも。

黒の基準が、よく分からなかった。

独占欲というものがないのか、それとも寛大なのか。

自分が一番の彼女という自身があるのか、僕にはその思考が分かりかねる。

やはり、黒は謎だらけだ。

「いいじゃない。彼女が二人いたって。誰に迷惑かけるわけでもない」

そして、彼女はくねらせた腰に手をあてて僕を真っ直ぐに見つめ、決め台詞をかつこよく言った。

いや、多分決め台詞なのだろう、それぐらい彼女はかつこよく言い放ったのだ。

周囲に迷惑をかけなければ、小さなルールを破つてでも、楽しくあるとする。

それが、彼女、狗川黒なのだから、やはり、この言葉は彼女の哲学のようなものなのだろう、僕はそう感じた。

「そうですね！モテモテじゃないですか！！えへへ、やったね！！」

そんな黒に同調し、猿白はびよんぴよんと跳ねながら無邪気に笑う。

「さ、さいですか……」
僕はそんな台詞しか出せなかった。

困惑しているのだ。

昨日、彼女を名乗る少女が現れ、それが今日、二人目の彼女を了承したのだ。

最低だった日常が、一気に普通以上の水準に、いや、おかしいくらいに良い方向に軌道修正していく。

なぜなのかは、全くわからない。

僕がすっかりと分かっていることは、眼前の二人の彼女が、僕を本当に好きでいてくれる、ということだ

「じゃあ、行きましようか、逸珂くん。二号さん」

黒はにこりと笑い、木の陰から出て、校門までの真っ直ぐな道を、歩き始める。

「はい！！黒先輩！！」

それに続き、猿白も少し興奮気味な様子で歩き出す。

というか、何で先輩って呼ぶのだろうか。

キャラ作り、なのだろうか、それとも、天然だからか。

「あ、ああ… というか、そういえば登校途中だったんだよね」

僕も、そんな二人の後を追ひ、歩き出す。

そんな僕に、前を歩く二人の彼女はパラボラレーザーも顔負けな熱い視線を送る。

そして、二人は歩くペースをあわせ、僕の両隣に並んだ

「今日も、慌しくなりそうだなあ」

二人を交互に見つめ、僕は自然ににやけていた口元で呟く。

僕達三人はそうして、朝の陽気につつまれた真っ直ぐに続く桜並木を歩いていく

パンドラの箱を開けることを躊躇して、立ち止まっていた僕。

しかしその箱は、黒の手によって、開けられた。

そして、昨日よりも、楽しく、慌しくなるであろう今日を、僕は生きていく。

そう、今日は来るのだ、生き続ける限り

つづく

第7話 不愉快ね

1

昼食を教室で食べ終え、黒や猿白と他愛のない話をしてると、次の授業が始まってしまった。

まあ、その黒との会話まで遡ってみるのもやぶさかでないのだが、いかんせん、他愛がなさすぎるために、省略。省略します。

二度、言いました。

とりあえず五限はホームルームなので、僕達のクラスの担任である初鮫先生が現れた。

「では、ホームルームを始めますっ」

初鮫先生は小柄な人で、顔立ちも幼いため、まるで同級生がスーツを着て先生のコスプレをしているようにも見えるが、本人はそれを茶化されるとご立腹なさる。

まあ、先生もしっかりとした大人であるため、生徒ごときに茶化されてカチン、とくるのは当たり前ではあるが。

僕は、初鮫先生は好きというほどではないが、嫌いではなかった。生徒に対して優しく、フレンドリーなのだ。

それ故に、茶化されることが多いのだが、僕は先生は仕事熱心で責任感のある大人だと思っている。

ただ

「先生気づかないっすね、先輩」

一番後ろであったハズの僕の席の背後に机と椅子がワンセットで

増えており、なぜかその椅子に隣のクラスの女の子が座つていて、
とをスルーしてしまうという、お茶目なところはあるが。

「というか、クラスに戻りなよ猿白さん……」

そう、先ほどまでの昼休みの間に、僕の後ろに猿白が隣のクラス
から移動してきたのだ。

だから、僕はとりあえず自分のクラスに戻るよう進言する。

というか、単位大丈夫なのかこの子は。

同学年の僕を先輩と呼んでいるが、留年なんかしたら、本当に先
輩・後輩になってしまうぞ。

「いえいえ先輩、二号である私は背後からの敵に対応するために、
こうやって守りを固めているのです」

と、言いながら、彼女は右手を握りしめて肩の前に上げ、その肘
に右手を添える。

ち、力の二号のポーズのつもりなのだろうか、微妙に違う気がする
が。

というか、敵って誰だろう。

僕は内心つつこみつつ、先生の立つ教卓の方に視線を戻した。

「じゃあ天秤てんびん・はかね計音さん、後はよろしくっ」

初鮫先生は『第三回ホームルーム』とどデカイ字を書くと、この
クラスの委員長を呼ぶ。

「はい、先生」

そして、クラスの中央部分に位置する机に座っていた委員長は

天秤計音は短く回答し、黒板の前に立った。

天秤計音は、このクラスのクラス委員長であり、生徒会の役員で
ある。

黒縁の四角いメガネに、きれ長の瞳。

二つのお下げ黒い髪。

背丈は、少し小柄で、中学生に見えないこともない。

胸もない、そして、セーラー服の右肩に『委員長』と書かれた黒い腕章を付けている。

そんな姿の少女が、天秤計音であった。

「逸珂くん、あの人は、誰かしら」

黒は、計音を指差す。

昨日転校してきた彼女は知らなくても仕方ない。

委員長は目立つときは目立つが、普段は普通に授業を受けており、友達もいない大人しいタイプの人間であるため、接点がなかったのだろう。

「私も気になるっス、誰でしょうか」

右肩に着くぐらいに首を傾げて、猿白もうつむ、と唸る。

つつか君は知ってて下さいよ、同級生でしょうが。

「あの子はクラスの委員長の天秤計音。他の学校はどうか知らないけど、ここでは各学級のクラスの委員長達が集結して生徒会を名乗っている。あ、あと成績は優秀みたい」

説明を聞くと、黒はいつものクールフェイスのまま「ふうん」とだけ言い、少し俯く。

彼女は前の学校では体制と対立する立場の存在だったのか、まあ、どこの学校でも、ルールを破るものに対して厳しいのは同じ、ということがある。

いや、だが、この学校は

「では、最初の議題に移ります。最近、構内の風紀が乱れている、と、生徒会の皆の間でよく話題になるのですが、私も、よくこの目で見たり、注意をしたりしています。特に最近、男女の過度な接触が」

かちやり、とメガネをかけ直し、委員長はクラス全体を見つめて

いた、まるで、囚人を見るかのような、瞳で。

彼女はルールを破るもの、規範から外れたものは容赦なく、軽蔑の視線を送る。

故に、このクラスの大半の人間は、彼女に軽蔑されているのである。だが、彼女の考えるルールは、僕の考えているものよりも厳しい。

正直、彼女や生徒会のルール通りに生きていたら、息が詰まり過ぎる。

狗川黒と出会う前まで、ルールを守って生きるべき、ルールを破る皆は嫌い、と僕も思っていた。

しかし、それは僕の周囲への劣等感からくるものでもあった。

彼女は、天秤計音という少女は、僕とは比べることができないくらいに、ルールを破る学生を純粹に嫌悪しているように感じられた。「校長みたいな喋り口で面白くない話ね」

黒は僕の隣で、怪訝な表情でため息を漏らした。

それは僕も感じていた、委員長の話は回りくどくて、つまらない。

「ですので、今回のホームルームでは、青少年の構内での不純な交遊を、どこまで校則で取り締まるべきか、皆で考えていきたいと思えます」

皆で考えていきたいとは言うが、この人は既に自分の中で結論が出ているのである。

彼氏と別れたほうがいいのか恋愛の相談をする輩と同じだ、答えがもう出ている。

だから、早く話しを終わらせてくれ、と僕は思った。

いや、このクラスの全員が、そう思っているであろう。

「学校は勉学に勤しむための場所です。大衆の面前で告白したり、木陰に隠れてキスしようとしたり、そんなことをする場所ではあり

ません」

なにか、昨日と今日の僕達のやってることを指摘しているように思えて、どきっ、ととしてしまった。

「うっ……」

告白はまあ、皆の前で黒がやったことであるから、まあ知ってて当たり前であろう。

しかし、今朝の木陰で隠れていたことは、誰も見ていなかったはずだ。

もしかして、見られていたのだろうか。

なんだか、凄く嫌な気分だ。

彼女を、狗川黒をバカにされた気がした。

僕なんかのために頑張ってくれる、狗川黒を、そんな彼女の誘惑を「そんなこと」と言われた。

いままで彼女がいなかったから分らなかったが、もしかして、クラスの皆も、同じ気持ちを抱いていたのだろうか。

男女の肉体的な接触を禁じられ、このように挑発されてきたのだろうか。

「……ねえ、黒」

僕が話しかけようとしたが、黒はそれが聞こえなかった様子で、小さく震えていた。

彼女が、ぎり、と奥歯を噛み締めた音が聞こえたのは、おそらく気のせいではないだろう。

「不愉快ね」

ああ、やっぱり気のせいではなかった。

黒は、あからさまに、不快感を露わにし、眉を顰めて、静かに炎を燃やしている。

その視線は、黒板の前に立つ計音を真っ直ぐに見つめていた。

それは、まるで、獲物を見つめるライオンのようであった。
やばい、これはやばい。

僕は、初めて見た、怒っている、彼女を

「はい！委員長！！」

一番前の席の男子が勢いよく拳手をした。

彼は野球部の二軍で、一年の後輩と付き合っている、クラスのムードメーカー的な存在だ。

「手を繋ぐくらいはいいんじゃないですか！？別に、この社会でも手を繋ぐ行為は法律で禁止されていないので、特に校則でもその一線は越えなくてもいいと思いまーす！！」

すぐ拳手する悪癖がある彼であったが、今回ばかりはよく言ってくれた、と僕は思った。

なるほど、彼はそれなりに考えて生きてきたのか。

女の尻ばかり追いかけている野球バカ、と思っていたのに、僕は歪んでいただけなのか。

「確かに一理あります、しかし、若い私達が手と手を繋いだら、それだけで済むでしょうか？」

いや、八里くらいはあつただろう。

というか、君は彼氏いないだろう、おそらく、いや、確実に。

計音は、完璧に皆を見下していた。

「故に、身体的接触を禁止したいと思うのですが、どうでしょうか皆さん？」

計音はまるで、ヒトラー総帥のようなジェスチャーで訴えかける。

クラス内は、流石に騒然としていた。

男子も女子も、隣や後ろの人間とヒソヒソと話している。

その光景を、計音はまるでゴミでも見るかのような視線で見渡して、反対意見を持つものがないか、確認する。

そして、うん、と計音は頷いた。

何が、うん、なのだろうか。

全て、自分で決めやがった。

いや、自分で決めてきたことを発表した、だけなのだろう、どうせ。

「因みに、生徒会も私とほぼ同じ意見です。このクラス全体の承認を得ることが出来たら、校則も変更になるでしょう」

その一言で、クラス内は静まり返った。

先ほど発言した男子も、まるで口をホチキスでとめられたかのよう
うに、押し黙ってしまった。

僕はその様子を、黙って見ていた。

悔しいが、生徒会の名前を出されたら、もうこうするしかない。

生徒会と戦争は出来ない。

なぜなら、生徒会は

「恐怖政治ね」

僕の隣の席の黒はめんどくさそうに机に頬杖をつき、呆れたような表情で今の全ての流れをそう言い切った。

確かにそうだ。

計音のやっていることは、ホームルームじゃない。

これはもう、皆の意見など通らない。

生徒会を盾にしているので、誰も抵抗できない。

しかも、いつの間にか初鮫先生はいなくなっているし！！

テストの採点ですか！？ご苦労さんですもう！！こんなときに！！

しかし、初鮫先生も好きでエスケープしているわけではないのだ
ろう。

この学園は、特殊過ぎた。

先生達ですら、生徒会を制御できなくなっているのだ。

「クラスの委員長の集まりである生徒会はこの学校で絶対的な権力をもつ集団なんすよ、先輩」

僕の後ろの猿白が眉をひそめながら、机に身を乗り出して黒に説明する。

「歪んでいるわね」

黒は、瞳を細めて計音を見つめながら嘲笑した。

「そうっすね」

黒の言葉を、猿白は短く肯定した。

「まあ、別にルールを作りたきゃ作ればいいわよ。別に」

黒はもう完全にルールなど知ったこっちゃないのだろう。

僕も、半分くらいそう思っていた。

まあ、そんなに大っぴらにルールを破ろうとは思わないけど。

だが、今は状況が違った。

僕と黒は完全にマークされている。

計音は釘を刺したのだ。

そして、このホームルームの議題も、恐らくは

「さすが先輩」

そんな僕の考えなど知らず、猿白はのん気に関心している。

「息苦しかったでしょうね逸珂くん。でも大丈夫よ、私がいるもの」

黒は、自分の豊満な胸に手をあてて、僕を見つめて微笑んだ。

彼女も、今の状況がどれだけ緊迫しているのか全く理解していないようであった。

無理もない。

彼女は、この学校の真の姿を知らない。

だから、こんなにマイペースなのだ。

「二号の胸もお貸ししますよ、先輩」

ぼよんと、黒よりも更に豊満な胸を突き出してお色気ポーズをとる猿白。

「あなたのは大きすぎて息苦しいわ、私の形がよいもので思い切り呼吸したほうがいいわよ」

その胸を、黒は後ろを向いて右手で一回揉み、首を傾げた。

「手敵しいっスね、はうんっ」

胸を揉まれた猿白は赤面し、小さく呻く。

そんなことしてる場合じゃないのに。

「あ、ありがとう…」

僕は、黒の言葉に感謝していた。

が、感謝の言葉に、気持ちが悪くかかっていない。

二人の好意は素直に嬉しいが、それを喜べる余裕が、今の僕にはなかった。

「では、反対意見がないので、このクラスはこの案に対し『賛成』ということ、次回の生徒会の活動時に報告させていただきます。では、次の議題ですが」

僕達が三人で喋っているうちに、議題は変わっていた。

なんなんだ、もう。

本当に、歪んでいやがる。

こんな学校で、生きてこれたのだから、僕も、もう少し自分に自信をもっていいのだろうか。

「なんか私達が喋ってるうちに、可決になってしまったわね」

黒は机に顔を突っ伏しながら、めんどくさそうに言う。

確かに、かなり早く議題が変更になってしまった。

反論するタイミングすらなかった、まあ、この状況で何か言える勇気のある僕ではないが。

「見えない圧力の下での民主主義っスね、人それを独裁という」

猿白砂麦は、次の議題は興味がない、といった様子で、机の上でプラモデルを作り始めた。

いや、どうやら、今までずっと作っていたようであった。

机の上のHGFC1/144スケールのボルトガンダムは、上半身と腰が完成し、残るは両脚を作るだけになっていた。

て、丁寧に合わせ目まで消していやがる…

呑気な様子の彼女達は分かっているのだろうか、今の自分達の状況を。

理解しているのだろうか、この学校の絶対の掟を。

「じ、これは… やばいな」

この学校の生徒会は、自分達が作ったルールを破るものは容赦なく断罪する

2

そして、二十分後。
様々な議題が可決された、というか、可決以外の選択肢がなかった。

全ては、天秤計音委員長の思い通り。

それが、このクラスの絶対の流れ。

僕は、いままではどうでもよかった。

自分が大切じゃなかったから、どんなルールができて、特に気にしなかった。

むしろ喜んだくらいだ、リア充達が苦しんでいるさまを見て。

そして、出来たルールを上手く無視してみせる男女を見て、いらしたものだ、一昨日までは。

しかし、今は違う

「これが、リア充の苦しみ……」
僕は黒と同じく、机に突っ伏していた。
計音委員長の恐怖政治から、目を逸らしたかったのだ。
時間が、遅く流れていくような感覚であった。
そして、五限が終わろうとしていた

「では、終わりますが、すみません、狗川さん？」

狗川の名前が出てきたため、僕は思わず顔を上げた。

計音はしてやったり、といった表情で、ねぼけ眼をこすっている
黒をチヨークで指差していた。

何なんだ。

何なんだ、一体。

「なんでしようか？」

なぜ私か？といった表情で、首を傾げる黒。
皆の視線が、狗川に集中していた。

「放課後、一人で体育館の裏に来てくれませんか？」

にやり、とサディステック笑う計音。

怖い。

初めてだ。

初めて、彼女の笑顔を見た。

悪魔だ。

悪魔のような笑顔だ。

「あら、愛の告白かしら」
そんな笑顔に、黒は怖気づく様子もなく、挑発的に微笑み、答える。

「私にその気はありません。我々生徒会に協力を願いたいのです。」
その反応が予想外だったのか、計音の顔から笑顔が消えた。

「これは生徒会の権限による指示です、出来る限り、協力して下さい。
い。お願いです」

無表情のまま、真っ直ぐに黒を見つめて、計音は恐ろしく淡々と、黒にお願いをしていた。

いや、これはお願い、というレベルのものではない。脅迫だ。

断れば、ただではすまないことを、このクラスの皆知っている。そのために、クラス全体が息を呑んだ。

昨日転校してきたばかりの生徒が、いきなり生徒会の一員である委員長に呼ばれたのだから。

「はいはい」

それでも黒は、気だるそうに答え、欠伸をしながら大きく背伸びをした。

何を考えているのだ、黒は。

計音委員長の考えていることも分からないが、黒も黒だ。

少しは焦ってくれ。

これはもう、戦争だ

「…黒」

僕に、何が出来るのだろうか。

生徒会に目をつけられ、呼び出されてしまった彼女を、僕は、守ることが出来るのだろうか。

駄目だ、自信がない。

僕に、出来るのだろうか。

こんな、僕に

「先輩… なんか、嵐の予感っス」

後ろの席から僕の肩に手を伸ばす猿白。

そっだ、嵐が来る。

だが、僕はどうすればいい。

僕は、どうすれば

第8話 女の戦い

1

放課後になってしまった。

何も解決されないまま、放課後になったのだ。

天秤計音に呼び出された狗川黒は、一人、体育館の裏にいた。

僕達の通っている高校は公立で、二つの本校舎に隣接する体育館はバスケットボールに事欠かないくらいの大きさではあったが、少し昔に作られたものであり、ところどころにガタがきていた。

体育館の裏は、狭い。

学校の敷地の外と内側を隔てる、高く赤いレンガの壁と、白い体育館の壁に囲まれており、人目につかない。

男女が逢引するには絶好のスポットではあるが、ここを選択するカップルはこの学校にはいない。

なぜなら、ここは通称『赤の壁』と言われる、生徒会の領域テリトリーだからだ。

「しかし、体育館裏なんて、前時代的ね…」

黒は呆れたようにと笑いながら、白い体育館の壁にもたれ掛かる。そして、ジャンボーグ9の歌を口ずさみながら、白い携帯をいじくっていた。

選曲が渋いよ、誰もわかんないよそれ。

午後の太陽の暖かな日差しが、そこに差し込んでいた

「本当に、一人で大丈夫なのか… 黒」

僕はそれを、彼女に気づかれぬように、上から見下ろしていた。本当は彼女と一緒に来たかったのだが、彼女は頑なにそれを拒否した。

僕を巻き込まないつもりだ、黒は。

全て、自分の責任だと思い、一人で決着をつけようとしているのだ。

「先輩、本当にいいんすか？ここで見てて」

僕を肩車で背負いながら、長い電柱の先端に立つ猿白は珍しく弱々しい表情で問い掛ける。

「付き合わせてごめん、猿白さん。僕にも責任があるから… あと、やっぱり心配だから」

そうだ。

本当は、男として、黒の隣にいるべきなんだ、彼女に反対されただけで、僕は引いてしまった。

僕は卑怯だ。

彼女を守ることすら出来ないのか、黒は彼女じゃないけど。

「優しいんですね、逸珂先輩。私、やっぱり二号になってよかったっす」

いや、僕は優しくくない。

頼むから、僕という人間を都合よく解釈しないでくれ。

僕は、本当に、どうしようもないのだから。

「優しくなんかないよ、本当なら、僕は彼女の傍らに立って守らなきゃなんだから」

そう言つと、猿白は苦笑いをして僕を見つめた。

「いや、だってそれは、仕方ないじゃないっすか。黒先輩、かなり露骨に拒否してたし。」

確かに、そうなのだ。

彼女は、頑なに、ここに一人で来ることを望んだ。でも、それでも僕は、一緒にいるべきだったんだ。

そんなに思うなら行動しろよと、自分を情けなく思う。

「本当に危なかったら、この二号が、助けに入りますから、大丈夫っす」

「猿白……」

しかし、由々しき事態である。

委員長に呼び出されて、無事に帰ってきたものはいない

「その時は、僕も……」

僕は猿白が用意したハンドサイズの望遠鏡を覗き込み、視界を下に戻す。

既に、校舎の方向から天秤計音が、狗川黒の立っている場所へ歩いてきていた

2

「ごきげんよう、狗川さん」

生徒会の権限を使って自分で呼び出しておいて、白々しい笑顔で天秤計音は挨拶をする。

本当にむかつく女である。

友達、絶対いないだろう。

「どうも」

黒は気だるそうに挨拶を返し、弄んでいた携帯を閉じ、ポケットに戻した。

そんな彼女を、計音は眉をひそめて見つめる。

その瞳には、明らかな嫌悪と敵対の意思が込められているように思えた。

「何で委員長である私に呼ばれたか… 分かってますよね？」

口元だけで笑い、計音は黒を睨みつけた。

「さあ？私はやりたいことをやっているだけなんで。しかも、他人には迷惑かけてないわ」

面倒くさそうに首をもたげて、しかし鋭い視線は計音から全く逸らさずに自分に非はないと言い切る。

そっだ。

僕は、確かに少しルールを破った。

しかし、それは、人に迷惑をかけないように、心がけた。

口頭で注意をつけることはあっても、皆の前でからかわれたり、こうして校舎裏に呼び出される筋合いなどないはずだ。

「迷惑なのよ。あれだけイチャイチャされたら、しかも、れっきとした校則違反よ」

しかし、この女には、そんな言い分は通用しない。

全ては、自分の裁量。

生徒会のメンバーは往々にしてそうなのだが、傍から見たら八つ当たりにはしか見えない。

本当に、こんな奴らがまかり通っている学園って、どうなんだよ。

「… 私、大分、気が立ってるの。あなたは私をどうしたいのかしらっ？」

黒は計音の回りくどい口ぶりに、いらいらしているようであった。遠くからでは少し分かり辛いが、眉を寄せているように見える。

そして瞳には、拒絶の意思が見て取れた。

首を真っ直ぐに直し、黒は壁から離れて計音と2メートルくらい距離をとったまま腕組みする。

「ふふっ、気が早い人ですね、転校初日に告白するわけだ、笑える。」

くすくす、と本当に悪魔のように、黒を指差して笑う。

安っぽい挑発ではあるが、黒はその言葉に口角をつり上げ、組んだ腕をふるふると震わせていた。

そんな彼女を前にして、計音は両脚を開き、右腕を振り上げる。

次の瞬間、僕は驚愕した

「教えてあげる　私達生徒会はね、あなたのようなルールから外れた人間を許さない。更正させるの選ばれたもの力で」

彼女の動きに呼応するかのようになり、周囲の地面の砂が彼女の横に急速に集まる。

そして、それは、黒よりも頭一つ分大きな、人の形をした何かを作り始める。

僕は最初、目の錯覚と思い、瞳を擦った。

なんだよ、あれ。

隠れていなければ、僕は、思い切り大声でつつこんでいるところだ。

生徒会のメンバーは全員がスタンド使い、というのは、有名な噂である。

そして、生徒会は生徒会長を筆頭とする懲罰集団で、実在する『赤の壁』は、罰を与えられた者の返り血、という噂も加えて流布されているため、少しだけ、信憑性があった。

しかし、本当だったのか。

天秤計音は、スタンド使い、だったのだ。

まあ、スタンドではないかもしれないが、超能力使い、というのは、確かだ。

「恐怖政治だけじゃなくて、選民主義なのね。いつの時代の人よ、全く」

呆れたように含み笑いをして、黒はやらやれと肩をすくめる。

「というか、驚こつよ、スタンドですよ黒さん！！」

「でも、私はあなたみたいなお娘、大好きよ。ルール違反をする奴がいないと、処罰できないもの。ブツ潰したいほど大好きよ」

「邪悪な満面の笑みを見せ、計音はスカートのポケットから何かを取り出した。」

生徒手帳であった。

この学園の生徒手帳は、当然のように生徒全員が持っている。

数年前まで中身は紙だったらしいが、日々更新されていく膨大な数の規則を閲覧するために電子化されており、黒い本体の大きさは手のひらサイズで、折りたたみ式の携帯のようになっていた。

そして、タッチパネル式で学校のメインサーバーに繋がっており、録音やナビゲーションなどの様々なアプリケーションもあるが、通話機能がないというのが携帯との違いである。

「大帝都学園対規則違反者法、第十二条。生徒会メンバーは規則を破った人間に、自らの裁量で罰則を与えることができる」

計音は、真つ直ぐに見据えて、その手帳の表紙の、金色の星十字を黒に見せ付ける。

酷い法律だな。

ん？

「この学園って規則だけじゃなくて、法律があったのか、こんなパッケージだけはどこにでもありそうな、公立の学園に。」

まあ、パッケージは普通の学園でも、中身はカオスであるが。

「というか、この学校って、大帝都学園ってネーミングだったのか。」

「やっぱり相容れないわね、私はあなたが大嫌いだわ」

軽蔑の視線を送り、うんうん、と頷きながら、組んだ両腕を離し、黒は眼前の化け物を見据えた。

そう、計音が砂を再構築して作り上げたスタンドは、既に完成していた

「私のデストラグル能力は鉄の騎士『鋼鉄の処女メタルヴァージン

』。私は手を汚さない、私はルールを破らない。だけど『鋼鉄の処女』は確実にあなたを貫く」

計音が超能力（どうやらデストラグル能力というらしい）で作りに上げたもの。

それは、銀色の甲冑を身に着けた、一つ目の騎士であった。

西洋風の鎧に、右手に巨大な三角柱状の鋭い槍

やり

をもつそれは小さく咆哮し、自らの巨体をふるわせ、天高く、槍を振り上げる。

「やれ」

計音は短く言い放ち、手を振りかざす。

それに呼応するかのように、『鋼鉄の処女』は槍の切っ先を黒に向けて突き出す。

え!?

危険である。

僕は思わず飛び出そうとするが、肩車をしている猿白が「だめっス」とか言いながら、僕の太ももを強く挟んで離さない。

よく考えたら、電柱の上から飛び降りたら、助けるどころか即死してしまっが、それでも、僕は飛び出そうとした。

しかし

「笑えるわね、本当に。」

そんな化け物を前にしても、黒は一步も引かなかった。

『鋼鉄の処女』の突き出した槍の先端は、彼女の髪を数本切り裂き、紙一重のところを宙を切った。

威嚇のつもり、だったのだろうか。

そして、それを分かっていた、黒は動かなかったのか。

「くっ」

計音は初めて驚いたような表情を見せ、一步だけ、後ずさる。

「いいわね　そういうこと、分かったわ、狗川黒。最初から全力でいきましょう」

そして、計音は黒縁のメガネを外し、思い切り地面に投げ捨て、にやり、と口元で笑う。

口元は笑っているが、目は真剣そのものであった。

僕には、分からなかった。

今の一撃で、何が変化したというのだ。

「ようやく理解したのね、なら、早く終わらせましょう。私、今日彼のおうち行きたいの」

そうだったのか。

というか、今日家に来るとか、そんな話、わたし聞いてない！！
まあ、彼女は僕の家的位置をもう把握しているし、またアポなしで来るんだらうけど

とりあえず、そんなことを言っている事態じゃないだらう、黒。

君は、戦えるのか、そんな化け物と

「じゃあ、見せてあげる　私の、この狗川黒の『能力』を」

黒はスカートの中身が見えないギリギリのラインまで両脚を開き、右手を腰に添え、左手を眼前に突き出して構え、戦闘態勢に入る。

そして、口角を上げて小さく笑い、巨大な『鋼鉄の処女』を真っ直ぐに睨みつける。

自信满满といった感じの笑みである、彼女はこんなにも好戦的、というか、バトル漫画の主人公だったのか。

なんか、タツノコヒーローみたいだぞ。

僕は、どうすればいいのだ。

というか、動けないぞ。

まるで、両脚を、思い切りロックされているようだ。

「というか、離してくれ、猿白さん」

高い電柱の上に立つ猿白に肩車をしてもらい全ての状況を見つめていた僕は、いてもたってもいられず、じたばたとする。

「すみません先輩、実は絶対手出ししないよう、黒先輩に言われているんです。『これは女の戦いだから』って、強く、言われたんです」
そうだったのか。

狗川黒、どこまで用意周到な女なのだ。

そんなにまでして、僕を巻き込みたくないのか。

あんさん、ルルーシュでっか。

「というか、離したら落ちちゃいますよ先輩」

まあ、それも、そうなんだが。

つづく

第9話 あの子、許さない！！

1

黒がとった次の一手。

それは、酷く単純なことだった。

狗川黒の背後の壁、その上のガラス部分が炸裂したのだ。

そして、ガラスや壁の無数の破片が計音のもとに落下していく。

次の瞬間、紫色の煙幕が地面から噴出し、一瞬にして二つの壁に
囲まれた校舎裏に充滿した

「なっ！？目潰しですって？！げほっ！！ぶはっ！！」

煙幕により、視界を完全に奪われた計音は咳き込み、珍しく狼狽する。

そして、黒を探して煙の中を動いているようであった。

「げほっ… くっ、こっすい手段を…」 充滿する煙の中で、計音はそう吐き捨てる。

煙幕が風に乗って飛んでゆき、計音の視界が開けた時には既に黒の姿はなかった。

「くっ… 完全に逃げられたわ」

いや、思えば、あの最初の爆発で完全に計音の意識をそこに集中させ、その隙に逃げたのだ。

用意周到過ぎる。

狗川黒。

成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群、しかも、忍者みたいなスキルをもっている彼女も、ここまでくると、もう超人レベルである。

「でもまあ、いいわ、絶対追い詰めてやる。虫の関節をちぎるようにジワジワと、なぶってやるわ、ははは、あはははっ!」

計音は、邪悪な笑みを浮かべて顔を歪める。

怖い。

まるで、バキに出てきそうな顔である。

生真面目な羊の皮を被った悪魔の一面を見てしまい、僕の全身は凍った。

「爆弾とか黒先輩らしいっすね、ま、とりあえず今のうちっす」

そんな凍ったままの僕をおぶっている猿白は、短く言う。

「だね… 逃げるべし」

猿白と僕も、彼女が高笑いをしている隙に、見つからないようにその場から逃げ出した。

何なんだ。

何なんだよ、全く。

「しかし、どこに行ったんだ、黒…」

計音委員長は全く諦めていない。

むしろ、その邪悪な思いを強くさせてしまった。

どうするんだ、黒。

君は、あんな女と、どう決着をつけようというんだ。

そして、その後は、どうするんだ。

こんなときに、何も出来ない僕が本当に嫌になる

僕達は体育館の中にいた。

校庭、校舎、屋上、様々な場所をくまなく探したつもりだが、いないのだ。

どこにいますというんだ、黒。

「ここに帰ってきた… ってわけでもないのか」

先ほどの爆発により、内部にはまだ粉塵が舞っていた。

思い切り割れたガラスが、痛々しい。

「先輩… 黒先輩いないっすね」

周囲を見回す猿白が、弱弱しく呟く。

「どこいったんだよ…」

僕は俯いた。

彼女の力になれない。

それどころか、傍にいても出来ない。

なんて無力で、卑怯な男なんだろうか。

いや、僕は男なんだろうか。

本当に、男性器がついているだけで、ただの人間のゴミなんじゃないだろうか。

「しかし、何なんだ『デストラグル能力』って… 猿白は何か知らないか？」

僕の口をついて出た言葉は、先程から気になっていた事であった。デストラグル能力。

土くれから鎧の騎士を作り、意のままに操る能力など、常識では考えられない。

「うーん、知らないっす」

だからこそ、パンツをはき忘れる常識では考えられない彼女に訊いたのだが、どうやらあてが外れたようである。

しかし、ここで彼女に対する最大の疑問が残った。

「え？天井を歩いたり、さっきみたいに高い所に乗るのは、その能力なんじゃ……」

そうなのだ、今までスルーしていたが、猿白は天井を歩いたり、電柱を苦も無くよじ登ったりできる。

能力のことについては全く知らん未知の領域であったが、それをデストラグル能力と言わずして、なんというのだ。

「あれは全身の筋力を使って重力に抵抗しているだけっす。あんなスタンドもどきに比べたらカスっすよ、カス」

普通にお前の方が凄えよ！！

どうやったら筋肉で重力無視出来るんだよ！！

「……とにかく、探さない」と

黒を見つけたせない焦りと無力感により、僕は苛々としていた。そして、そんな感情に任せて頭を掻きながら、僕は体育館内の倉庫へと歩き出した。

もしかしたら、中でほとぼりが冷めるまで、隠れているかもしれない。

「じゃあ、私はあっち探してくるっす。」

猿白は、そんな僕を励ますかのように笑い、倉庫とは正反対の出入り口の方向へと向く。

そして、全身を震わせて力を溜め、一気に体育館の床を蹴る。

「とうっ！！」

すると彼女は一瞬にしてその場から消えた。

まるで、伊賀忍者である。

やっぱ凄いや、普通に。

彼女に今度、重力をしつかり感じているのか聞いてみよう。

「それに比べて、僕は」

猿白のような力があれば、僕は黒を守ることが出来るのに。

しかし、僕は非力だ。

しかも、それを理由に、僕は計音に呼び出された黒に同行できなかった。

本当は、一緒にいるべきだったのだ、彼女に反対されようと、本当に大切な人であれば。それを、僕はしなかった。

自分が大切なのだ。

僕は彼女の、黒の好意が本物であることを昨日の昼休みに知った。でも、僕は彼女に好かれるような人間じゃない。卑怯な人間だ

「ちよつと、待ちなさい!!」

僕の全身は一瞬、強張った。

これは、僕がチキンだからではないことを言っておこう。

鬼のような形相をした計音が、息を切らしながら校舎の方向から走ってきたのだ、無理もない。

こんな形相でいきなり声をかけられたら、十人中、八人は強張り、残り二人は失禁するであろう。

「な…い、委員長」

おそらく、校内をくまなく探しても黒はいなかったのだろう、かなり焦っている様子であった。

「ど、ど、どうしたんですか委員長、何かあったんですか？」

どもりながら、僕は凍りついた笑顔を見せる。

それが今の僕の限界であった。

「あなたを使えば、奴をおびき寄せることが出来る
え。」

まさか、この女、僕達を人質にするつもりか？

なんてクレイジーな奴なんだ！

彼女は悪魔のような笑顔を見せて思い切り僕を指差し、再び甲冑

の騎士『鋼鉄の処女』を出現させる。

そして、全長2メートルほどの『鋼鉄の処女』の右肩に乗り、鋼鉄の騎士はその銀色の右手で彼女を支えた。

「う、嘘でしょう、い、い、いやだなあ冗談がキツイっすよ、あはは」

僕は冷や汗をどつと出してがくがくと震えながら、思い切り後ずさる。

『鋼鉄の処女』は左手に握り締めた槍

ランス

を振り上げ、がらんどうの兜部分で僕を一瞥した。

「大丈夫、抵抗できないように片腕をもらっただけだから。この不可避の槍

ゲイボルグ

でね ふふっ」

虫の手足を千切るような幼子の笑みを浮かべたまま、彼女は僕を見下ろす。

そんな時、校内放送のスピーカーの音が鳴り、全校放送が入った。

『何で委員長である私に呼ばれたか… 分かってますよね？』

眼前の計音が瞳を大きく広げ、驚く。
無理も無い。

スピーカーから響く声。

それは、僕の眼前にいるはずの委員長、天秤計音のものであった

校内放送は続いたが、僕は意味が分からなかった。

彼女は、計音は眼前にいる。

「今の放送は… 私の声?!」

しかし、その彼女が一番狼狽していた。

『計音生徒会長… どうしたんですか?こんな… ところに呼び出

して… きゃっ?!』

次にスピーカーから響く声は、狗川黒のものであった。

どうやら、屋内の静かな場所にいるらしく、他の音が聞こえない。

彼女がつかみかかられたような音だけが、聞こえた。

『やめて下さい!?!私は逸珂さんと帰りたいんです!!!』

もみ合いになっているらしく、狗川は必死そうに叫んでいた。

『迷惑なのよ。あれだけイチヤイチヤされたら』

再び、スピーカーから計音の不満げな声響く。

『まさか委員長、私を』

もみ合いの音が激しくなり、黒の荒い息が響く。

『私は大好きよ、あなたみたいな娘』

狂気を孕んだ計音の声、その次の瞬間、黒が床を這って逃げるよ

うな音が、かすかに聞こえる。

『きゃっ!!やめて下さい!!計音委員長!!私、いやですっ!!!!』

必死になって叫ぶ黒。

『私はあなたの処女を貫く』

そして、冷酷に言い放つ計音。

『きゃあああっ!!!!』

がちゃ、と勢いよく扉を開ける音が響き、黒は逃げ出した様子であつた。

それから数秒して、放送は終わった

4

「こんなのでつちあげよ！！私は彼女を襲おうとしていないわ！！」

一瞬、委員長は凍りついた。

意味が分からなかった。

計音は眼前にいるのだが、先ほどの放送で黒と会話をしていたのは、疑いの余地もなく彼女だった。というか、襲おうとはしただろう。

ただ、放送ではなぜか計音がレスっぽい感じに改変されていたが、ん？

改変… 編集？

「まさか、黒…」

そうか、そういうことか！！

黒は無駄に計音と喋っていたわけじゃない。

先ほどの音声は捏造なのだ、学校中に放送して計音を追い詰めるための。

それを放送するために、必要な計音の声を録音していたのであるう、生徒手帳の機能を使って。

なんて作戦だ。

絶対に、黒だけは敵に回したくない、そう僕は思った。

「あの子… 許さない！！放送室付近にいるわよね… 絶対ぶっ殺してやるわ　クソッ！！」

体育館の床を踏み抜き、僕など眼中にないといった感じで、計音は鬼のような形相で走り出そうとした。

その瞬間であった

「駄目じゃないか計音くん、女の子がクソとか言っちゃあ」

黒がぶっ壊した体育館の窓から、淡々とした声が響く。窓には、僕と同じ年くらいの一人の少年が立っていた。

肩まで伸びた黒い髪、まるで芸能人のような顔面の造形。

どこことなく、聡明な狼のような印象を受けた。

そして、スマートで背が高く、僕と同じ形状の白い学ランを着ていた、この学校の生徒、ということなのだろうか。

見た目だけでも、僕とは比べ物にならないスペックであった

「せ… 生徒会長」

その姿を見て、計音は全身を震わせながら後ずさる。

生徒会長？

あの男が、ルールを破る生徒を容赦なく断罪する生徒会のリーダー、生徒会長だというのが。

そういえば、肩の腕章には、『生徒会長』と豪快な字が書かれた腕章が付いていた。

しかもそれだけではない、腰のベルトには物干し竿のような日本刀が装着されており、胸にはいくつもの勲章が輝いていた。

どこで戦争してきたんだ、というツツコミは無用であろう。

「この人が… 生徒会長」

さすがに生徒会の長だけあって、彼にはオーラがあったように、僕には思えた。

ぼつかりと空いた窓の穴に颯爽と立つその姿は、背中に後光が射しているようであった。

「この音声、おおかた君が彼女を襲おうとして、その時に録音されたものだろう。そんな君を生徒会メンバーにしておくわけにはいかないんだ、生徒会は絶対正義の組織だからね」

窓から下りて華麗に着地し、生徒会長は腕を組みながら計音を真っ直ぐに見つめる。

まるで、悪の大幹部を見つめる、正義の味方のような瞳であった。

「そんな！！私はただ」

生徒会長は聞く耳持たない、といった様子で計音から目を逸らし、右手を彼女の立つ方向に向かって突き出す。

すると、必死に弁解しようとする計音の口を、突如現れた十字の形をしたガムテープが塞ぐ。

そして、計音はふるふると震えながら、その場に立ち尽くした、金縛りにあつたかのように。

これも、生徒会長の『デストラグル能力』ということであろうか。本当に何でもありだな。

「な、なんなんだ…」

突然現れた生徒会長を前に、僕は完全に固まっていた。

情けない。状況に流されるだけで、僕はあまりに無力だ。

「怖い思いをさせてすまなかったね、生徒会のメンバーには、こういう歪んだものもいるんだよ、悲しいことだけどね」

計音を一瞥し、申し訳なさそうに言う生徒会長。

狗川黒を懲罰しようとしたのは、生徒会の意思ではなく、計音委

員長の独断ということだったのか。

「生徒会長… どういうことですか？」

漠然とした質問をする僕に対し、生徒会長はニコリと笑った。

「生徒会長、鬼ヶ島千草。君の味方だよ」

生徒会長は日本刀を鞘をつけたままベルトから外し、その束を握り締めた。

「ぐっ?!」

そして、野球のバットのように振り、その鞘部分で計音の体を壁際まで吹き飛ばした。

「うっ」

痛々しい光景に、僕は目を背けた。

あれだけのことをした計音であったが、今は流石に可哀想、という感情が僕の中に生まれた。

「確かに生徒会はこのように肅清することがある。しかしそれは、相手が絶対の悪だからだ」

埃が舞いあがる体育館の中を、生徒会長は計音の吹き飛んだ方向へとゆっくり歩いていく。

「デストラグル能力は、その歪みを切り裂く力だというのに」

生徒会長は壁に大の字になってめり込んだ計音の髪を引っ張り、そして、残念そうに彼女の顔を見つめ、みぞおちに拳をめりこませる。

「ぐっ!!」

思いきり呻きながらも、虚ろな目で生徒会長を睨む計音。

しかし、呼吸が荒く、額からは一筋の血が流れている。

「君はそれを汚した。だから、私は君を汚す」

生徒会長は日本刀を持ち両脚を広げ、居合いの構えをとった。

「目を閉じて、耳を塞いでいるといい。ここからは… 惨い」

生徒会長が、僕の方を見ながら警告する。

その顔からは、一切の表情が消えていた。

まるで、粛清するためだけに存在するかのような、無機質さであった。

というか、この段階で既に惨いんですけれど。

「生徒会長、な、何を」

次の瞬間、生徒会長の刀が計音委員長に向かって、横一線になぎ払われた

つづく

第10話 我々は絶対の正義だ（前書き）

更新遅れてすみません。

第10話 我々は絶対の正義だ

1

「な、何をする気なんですかつ、生徒会長!？」

僕は、やはり動けないでいた。

会長の刀により服を破かれ全裸になった計音は、既に满身創痕だ。未発達な四肢は、痛みと恐怖に震え、その見開いた瞳は恐怖の色に染まり、許しを請うかのように、真っ直ぐに会長を見つめていた。もう、彼女の贖罪は終わったのではないか。

女性として、既に耐え難い辱めを受けたのではないか。

会長は、これ以上何をしようというのか

「私は何もしないよ。身内の懲罰は『彼女』の担当だからね」

と、計音を見つめて口元に微笑を浮かべながら会長が言う。

すると突然、彼の元に天井から一人の少女が降ってきた。

「き、君は…」

僕は、その少女のいでたちに、瞳を見開いた。

「…」

その少女は、この学校指定のセーラー服こそ着ているものの、その上に黄色いパーカーを羽織り、フードを被っていた。

それだけなら、まだ、僕もそこまで驚かなかった。

問題なのは、顔に被ったフードの前面が眼球を模したピンにより完璧に閉じてあり、顔面をうかがうことが全く出来なかったのだ。

「彼女は、この計音と同じく『生徒会四聖天』の一人、1年A組委員長。名前は」

俯きながら、全く言葉を発しない彼女に代わり、会長は紹介を行うと

「かみくすく・しとね
神城禱」

と、彼女は短く言った。

それしか、言わなかった。

感情というものが全く読み取れない彼女の声に、僕は得体の知れない何かを感じた。

「すまないね禱。頼む。」

「…はい」

会長は微動だにせず指示を出すと、神城と名乗った少女は頷き、顔を上げる。

『四聖天』の名は、僕も聞いたことがあった。

生徒会長の指示の元に動き、ルール違反を取り締まる生徒会のメンバーの中でも、最も大きな権限を持った四人。

しかし、その四人の中に、天秤計音委員長が入っていることを、僕は知らなかった。

嫌な予感がした。

その四聖天（凄いネーミングだ）の一人である神城という少女が現れた、ということとは、つまり

「なっ!?!?これは」

僕は、瞳を見開いた。

「ぐっ!?!?ひぐっ!?!?」

喘ぐ計音の周囲の壁をぶち破り、細長い紫色の化け物が無数に現れる。

それは、先端が男性器の形状をしている、大小様々なサイズのグロテスクな触手であった。

「……『蛇の悪夢』……」
スネークナイトメア

神城は両手を壁にめり込んだ計音の方向へ突き出し、その能力名らしき単語を短く言う。

すると、計音の周囲の触手は、彼女の両腕と両足へ絡みつき、その動きを完全に封じる。

「ひぎいうツ?!」

そして、ガムテープを破り、彼女の口に一本の野太い触手が挿入された。

「えぐううう!!」

野太い触手が蠢き、彼女の悲鳴が体育館に響いた

2

「ああ…… 助けてっ…… ああ……」

僕は、変わり果てた姿の計音^{かのじよ}を前に、ただただ立ち尽くしていた。立ち尽くすことしか、出来なかった

「…い、委員長」

ありえない。

確かに、生徒会が、暴力的な手段でルールを破る生徒達を肅清していることは知っていた。

だが、それが、まさか生徒会のメンバーにまで向けられるとは思っていなかった。

この学園は、おかしい。

こんな学園で一年と数ヶ月生きてきたのだから、僕も歪むわけがある。

本当に、なぜ、ここまでするのだろうか。

なぜ、ここまで、出来るのだろうか

「よし、ここまですればいいだろう。嫌な役をすまなかった、褥」

会長はその痴態を前にして、傍らの神城に向かって申し訳なさそうに謝罪をした。

「…いいえ」

神城は首を横に振り、計音を一瞥すると、再び俯く。

フードを被り、顔を隠しているため、彼女の感情をつかがい知ることとは出来ないことが、殊更に不気味であった。

どうして、ここまで残酷なことが出来るのか。

同じ、女であろうに。

なぜ、ここまで徹底して、少女が少女に対して、陵辱を行えるのか。

それを行える原動力が、生徒会の『絶対正義』ということなのか。

「…」

僕は、ただ黙って見ているだけであつた。

今、自分が、どんな顔をしているのかすら、分からない。

また、何も出来なかつた。

計音委員長は黒を襲つた敵だから、助ける必要も義理も理由もない、と、僕は自分を納得させていた。

それは確かに、そうなのだ。

そうなのだが、もし、計音ではなく、黒であつたら、僕はこの二人に抵抗出来たであろうか。

非力なことを理由に、今と同じように、ただただ、立ち尽くすだけ、なのではないだろうか。

そう思うと、自分の弱さに、泣きたくなってきた。

「さて戻るとしよう、行くぞ。褥、保健室への連絡は君がしておいてくれ」

会長は壁際の床で横になつてゐる計音に背を向け、歩き出した。

もう計音には何の興味も未練も無い、といった様子である。

「はい」

しかし、神城は、一度だけ計音を見つめ、その後続いた。

流石に何か、思うところがあつたのだろう。

素顔は分からないが、そう、僕には感じられた。

「……」

僕がその二人の背中を見つめて黙って立ち尽くしていると、会長は何かを思い出したかのようにこちらに振り返り、僕を見つめた。

「今日の件はすまなかつた。後日、正式に謝罪しよう。狗川君にも、そう伝えておいてくれ。では、また会おう」

会長は申し訳なさそうに言い、僕に対し、二、三度手を振り、消えた。

「……」
そして、傍らの神城は行儀よく一礼し、彼の後に続いて、消えた。
二人は、まるで忍者のように、消えた。
どのような方法かは全く分からないが、二人はその場から一瞬にして、移動したようであった。

僕が消えたことを認識したときには既に、影も形もなかったのだ

「な…… なんなんだ」

というか、瞬間移動できるなら、なぜ最初に歩いた。

いや、そんなことは大きな問題ではない。

僕は、いても立ってもいられず、計音委員長を置き去りにして、その場から走り出した

「なんなんだ…… なんなんだよ一体!!」

がくがくと震える足で、僕はカバンを取りに教室へと向かい、走っていく。

早く黒を見つけて、帰りたいかった。

もう、ここにいたくなかった。

生徒会、ルールを破ったものは、容赦なく制裁を加える戦闘部隊
この学校にいる限り、生徒会はある。

いままでは、正直、僕の味方だと、正義の味方だと思っていた。

僕はルールを破らない人間だったから。

だから、生徒会はルールを破る要領のいい悪くて卑怯な奴を、僕をいじめようとする奴を肅清してくれる、そんな人々だと思っていたからだ。

実際のところ、彼らのおかげで、僕の学校の生徒は皆、おとなしい。

いや、おとなしくならざるを得なかった。

現実に肅清された人間を見たことが無いから、生徒会を正義の組織と信じる事が出来た。

実際にその正義の鉄槌を目前にすると、僕は、それに恐怖を感じた。

本当に彼らが正義なのか、疑問に思ってしまったている自分がいた。なによりも、僕が不安に思ったのは

「黒… 君は大丈夫なのか」

狗川黒のことであつた。

彼女はルール通りに動くような女の子ではない。

楽しいことが大好きな、つかみどころの無い、雲のような少女だ。計音委員長は独断で黒を肅清しようとしたが、他の生徒会メンバーが、同じ考えを持たないという保証はどこにもない。

『四聖天』と呼ばれる会長直属の部隊も、あの神城を含め、あと三人いる。

それなのに、昨日と今日のように、学校で黒と過ごせるのだろうか

「これから、どうなってしまうんだ」

夕焼けが照らす誰もいない放課後の教室で、僕は自分の机の上に置いてあつたスポーツバツクを取り、俯いた。

外からは、校庭で部活に打ち込む陸上部の掛け声が聞こえる。

僕は、どうすればいいんだ。

僕に、何が出来るっていうんだ

第10話 我々は絶対の正義だ（後書き）

この回はオリジナルの18禁版ではしっかり描写されています。

第11話 母さん…

1

僕は、先程の悪夢のような光景を忘れようと、スポーツバックを背負い、黒を探して校庭と校内を歩き来していた。

しかし、黒はどこに行ったのだろうか。

もう、帰ってしまったのか、僕を置いて。

それはないと、思ったかった。

黒は、僕の彼女だと、自分で言っていた。

ならば、今、一緒に帰りたかった。

不安だから。

本当に情けない話であるが、一緒にいて欲しかった。

なぜだろうか。

一昨日までは、一人で登校し、一人で下校していたのに。

「黒、どこに行ったんだよ…」

嫌な記憶が蘇った。

2

僕が、小学校一年生になりたての頃。

父さんと母さんと一緒に、初めて遊園地へ行ったときの記憶である。

小さな僕にとって何もかもが新鮮で、僕は一つ一つのアトラクション、ぬいぐるみ、とにかくその夢の国にある全てに興味を示し、堪能していた。

母さんと、手を繋ぎながら。

しかし、母さんは、もうお前は小学校一年生なのだから、と、僕の手を離した。父さんも、その対応に満足げであった。

僕は、それが怖かった。

母がなぜそんなことをするのか、分からなかった。

数分後、僕は両親とはぐれた。

誰も頼れる人はいない。

誰に言えばいいか、わからない。

楽しいはずの遊園地が、憂鬱園地を通り越して、ただのお化け屋敷になったような感じであった。

数分後、僕は遊園地スタッフに声をかけられ、迷子センターにて母親と再会した。

僕は、思い切り泣いたまま母親の胸に飛び込んだ。

そのときのことを、僕は忘れない。

きつと、一生、忘れない。

母は、嬉しいような、困りつたような顔をして、淡々と、こう僕に言ったのだ。

もっと、ちゃんとしないと、駄目じゃない、と。

僕は、その言葉が悲しくて、更に泣いてしまった。

更に泣いてしまったため、父親もすっかり困り顔であった。

僕の両親は、僕が生まれる前から共働きであり、僕は幼稚園の頃から、家では祖父と一緒にいることが殆どであった。

だから、親は、僕にすっかりとした人間であることを求めた。

僕が本当に欲しいものも、分からないで。

僕はあの時、僕が胸に飛び込んだとき、母に泣いて欲しかった。

無事でいたことを、安心して欲しかった。

大丈夫だった？とか、もう、心配させて！！とか言って欲しかった。

しかし、そんな言葉は一切、僕に投げかけられることは無かった。僕は、ただただ無償の愛が欲しかったのに、傍にいて欲しかったのに、一緒にいて欲しかったのに。

それなのに、母は、僕の手を離した。

そして、僕は、外の世界が、本当に恐ろしいことばかりであると、感じた。

それが、今の僕を作った原因、と責任転換するつもりはない。

実際に僕は、多分に怠惰な人間であったことは認めよう、認めなければいけない。

しかし、その事件が、幼い僕の心を、深く傷つけたことは、事実である。

だから、僕は一番に愛されていたのだ。

母は仕事を生活のためにしているから仕方ない、ただ、僕も見ていて欲しかった。

僕を、一番に考えて欲しかった。

だって、世界の中心は、僕なのだから。

だから、僕はルールを破らなかつた。

規則を守れば、母は、僕を怒らない、僕をしっかりとした人間だと認めてくれる、褒めてくれる。

しかし、ルールを守ること、それは、お互いにお堅い仕事をしている両親にとっては、当たり前のことであつた。

だから、僕の両親は、もう殆ど家にいない。

僕に、興味がない。

僕が、もう進化を止めてしまったから、僕が努力を怠つたから。

僕は、一人がいやだ。

僕を一人にする奴なんて、僕を理解してくれていないんだ。

だから敵だ、僕を一番に考えてくれない奴なんて、みんな敵だ。

不安なときは、一緒にいて欲しい。
それが、僕の求める、愛のかたちだ。
それがないから、僕は死にたかったのだ。
僕なんていなくていいんじゃないか、と、思ってしまったのだ。
だから、僕を人でいさせるために、僕を愛してほしいのだ。
僕を見捨てないで。
僕を一人にしないで。
お願いだから、一緒にいて。
僕を、守って

「くだらないな、高校生にもなつて…僕は」

泣きそうになったので、僕は嫌な記憶を忘れようと、早足になつた。

しかし本当に、黒は僕を置いて、帰ってしまったのだろうか。
僕に、一人で帰れと、一人で生きろということなんだろうか。
僕に、ちゃんとしてほしいのだろうか。
母と、同じように

3

「あ…黒っ」

僕は間抜けな声を漏らした。
狗川黒は、校門の前にいた。

「…逸珂くん。終わったわよ、とりあえず」

僕を見るなり、彼女はにこり、と笑顔を見せる。

「よかった… 怪我してなくて」

終わった、という言葉に若干の不安を感じるものの、彼女の笑顔を見て、僕は胸を撫で下ろす。

「どうやら、彼女は無事のようにだった。」

窓ガラスが炸裂した際にケガをしたのでは、と思ったのだが、どうやら、取り越し苦労だったようだ。

僕は、安心していた。

彼女が無事だったことは当たり前であるが、彼女がすっかり、僕を待っていてくれたことに、安心していた。

黒は、僕の傍にいてくれるようだった。

「怪我ならしているわよ」

「えっ！？何処っ」

黒が少し不満げに漏らすので、僕は目をこらして彼女の全身を、もう一度見てみた。

しかし、何度確認しても、彼女の体にケガは見当たらなかった。

「ほら 直ちて」

黒は、絆創膏が貼られた指先を突き出す。

そして、噛み噛みのまま甘ったるい声を出して、挑発的な笑みを漏らした

「今朝舐めたじゃないですか！！」

僕がつっこむと、彼女は満足そうに笑った。

八分咲きの笑顔だった。

僕をからかうことで元気いっぱいになるのだろう、彼女は。

このシステムが実用化されたら、世界中のエネルギー問題は解決されているであろう。

「ふふっ、楽しっ」

それは何より、なのだが。

僕達には、問題が残っている。

「… 黒、生徒会のことなんだけど」

「ごめんね、逸珂くん、私、バイトがあるから
と、言い、彼女は右手を上げた。
さよなら、の意味であろう。」

「えっ……」
彼女がバイトをしているのは、初耳だった。

まあ、彼女と出会ったのは昨日だし、彼女は謎だらけだから、まあ、バイトもしているのだろう、と僕は思った。

いや、この際、それは大した問題ではない。

僕が、問題に触れようとした瞬間、彼女はそれを遮ったのだ。生徒会の話は、したくないのか。

僕を巻き込みたくないとしても、いつのだろうか。

「じゃ……！」

僕に静止する時間すら与えず、黒は走り出す。

そう、問題なのは、彼女が生徒会的话题を避けている、ということだ。

「あ…… ああ……！」

と、僕は走り行く彼女の背中に挨拶していた。

その声が、彼女に聞こえたかどうかは、分からない。

「黒…… お前……」

ただ、桜並木が終わるくらい遠くまで走った彼女は一旦立ち止まり、こちらに向かつて何度か手を振った。

僕も手を振り返すが、その時には既に彼女の姿は無かった。

このままでは、終わらない。

まだ、生徒会と黒はぶつかる、そう思えた。

黒は、学校のルールなどお構いなしの少女だ。

僕も、そんな彼女に影響されている。

だから、生徒会の決めたルールを破るかもしれない。

バレなければいいのだが、あの生徒会のメンバーの目を盗んで、いちやいちゃするのは、難しいであろう。

次何かあったとき、僕に、何が出来るというのだろうか。

また今回のように、流されるだけなのではないか

「あ、ぱおぱおだ」

僕は校門から離れ、桜並木を歩いていると、その横で、アジアン屋台『ぱおぱお』が店を開いていた。

アジアン屋台『ぱおぱお』は、この大帝都学園の周辺に出没する謎の屋台である。

車の後部が厨房になっており、周囲にパイプ椅子とステンレスの折りたたみテーブルが用意されている。

店長は『慈英さん』という二十台後半の青年だ。

慈英さんは、つかみどころのない、スキンヘッドの青年で、かなりのイケメンである、どこことなく佐藤健に似ている。

なぜかいつもサングラスを着用し、仏教徒のような黒い袈裟けさ

を着ているが、イケメンなのでよく似合う。

町内の草野球にもよく顔を出すらしい、key作品から迷いこんできたのか、この青年は。

しかも、彼は性格までいいのだ。

つい一ヶ月くらい前に、ため息をつきながら下校していた僕にハーフサイズのそばをタダでご馳走してくれたのだ。

ただ黙って、そばを啜る僕を見ながら、慈英さんは「ま、いろいろあるよね」とだけいい、週間少年ヴァンプを読んでいたのがとても印象的であった。

こういふ大人になりたいものであると思っっているのは、僕だけではないはずだ。

「というか、寝てるし」

今日は僕達が生徒会と一騒動している間に客が沢山来たのだろう、慈英さんは車の運転席で眠っており、車の後部の厨房の窓口（ここで料理を受け取ったり、会計をする）には『ご』

用の方は声をかけてください』と書かれた札が置いてあった。

この店は春から夏にかけて、この屋台は『水晶そば』と言われて

いる、どのようにして作ったかわからない透明な麺と野菜の天ぷらが入った蕎麦を出している。

さっぱりとしていて、その味は店を出してもいいんじゃないか、と思うくらいに美味しいのだ。

下校時の買い食いは本当は禁止なので、生徒会が目をつけて、駆けつける前が勝負なのだ。

そんな状況下だというのに、この店は繁盛しているようであった。僕は、そんな屋台を横目に、再び桜並木を歩き出した。

「… 晩飯、ないんだよな」

正直食べていこうか迷った、こんな気分なのだ、あの屋台の水晶そばを食べれば、あの日のように気分も晴れるかもしれない。

僕は、くるり、と振り返った。

次の瞬間、女の子が降って来た

「あーっ先輩探したっスよー!!」

4

「ひいいいッ!？」

甲高い、女子みたいな悲鳴を出してしまった。

上から落ちてくる、という登場方法が先ほど体育館にいた生徒会の四聖天の一人、神城禰と被るため、彼女が来襲してきたと勘違いしてしまったのだ。

「うわっ、私、コウモリ怪人じゃないんですけど、二号っス!! 二号!!」

しかし、それは僕の見間違いだっただけだ。

少し遠くに落下したため慌てて僕に駆け寄る少女、それは猿白砂
麦であった。

「さ、猿白、わ、悪かった。黒は大丈夫だったみたい… バイトが
あるって先に帰ったけど」

僕がもう分けなさそうに謝罪すると、彼女は安心したように、そ
の豊富な胸に手をあてていた。

「そうっすか。じゃあ先輩、今からマクド行きましょうよ!!」

「えっ… でも、もう六時近いし、晩飯食えなくなるぞ」

僕が断りを入れようとすると、猿白は少しだけ寂しそうに僕から
目を逸らした。

「私ん家、お父さんしかいなくて… しかも夜通し働いてるから、
私、晩御飯用意しなきゃなんスよ。」

「そ… そうなんだ」

僕と、同じだ。

なんとなく、黒と同じように謎が多かった彼女に、親近感が湧い
た。

自分で用意しているというのか、だとしたら、偉い子だな。

僕の中で、猿白の好感度が上がる効果音が鳴った、気がした。

「でも流石に今からじゃメンドクサイから、晩御飯、行きませんか
って、うおっと?!」

彼女は素っ頓狂な声を出す。

「どうしたの？」

彼女は謝罪しながら、スカートのポケットから携帯電話を取り出
した。

スマイルマンという、満面の笑みを浮かべる天使の羽の生えた黄
色い球体のマスコットキャラのストラップのついた、ピンク色の携
帯であった。

そういえば、僕も幼稚園の頃、持ってたっけな、スマイルマンの
マスコット

「ちよつとすみませんケータイっス…へえ、ほお」
彼女はメールを確認すると、にやにや、と笑っていた。

「先輩、すみません！誘っておいて何なんです、また今度でいいっスか？！なにやらお父さん今日帰ってきてるみたいで、ご飯作つてあるみたいなんすよ！あのパパりん、たまに作るんです！！すみません本当に！！」

よほど嬉しいのか相変わらず口元は緩んでいるが、申し訳なさそうに言う猿白。

謝る必要なんかないのに、律儀な奴である。

「よかつたじゃん。気にしないでいいよ。僕は買って食べるしさ」
そうだ、僕は一人で大丈夫。

今までもそうしてきたし、猿白や黒に会えたんだから、僕は大丈夫。

寂しくなんか、ないさ。

「よかつたら来ます？」

猿白は体をクネクネさせて、僕の手を掴もうとする。

が、僕は少女のように顔を赤らめ、初々しく一歩後ずさる。

「まつ、まだいいよ…」

おい自分、まだ、ということとは、いつか、行くつもりなのか。まだ、そういう仲じゃなかるうに。

「そうっスか。じゃあ先輩、また明日！！」

彼女は満面の笑みで手を振ると、桜並木を一直線に走っていった。

「ああ！！じゃあ！！」

家族、か

と、感慨にふける、僕。

また、僕の母を思い出してしまいそうになったから、僕は無理や

りにでも、ほかの事を考えようと努力した。

彼女の母は、どうしているんだろうか。

もしかして、父子家庭なんだろうか。

だとしたら、寂しいだろうに。

いや、いつからかにも、よるよな。

僕と、同じなんだろうか。

彼女は、猿白砂麦という少女は

「むぎひとツ?!」

突然の事態に、僕は意味不明な呻き声をあげた。

桜並木を抜け、民家に挟まれた路地裏に入った僕を、猿白が抱きしめていたのだ。

「なっ?!?猿白っ?!なっななッ何をッ!?!」

その豊満な胸に、僕はあやうく窒息しそうになる。

やわらかい肉の塊がセーラー服越しに僕を包み、気持ちよくて苦しい。

口が殆どふさがっているため鼻で息を吸うのだが、その酸素は凄くいい匂いがした。

フローラルな匂いと共に、少し汗の匂いがして、僕の鼻腔をくすぐる。

「...先輩、元気ないみたいだったっすから」

猿白が、優しく僕の耳元で呟く。

その生暖かい吐息が、心地よかった。

「だっ!僕は大丈夫だっ」

そう、僕は大丈夫だから。

もう黒や猿白もいる、一人じゃない。

だから、大丈夫なんだ

「先輩、大丈夫っす。大丈夫… 私が守るから」

それなのに、なんで、お前はそうなんだ。

もう、大丈夫なのに

「猿白っ…」

僕は、暖かい彼女の胸に顔を埋めていた。

柔らかくて、本当に気持ちがいい。

まるで、大きな優しさに、無償の愛に、包まれているようであった。

「私が、あなたのそばにいるから、守るから、安心していいんだよ」
らしくない口調で、彼女は僕に語りかける。

路地裏とはいえ民家に挟まれており誰かに見られてしまうかもしれないというのに、僕は自然と落ち着いていた。

「あなたは… 自分の思うとおりに生きて、いいんだよ」

僕の脳裏に、何かが浮かび、その僕にとって大きなものが、猿白と重なっていく。

この香りは、この温もりは

「か」

母さん

僕は、思わず口をついて出そうだった言葉を呑み込んだ。

すると彼女は何も言わないで、僕の髪を撫でて、ふふつと、優しく微笑んだ。

そんな時間が、数分間、続いた

「ありがとう、砂麦」

彼女の胸から顔を離れた僕は、泣いていたことに気づいた。しかも、彼女の胸の中で、かなりの量の涙を流していたようであった。

それは悲しい涙ではなかった。まるで、心にあった鉛のような気持ちだが、浄化されたようであった。

「あつ、ごめつ！！なんなんだろうな！！僕は… あ、あはは！！
つつか鼻水がつ！！ごめん！！」

僕は彼女のセーラー服に自分の涙に混じって透明な鼻水が数滴ついてしまっていることに気づき、慌ててハンカチを取りだそうとポケットをまさぐる。

しかし、それでも猿白は微笑み、ポケットをまさぐる僕の手をとり、首を横に振った。

「いいんすよ、先輩。それより、携帯、出してくださいっす」

猿白は汚れた制服を全く気にする様子もなく、僕を見つめていた。
「う、うん」

僕は言われるがままに、ポケットから携帯を取り出す。

そして、彼女の指示通りに、赤外線通信を行った。

「メルアドと、番号っす」

猿白のピンク色の携帯から、僕の携帯にアドレスと電話番号が送信され、僕も自分のデータを送った。

「あ、ああ…」

そして猿白は、ピンク色の携帯を赤く染まる自らの頬につけたまま、僕に向かって、熱い視線を送ってきた。

「いつでも呼んでくださいっす。先輩が困ったとき、寂しいとき、私はいつでもそばに行きますから。」

彼女の気持ちに、僕は自分の胸がじん、と熱くなるのを感じていた。

僕は、愛されているんだなあ、と、思い、体全体が震えた。

「ありがとう猿白、ありがとう」

そして、僕は猿白と別れ、家に帰った

僕は、帰って、また泣いてしまった。

一日の中で、あまりに色々なことがあったが、僕は不思議と安心していた。

きっとそれは、猿白のおかげであろう。

そう思うと、僕はまた、涙腺が緩んでしまうのだ。

しかし、泣いてばかりではいけない、と、買って帰るはずだった晩ご飯の件を思い出し、スポーツバツクの中に入っていたかにパンを、初めて口にした。

それが、僕の晩御飯であった。

かにパンは、美味しかった。

涙で少し、しょっぱい匂いがしたが、カニがプリプリとしており、食感がよく、中に含まれていたタルタルソースとよく合っていた。

なぜか、エビのような歯ごたえであったのが、気にはなったが、

僕が、そのかにパンのカニがザリガニであることを知ったのは、もう少し、後の話である

UNU

第12話 やってしまった…

1

黒が転校してきてから、三日目の朝。

朝日が差し込むステนレスのベッドの上で、僕は自己嫌悪に陥っていた。

なんてことを、してしまったのだ。

「やって… しまった」

そう、僕はやってしまったのだ。

ついに、やってしまったのだ。

初めての、ことであった。

例えば彼女が僕を愛してくれているとしても、許されたことではないだろう。

自己嫌悪に胸がいっぱいになりながらも、シャワーを浴び、下半身を念入りに洗う。

まだ宙に浮いたような、フワフワとしたあの独自の感覚が体に残っていた

抜いてしまった。

彼女を、オカズにしてしまったのだ。

しかも、かなりマニアックなシチュエーションで、僕はトランス状態になっていた。

その証拠に、昨日の11:25分以降の記憶が断片化しているのだ。

朝食を終えて自分の部屋へもう一度戻り、僕は周囲を見回して回想する。

が、やはり、よく覚えていない。

「これはひどい…」

ティッシュが、部屋の隅のゴミ箱の周囲に転がっていた。

大方、投げ入れようとしたのであろう、愚か者め。

もう、彼女を直視出来ない。

申し訳なさ過ぎる。

自分は下劣で、知的生命体の誇りのかけらもないことを、ようやく自覚出来た。

酷い、ひど過ぎる。

「…くっ」

だが、今日も登校しなければならない。

どれだけ、現実が厳しかろうと学生は学校に行かなければいけないのだ。

例え、絶対正義を掲げる生徒会が待っていようと。

仕方がないのだ、行くしかないのだ。

それが、今、何も出来ない自分に出来る、唯一のことなのだから

「黒、どうしたんだ…」

僕は、一人で登校し、自分のクラスの教室へとたどり着いた。

黒とは、通学路で鉢合わせにならなかった。

まあ、昨日は彼女が五色米を使い、僕の家まで来たから、一緒に登校出来たのだが、今日はそうでなかった、ということだ。

よくよく考えてみると、黒との間に、毎日一緒に登校する、という取り決めはない。

だから、あまり気にする必要はない、と思っではいるのだが、どうしても気になっている自分がいた。

黒は、彼女ではないのに。

僕にはもつたいたい、女の子なのに。

それなのに、僕は、一緒に登校できないだけで、ここまで、考えてしまうのか。

小さい男だ。

いや、男なのか？

一応、さつきトイレで用を足しているときに股間を確認したから、大丈夫だとは思うが。

「あ、黒、先に来てたんだ…」

黒は、机に突っ伏して寝ていた。

すすすう、と寝息をかきながら、僕の机の方を向いて眠っていた。やっぱり、こういう姿を見ると、黒猫のようである。

「はふう… 逸珂くん…」

黒の寝言を聞き、僕は昨日の夜の出来事を再び思い出してしまった。

罪悪感が、胸をチクチクと刺激する。

僕は、自分のしでかしたことの大きさを、改めて感じた。

「先輩、おはようございまっス!!」

黒に対して小さく頭を下げる僕の後ろで、どたん、と勢いよく席につく音が響く。

「さ、猿白かッ?！」

僕は振り返り、その姿を確認する。

声の主は、猿白砂麦であった。

僕より頭半分ほど低い身長で、豊満で、尚且つ弾力性と包容力のあるバスト。

そして、ポニーテールにまとめられ肩甲骨のあたりまで伸びた緑色の髪。

すっと通った鼻に、丸い瞳、少し幼い顔立ちの彼女は、今日も笑っていた。

「はい!! M G 1 / 1 0 0 スケール猿白砂麦っス!!」

いや、君プラモじゃないから!!

「じ、自分のクラスにいきなよ… 猿白」というか、まだこの席あったのか。

昨日から、ずっとこのクラスにあるぞ、一番後ろの席のはずの、僕の机の背後の机。

そう、猿白砂麦の机が、まだ、そこにはあった。

「いえ、私のクラス、元々、ここでっスもん」

な、そうだったのか!?

僕は、啞然としてしまった。

「隣のA組の生徒って言っただけじゃなかった!？」
確かに言っていたはずだ。

忘れもしない、彼女と出会ったとき、そう言われたのだ。

何より、猿白と出会うまで、僕はこのクラスで彼女を見たことがない。

「あれは、主な生息地がA組って意味っス。先輩がいるから、元のBクラスに戻ってきたっス」

漫画なら、思い切りずっこけていたであろう。

僕はそれほどまでのオーバーリアクションはしなかった。

しかし、本当に出席日数は大丈夫なんだろうか。

成績も本人曰く、低空飛行らしいし

しかし、黒ほどではないが、猿白も、謎が多い。

出自というより、言動や思考が謎である。

昨日みたいに、優しく抱擁してくれる、意外（といったら失礼だろっけど）な一面も、あるし。

あれは、よかったなあ

「うっ」

また、僕は思い出してしまった。

昨日の、夜の出来事を。

眼前の猿白を、僕はまじまじと見つめてしまった。

心臓が、早く脈打つのを感じた。

これは、非常にまずい。

「ん？んんーっ？」

僕の顔を、猿白が不思議そうにのぞき込む。

やめる、やめてくれ。

近い、顔が近いよ。

「先輩、何か赤いつスよ？保健室、行きます？」

桃色の吐息が思い切り顔面にかかる。

やばい。

「い、いい！！だ…大丈夫だ」

僕はカチカチになりながら、猿白と目を逸らし、前を向いて壁に

かけられた時計を確認する。

もうすぐ、ホームルームの時間だ。

そうだ、いちやついている時間じゃないのだ、桃山逸珂よ。

「そうっすか。なら、よかったス」

後ろで、満足げに猿白が言い、の僕のほつぺたを後ろからつまむ。
やめなさいって。

「はい！みんなホームルームよー！！席につきやがれー！！」

教員であり、僕らのクラスの担任である初鮫恋春先生が、勢いよくドアを開け、息を切らせながら教室に入ってきた。

僕は一瞬、美少女の新キャラかと思ったが、やっぱり僕らの先生であった。

首に二重に巻いていても腰まで届くほどに長い金髪に、鮫のような鋭い歯、真ん丸い瞳が特徴的な幼い顔立ち。

身長は僕より頭半分くらい小さい、本当に高校生のようである。

今日は白いスーツ姿である。

「せんせー！！昨日もゲームして夜更かしして遅刻寸前ですかー！！」

男子生徒の一人が、手を上げて先生をからかい、クラスの中がどつと、笑いに包まれる。

「ん… んなわけ、あるかー！！」

先生は確実に動揺していた。

これは、していたな。

確実に、していたな。

ん？

していた？

夜にしていた。

また、思い出してしまった。
僕も、夜にしていたのだ

「ちゅーか、今日は一年生の生徒会役員の人から連絡があるみたい
です！では、先生は一限目の用意をしてきます、以上！！」

先生はそう言つと、皆の反応を見る前に教室から飛び出していっ
た。

逃げ足が早い！！

相変わらず、生徒会の権力には弱い！！

正義感は強いけれど、揉め事とかが嫌い。

まあ、大人は、そういうものなんだろうけれど。

しかし、生徒会のメンバーがこのクラスに来るなんて。

何の、用であるうか

「おはようございます… 先輩方、眠いですね、苦しいですね。死
にたいですねえ」

と、気だるそうに言いながら、彼は教室の中に入ってきた。

と、同時に、全員が静まり返り、後ろの猿白が僕のほつぺたを離
した。

一応、男女間の接触は禁止されているので、猿白も空気を讀んだ
のだろう、偉い。

しかし、クラス内が静か過ぎる。

生徒会に目をつけられないように黙っている、というのは、いつ
ものことである。

しかし、今、クラス内はこれまでにないくらいに、深い静寂につ
つまれていた。

ただ、僕の横の狗川の寝息が、よく聞こえてきたが。

「あ、ボクは『生徒会四聖天』が一人。1年A組、知床寝床しれとこ・ねど」
です… どうも」

皆が押し黙ったのは、彼の格好が、異様だったからだ。
肩まで伸びた黒い髪。

顔には、『仮死』と大きく草書体で縦に、そしてその下に横書きで『911』と書かれた紙が付いており、エヴァ量産機のように、ニヤリと笑っている口元だけが見えた。

そして、ひよる長で、まるでゴボウのような体型をしており、猫背で、ふらふらと立っている。

色も、缶スプレーのグランプリホワイトを使い漂白剤で洗ったのか、と言うほどに白く、言葉からも生気を感じられなかった。

アレキサンドー大王とか、呂布とかの死体を掘り出したほうが、よっぽど生き生きとしているのではないだろうか。

その二つの死体が土葬されているかどうかは、別として。
僕もクラスの連中と同じく、言葉が出なかった。

昨日の出来事を、思い出していたのだ。

生徒会四聖天の一人、天秤計音委員長と黒の心理戦。

そして、生徒会長鬼ヶ島千草

おにがしま・ちぐさ

と、四聖天神城禱

かみぐすく・しとね

による肅清。

その全てがショッキングだったのだが、猿白のおかげで、なんとか、学校に来ることが出来ている。

よかった、彼女がいて。

「彼が四聖天の一人…」

僕は、小さく呟く。

生徒会四聖天。

彼が、あの計音委員長や、触手女の神城袴
かみぐすく・しとね

と同じ、生徒会で会長の次に大きな権力を持っている、この学校の
実質的なナンバー2。

というか、こいつらみんな制服ちゃんと着るよ。

パーカーとか… 服装がちゃんとしているの、計音委員長だけじ
やないか。

「今日は連絡事項がありましてえ、先輩方のクラスに来ました…
計音先輩は、昨日不祥事起こしてしましまして、謹慎中なんでえ」

寢床は、まるで先輩を先輩とも思わないような、いかにも面倒く
さくて仕方ない、といった口調で語る。

学校側の計音委員長への対応を、僕は初めて知った。

先生達は、基本的に学校の治安は生徒会に全部任せなので、面倒
が起きた生徒は、基本的に謹慎か休学なのだが、彼女は前者だった
のか。

「で、連絡なんですけど、今朝、一年生の生徒会役員のメンバーが
一人、登校中の生徒を取り締まろうとした所、何者かにより襲撃さ
れ、病院送りにされましたあ」

彼の言葉に、静まり返っていたクラス内が、流石にざわめき出し
た。

そりゃそうだ、僕も驚いている。

生徒会役員が、やられた？

ありえない。

「先輩、生徒会って確か…」

後ろから、猿白が身を乗り出して僕に耳打ちする。

「ああ、銃器でしつかり武装している… ハズだ。一年の時に見た」
あまり思い出したくない記憶なので、薄れかかっているが、一学年3クラスのこの学校の合計9人のクラス委員長（生徒会メンバー）は、皆、武装している。

だから、やられるはずはないのだ。

彼らは学校の『秩序』と『正義』の象徴なのだから。

誰なんだ一体、襲った奴って

「幸い命に別状はなかったんで安心して下さい。でも、物騒ですよ
ねえ、怖い怖い」

まるで他人事のように言うので、何となく鼻についた。
でも、命に別状がなくてよかった。

流石に人死にがあっちゃ、たまったもんじゃない。

しかし、そんなことを、誰がしたというのだろうか

「生徒会はこの襲撃してきた犯人を捜しています。心当たりのある人は、生徒会のメンバーに言って下さい。因みに言ってくれた人の身の安全は生徒会が保障します」

首を思い切り、後ろに傾けながら、寝床は言う。

そして、教壇から降りて教室の窓に足をかけた。

な、危な

「以上が連絡事項です、では、みなさん、さようなら」

そして、彼は窓から飛び降りた。

ここは、二階である。

皆が戦慄し、女子は叫び、数人が気絶した

「なっ?!… なんなんだよ!!」

僕は窓の外を見下ろすが、彼は無事であった。
いや、脚以外の間接のいたるところが折れているようであったが、彼は砂を被りながら校舎の前の花壇に立っていた。

ありえないことであるが、あれが、彼の『デストラグル能力』なのであるう、恐らくは。

不死能力、か

「皆さん安心して下さい！ー！やっぱり死ねませんでしたあー！！
あーあ、死にたいー！！」

先ほどまでとは違い、寝床は元気そうに叫ぶ。

そして彼は両腕をぶらぶらとさせながら、首を元の位置に戻して笑った。

怖い、スプラッタ映画のようである。

女子がまた数人、気絶した。

誰が、保健室に連れて行くというのだ。

おい、責任者戻って来い。

「先輩方ああ！！ボクを殺せる生徒募集中です！！」

生徒会のメンバーの中でも、こいつは特に常軌を逸していやがる、と、感じた。

自殺願望の塊なのか。

「しかし 生徒会メンバーを襲うなんて… 誰なんだ」
なんなんだ、何が起きているんだ。

生徒会はこの大帝都学園の絶対の権力、それが揺らぐことは、ない。

その運命に抗おうとする奴が、いるというのか。

一年の時に、彼らの『力』は嫌というほど、僕らに示されたとい

うのに。

だから、僕達は逆らう気力すら、ないというのに。
一体、誰なんだ

「重力に逆らえないなんて、不憫なやつっスね」

僕の後ろで、猿白が呟く。

あのね猿白さん、人間は九割がた、そんなもんなのよ

2

「今日は、大体平和だったな……」

深夜、僕はベッドの上で眠りにつこうとしていた

常軌を逸している生徒会のメンバーがホームルーム中に現れたものの、今日は以外に、特に何も起こらなかった。
平和だ。

そして、一日が過ぎていった。

ただ、狗川黒は授業中は寝ているし、昼休みはどこかへ消えてしまっし、放課後はまたバイトが入ったらしくすぐに帰ってしまい、僕は少し物足りなさを感じていた。

まあ、猿白と一緒にいてくれたから、淋しくはなかったが・

「猿白砂麦か……」

「ごろん、と寝返りをうち、僕は間接が許す限りにダンゴ虫のように丸まった。」

彼女は、なんで天井を歩けるのだろうか、本当に、筋力で重力に打ち勝っているのか。

父子家庭なんだろうか、母は、いないだろうか。

そして、僕と出会うまで、なぜ隣のクラスにいたのだろうか。

謎は尽きない。

まあ、黒ほどではないのだが。

いや、その謎は、まあ、後々分かればいい。

一番、知りたいのは、なぜ、僕なんかを好きでいてくれるのだから、ということだけだ。

それが分からないから、少し不安になるのだ。

「さて…… 今日早く寝よう」

僕は、瞳を閉じて、羊を数え始めた。

変な気分になってムラムラする前に、寝てしまおう。

彼女達を想うと、どうしても、そっちの方向にも妄想が膨らんでしまう。

僕は健全な男子高校生なのだ、無理も無い。

早く、羊を数えて寝るのだ、自分。

「寝ろ、自分……」

人間には、唾棄すべき欠陥がある。

ゴリラだってネズミだって、そんなジレンマは感じないのに。

なぜ、一人でエンジンをふかしているんだ。

我慢せねばならん。

今、僕は試されているのだ。

「何時だろ……」

僕は携帯を開いた

この夜、僕がどうなったのかは、僕自身よく覚えていない。
と、いうことになっておいた。

つづく

第13話 だめっこんな所でっ

1

昼休みのことである。

僕と猿白は向かい合って、今、元々は二つであったものを、一つにしようとしていた

「せつ！！先輩だめっ… こんなトコで合体なんて！！」

「猿白のと、僕のをくつつけるだけだから、そっちは動かなくていいよ」

「そ、そつつスカ…！？」

眩しい太陽の光が差し込む、教室の窓際の、一番後ろの席。

それは、猿白砂麦の席である。

「そりゃ、ただ席をくつつけるだけだからね…」

そして、その席に、僕は自分の机を密着させ、猿白と合い向かった。

彼女はピンク色の袋から、重箱に近いサイズのお弁当箱を取り出し、くすす、と笑う。

お弁当箱は花柄で、フタの部分にはシャボン玉を吹いている二人の妖精が向かい合っており、かなりファンシーなデザインであった。どこに売っているのだろうか、そういうデザインのは。

とりあえず、ホームセンターにないのは明らかである。

「……」

黒は今日も、昼休みになったら、すぐどこかに行ってしまった。呼び止める隙すらなく、どこかに。

だから、僕は猿白と昼食をとるために、こうして机を合わせて、向かい合っている。

クラス内の数人の視線が注がれるが、僕はとりあえず気づかないフリをしていた。

「あ、先輩、私作りすぎちゃったから、よかつたら食べてくださいっス」

彼女は、そういう視線を、本当に気にしていないようであった。

「そうなんだ、じゃあ、もらおうかな」

彼女が差し出した可愛らしい弁当箱の中を見ると、確かに女子高生が食べるには少しだけ多い量であった。

卵焼き。

タコさんウィンナー。

ハンバーグ。

メンチカツ。

ご飯。

どれも美味しそうである。

台詞から察するに、彼女が作ったものであるう。

「まあ、計算通りなんですけど」

彼女は得意げに微笑み、フォークでタコさんウィンナーを軽く刺

し、くるくると回した。

「計算してるんだ… って」

僕は動揺を隠せず、思わず二度見をしてしまった。

彼女は、僕の口元にタコさんウィンナーを差し出して、にこにこ
と笑っていた。

「ふふっ先輩、どうぞっ!!」

そして、彼女は頬をその弁当箱のようにピンク色に染め、あーん、
と口を開いた。

「さ、猿白っ… みんなが見てるし、男女間の接触は校則違反じゃ

…」

僕はそのウィンナーを拒もうとするが、彼女は構わずに目を閉じ、
フォークを更に直進させた。

「直接触れてないッス、ノープロブレームッス」

そうきたか。

確かに、このまま僕がパクリと食べても、校則には触れない。

「そ… そりゃ、そうだけど」

と、いいつつ、僕は自らに迫るそのタコさんウィンナーを口にし
た。

そして、恥ずかしながらも、彼女の作ったそれを咀嚼し、嚥下す
る。

「… あ、うまっ」

正直な感想が口について出た。
美味しい。

ウィンナーをただ温めただけじゃなくて、何か味付けがされてい
るんじゃないか、おそらく。

「… おいしいっスか？」

「うん！猿白、料理上手なんだ!!」

猿白は、恥ずかしそうに小さくなりながら、こちらを見つめる。

「えへへ… 褒められちゃったっす」
そして、今度はフォークにミートボウルを突き刺し、僕に向かってゆっくりと近づけていく
「ま、またやるんだ猿白… 恥ずかしいな、もう」
と、言いつつ、僕は口を開けて、目を閉じた。

次の瞬間であった。

目を閉じた僕の前の方で、ガラスが砕ける音が聞こえた。
クラス内の女子が、ぎゃああ、と叫ぶ。
男子も悲鳴をあげる。

「って なんじゃあつ!?!」

僕も目を開き、叫んだ。

猿白の後ろの窓を破って、死体みたいな『何か』が飛来したのだ。
その『何か』は、黒い闇に包まれており、無数のガラス片が突き刺さっていた。

「な、なんなんすか って」

そして、猿白も振り返り、その『何か』を確認する。

「ひひいつ!?!」

驚く猿白の持つスプーンが、僕の眼球に直撃した

「うぎゃあああああ!?!」

僕は、多分クラスの中で一番大きい悲鳴をあげた。

死ぬかと思った。

とりあえず、目は大丈夫であった。

「危うく失明するところだった」

「す、すみませんっす」

僕と猿白は、窓の外から飛来してきた『それ』を見下ろしていた。クラスの皆は、あまりの事態に教室の外に逃げ出してしまい、教室の中や周辺には野次馬すらいなかった。

しかし、ま、まだ眼球が痛い。

「猿白のせいじゃない… 誰だつて驚く、こんな事」

僕は、泣きそうになっていた猿白をフォローした。

彼女のせいではない。

そう、『こんなもの』が落ちてきたら、誰だつて驚く

「あ… 先輩方、こんにちはございます… 着地、失敗ですね、ボクとしたことが」

力なく笑い、蚊の鳴くような声で挨拶をしたのは、生徒会四聖天の一人、知床寝床であった。

この覆面で顔を隠し、不健康そうな体躯をしている少年を、僕は登場しただけならば、特にここまで驚いていない。

僕が驚いた理由、それは、彼を包む黒い学ランはボロ雑巾のように破け、そこから覗く白くて華奢な全身は黒いマダラ模様に染まっており、右腕が欠損していたのだ。

欠損した右腕の先からは、全身のどす黒い液体が垂れ流されており、『可死』と縦に、その下に『911』と横に書かれた紙に隠れているため表情は読み取れなかったが、露わになっている口元は、

苦悶し、震えていた。

僕は、そんな状態の彼に驚き、恐怖を感じながらも、目が離せなかった。

生徒会メンバーを放ってその場から立ち去り、後で面倒なことになるのが嫌、というのも大いにあったのだが。

「ど… どうしたんだ？ せ、生徒会四聖天は、強いんじゃない？」

そうだ、四聖天をここまで追い詰めることが出来る人間なんて、この学校にはいないはずだ。

いるとしたら、もうこの学校に生徒会はない、既に革命が起きているであろう。

しかし、眼前の彼は、どう見ても

「あはは… いやあ、そんなボクもやられてしまいました、例の生徒会メンバーを連続で襲撃してる奴に… ほら、この前ホームルームで話したヤツ」

寢床は弱弱しく笑いながら、残った左腕を使い、器用に立ち上がった。

「これも… 『デストラグル能力』なのか？」

僕は恐る恐る、寢床に問いかける。

こんなことが出来るのは、それしか考えられなかった。

「は、はい… なんか、黒いドロドロの液体を自在に操る奴でした… 激強ですよマジで。顔とか、全く見えなかったけど…」

寢床はそう言い、まあ、会長には勝てないでしょうけど、と付け足した。

「腕… 大丈夫なんスか？」

猿白が僕の制服の袖を掴みながら、恐る恐る問いかける。

「あ、まあ大丈夫です。すぐ生えてきますから。ボクは不死能力
無限再生

ネバーエンディング

』が会長に気に入られて、四聖天に選ばれたんで、再生だけは得意
なんですわ」

そういうもんなのか。

なんでもありだな、本当に。

しかし、痛みを遮断できないのは不憫だな、と 僕は思った。

どうせ不死身ならば、痛みなど不要であろうに。

「戻るのか？」

僕が訊くと、寢床は首を横に振り、にやり、と不敵な笑みをもら
す。

紙により顔が見えないので、不気味である。

「……いえ、桃山先輩、あなたに伝言があるんです。生徒会長か

らの

僕は、自分の体が強張ったのを感じた。

「ぼ、僕にか……」

なぜ、このタイミングなんだ。

そして、なぜ、僕なんだ。

僕は、関係ないはずだ。

黒と計音委員長との戦いでは、こちら側に非はなかった。

そして、僕はルールを破っていない、生徒会長に呼ばれる理由が
分からない。

「そう、桃山逸珂先輩、あなたです」

しかし、寢床はにやりと笑いながら僕を指差す。

間違いなく、僕を指差している。

僕は上級生だというのに指を差すな、このエヴァみたいな猫背の

野郎は。

とりあえず、敬うという言葉は、この少年の辞書にはないのだろう。

社会に出てから苦労するぞ、僕が言えたことじゃないが。

「放課後、一人で生徒会室に来て下さい。だそうです、これを伝えようとしたら、突然襲われまして…」

「な、なんで… 僕が」

「さあ、僕には分かりません… というか、保健室、行って来ますわ… やべ、死にそう」

知ったことではない、といった様子で会話を切り上げ、寢床は急ぎ足で廊下へと駆けていく。

死にたいんじゃないかったのか、彼は。

ただの死にたい死にたい言っているだけの近頃の若者なのか、僕が言えたことじゃないが。

「だ、大丈夫っすかね…」

猿白が、少し不安そうに呟く。

「ヤツは大丈夫だろう、死なないみたいだし」

「いえ、彼ではなく… 先輩が、です」

猿白が、僕の手を握る。

ルールなど、知らない、といった様子で、僕の手を、強く、握り締める。

そんな彼女の手のひらは、柔らかく、暖かい感触がした。

「猿白、僕は…」

呆然と立ち尽くす僕達の元へ、一人の少女が接近して来た。

それは、狗川黒であった。

「あ、逸珂くん、ただいま… って、なんか汚れているわね」

散乱したガラス片と黒い液体を前にして、黒は少し怪訝な表情をした。

こんな惨状を前にして、彼女があまり驚かないことに、僕は少し驚いた。

「く、黒… 今日、どこ行ってたの？」

最近、黒は昼休みにいつもいなくなる。

コンビニに行ってきた、とか、おなかの調子が悪かった、とか、理由はいつも違うのだが、彼女には秘密が多すぎるので、こつ毎日いないと僕も不安である。

もしかして、しょうもない僕に愛想がつかた、とか。いや、そうじゃないと、思いたい。

黒の好意は本物だ、出会った日に、そう感じたのだ、僕はその気持ち、信じたい。

「ん、家に忘れ物をしてしまったから、取りにいっていたの」
スカートについた埃を払いながら、彼女は笑った。

どうやら走っていたらしく、息を荒くしていた。

その様子が、不謹慎だが、少し色っぽかった。

「そ、そうなの？」

「転校してきて色々出さなきゃいけない書類あって、今日提出だったのよ」

忘れ物なんて、黒にしては珍しいな、と僕は感じた。

「そ、そうなんだ…」
よかった。

ほぼ死体のような、満身創痍の生徒会メンバーが飛来したのだ、そんな場に居合わせなかつただけ、黒はラッキーだ。

しかし、そんな惨状を見た猿白は、よほどショックであるに違いない

「… というか、逸珂先輩、黒先輩、これ、片付けないとっス」

と、思ったのだが、猿白はそれほど動揺していないようであった。彼女は教室の後ろの掃除箱から三人分の箒を持ってきて、僕に差

し出した。

「そ、そうだね… 猿白」

僕は箒を受け取り、ガラスの破片を掃き始めた。

「しかし、散らかっているわね。野球ボールでも飛んで来たのかしら？」

呆れ顔でチリトリを持ち、黒は箒でガラスをかき集める。

まさか人間が落ちてきたなんて、彼女は思いもしないであろう。

「野球のボールなら、まだよかつたんだけどね…」

僕はそんな彼女の脚に目がいつていた。

綺麗な曲線を描く、ストッキングを履いた足に、その先にある、スカートに隠されたヒップ。

こんな状況のときに、我ながら、最低である。

「生徒会か」

放課後に、僕は生徒会室に行かなければいけない。

嫌だ。

凄く、嫌だ。

逃げたいけど、逃げたら、どうなるか分からない。

「…」

僕はガラス片を片付けながら、黙って箒を掃き続ける黒を見つめた。

彼女なら、この状況をどう乗り切るのだろうか。

僕は、どうしたらいいのか。

それとも、もう、選択できない状況になっているのか。

僕は無力だから、仕方ないというのか。

やはり、この世界は理不尽に満ちている。

黒は、そんな世界にいた僕に、幸せを与えてくれたのに。

猿白は、安らぎをくれたのに。

それでも、僕は何も出来ないというのか、黒が、計音委員長に呼

び出たねたときのようじ。

やはり僕は、最低だ

第14話 犯人は狗川黒だ

1

放課後のことであつた。

僕は、会長に呼び出され、生徒会室にいた。

本当は、とてつもなく来たくなかったが、生徒会に歯向かい、学校の中で生きていくことは出来ない。

こうするしか、なかった。

だから、僕はここに来る。

生徒会室に

「ここは生徒会室… なのか？」

初めて入る生徒会の光景を前にして、僕は驚きを隠せなかった。

この大学園の秩序を守る武力集団、生徒会。

その活動拠点である、生徒会室は、僕が予想していたものとは、全く違う場所であつた。

僕は、この学校の生徒会室は、武器が満載しただだっ広い部屋で、赤いじゅうたんが敷かれているプレジデントがいるような豪華で、て尚且つ威厳のある部屋であると、漠然と想像していた。

しかし、この部屋は僕の想像の斜め上をいつていた。

というか、部屋ではなかった。

上を向いたら、青空が広がっている。

僕の身長よりも高いフェンスの隙間から下を見たら、僕の住んでいる町が広がっていた。

「天空の城？というか… なんだ、ここは？」

生徒会室。

そこは、一言で言うと、空中庭園であった。

広さは、半径1キロ、といったところであろうか。

どうやら丸い形状をしているらしく、その中心には、互いに共鳴しているかのように緑色の光を放つ白い巨大な石版と、赤い光を放つ黒い巨大な石版が並び立ち、それを取り囲むように、地上では見たことの無いような形状の花が咲き誇っていた。

そして、その石版を中心に十字の形を描くように、床にタイルが張られて通路になっており、僕はその端に立っていた。

「なんか、動物いるし」

タイルが張つてある部分意外の場所は、草木が生え、馬や象などの動物達がそれを食べている。

というか、普通の動物に混じって、一角獣とか、ピカピカ光っている鳥とかいるんですけど。

クラゲみたいな生き物も浮いているし。

どこのファンタジー世界ですか、ここは。

「しかも、空気が美味い……」

すつ、と深呼吸をすると、生気がみなぎるような感覚がした。

山頂のような、澄み切った空気だ。

「ていうか……著作権大丈夫かあれ」

案内もないようであったので、僕は石版が立つ中央部分を目指してとりあえず歩いた。

その途中で、僕は草木の中を歩く全長3メートルくらいのロボットを見つけた。

茶色く丸みを帯びた形状で、蛇腹のような腕を持つそのロボットの動きは鈍重で、肩に小鳥達を乗せていた。

何度見ても、あのロボットにしか見えなかった。

もしかしてここは、新設されたジブリ美術館か!?

「やあ、桃山逸珂くん、こんにちは」

庭園の中央に近づくと、二つの石版のすぐ前に設置されている玉座に生徒会長が座っていて、不敵な笑みをもらした。

玉座は白い大理石で出来ており、背もたれの部分が恐ろしく大きく、美しい花々が纏わり付いた階段の上に設置されていて、自然な形で生徒会長は僕を見下ろしていた。

どこの大王様だよ、と。

生徒会長、鬼ヶ島千草

おにがしま・ちぐさ

肩まで伸びた黒い髪に、どことなく、聡明な狼のような印象を受ける顔。

そして、スマートで背が高く、僕と同じ形状の白い学ランを着てる。

その制服の肩の部分には『生徒会長』と豪快な字が書かれた腕章が付いて、腰のベルトには物干し竿のような日本刀が装着されており、胸にはいくつもの勲章が輝いていた。

というか、よく考えたらこの人も普通の制服着ていないではないか。

まあどうせ、生徒会の特権なんだろうけど。

「こんにちは生徒会長……ここが、生徒会室なんですか？」

僕は、生徒会に呼び出された不安よりも、ここの驚きの方が、若干勝っていた。

会長も不敵であるが笑っているし、即刻僕を死刑、ということは

ないであろう、恐らくは。

というか、そう信じたかった。

こんな天国みたいな場所から天国に行きたくない、二度手間ではないか。

「わざわざ来てもらってすまないね、桃山くん。ここが生徒会室だ、表に書いてあつたらう？」

「た、確かにそうですけど…」

確かに、この部屋に入る前、何度も部屋の表札を確認したが、『生徒会室』としっかり書かれていた。

しかし、ドアの中に入ったら、ここにいきなり来たわけであるが、ドラえものの道具かよ、あのドアは

「まあ、座りたまえ。何、緊張しなくても大丈夫だ、君をとって喰らうわけじゃない。ほら、座りたまえ」

「は、はい」

生徒会長に促され、僕は彼の玉座の前に設置されている白いテーブルに座った。

なるほど、そこまで過激な話をするわけではないのか、と、僕は少し安心した、ほんの少しであるが。

「我々は『聖なる空中庭園

エンジェルガーデン

』と呼んでいる。選ばれたものしか立つことを許されない、聖地だよ」

周囲を見渡し、生徒会長は至極真面目な顔で語り、得意げに笑う。

「…え、エンジェルガーデン」

厨二くさいネーミングだなあ、と言いつつになり、僕は口を塞いだ。

というか、この人たちの厨二くさは今に始まったことじゃない。しかし、聖地、というのは、確かに、なんとなくではあるが納得

出来た。

幻想的な動物や、見たことの無い草花には、それを信じさせるほどの説得力があったのだ。

「私の後ろに石版が二つ、あるだろうか？」

振り向きもせず、会長は言う。

「え、ええ……」

僕は、4メートルほどの距離を置いて並び立っている巨大な石版を見上げた。

大きさは、縦10メートル、横は3メートル、といったところであらうか。

この生徒会室に来て、一番最初に目にとまったのが、この巨大な石版である。

「白い石版が『セントモノリス』、そこにあるだけで人類の進化を促すもので、中に天使が封印されている、と言われている」

緑色の光を放つ白い巨大な石版には、6つの翼を生やし、慈愛に満ちた微笑みをもらす天使が刻印されている。

天使の下には、その絶対的な存在を崇めているかのように手を挙げている人々が刻まれていた。

それはまるで、大いなる存在である天使が、様々な脅威から人々を救済しているかのような絵であった。

「そして、もう一つが『ダークモノリス』。あの中には強大な悪魔
『大姦獄

だいかんじく

』が封印されていて、その悪しき力で少しずつ人類に災厄をもたらすのだ」

僕は、黒い石版に目を奪われた。

白い石版は、なにか、綺麗過ぎた。

慈愛の天使が人々を救済するという構図が、まず受け入れられな

い。

だって、そんなものがあるとしたら、今、こんな状況の僕を助けてくれるはずじゃないか。

それに比べて、黒い石版はシンプルであった。

全てを破壊するほどの『力』を、僕はそこから感じた。

石版には、その『大姦獄』とおぼしき悪魔が刻印されている。

羊のような角をもち、剣道の防具のような殻につつまれた顔とそこから覗く鋭い眼光。

そして、ドラゴンのような翼を生やし、刺々しい皮膚に覆われた、人型の体。

その下には、人々が恐怖におびえているかのように手を挙げて刻印されていた。

不謹慎かもしれないが、僕はどちらかというところの絵の方が好きだ。

「そ、そうなんですか… な、なんでそんなもんが、ここに」

まるでカルメ焼きのようにスケールが大きくなっていく話を、僕はどうにか理解しようと勤めた。

大丈夫だ、まだ中二くさいだけだ、まだ理解できる。

「かつて、天使がに地球に降り立ったとき、選ばれた『人間』という種をあの花から作ったのだ。あの『セントモノリス』はその力の源なのだ」

なんか話がすごい方向へ行っているな。

確かに、あんな綺麗な花なら、人々が生まれてきても、おかしくはないな。

地上ではありえないほどに大きいし。

「そして、悪魔は人間と天使が暮らすこの庭園を襲った。人間が自分達の権威を脅かす存在と考えたのだ。天使は自らの力を全て使い、悪魔を封印し、人々を地上に下ろしたのだ」

ああ、なら、その時、人間を滅ぼしてくれれば、今、こんなに僕は苦しまなかったのに。

ということとは天使は力を使い果たし、白い石版の中に自らを封印したのか。

うつむ、なんとも香ばしい設定だろうか。

この生徒会室が空中庭園でなく、普通の部屋であったなら、絶対に、全く信じていなかったであろう。

「私は生徒会長になったとき、『デストラグル能力』でこの庭園と繋がる次元断層をようやく作ることが出来たのだ」

ただ、ここがあまりにファンタジーな世界なので、なんとなく、説得力があった。

あ、今僕の足を天使の翼が生えたウサギが通っていった

「おっとすまない脱線してしまった、用件の方が気になるだろうか？
逸珂くん」

謝罪の言葉を口に行っているのに、鬼ヶ島会長の口元は笑っていた。この人は、自分をどれだけ偉い人だと思っているのだろうか。

恐らくは、自分を神かなんかだと思っているに違いない。

だから、先ほどのような話を恥ずかしげもなく言えるのだ。

「え、ええ… はい。僕、学校のルール、破ってないですよね？」
そんな野郎に、こんなに低姿勢な自分がいるのを、あまり認められなかった。

強者に媚びへつらい生きていかなければいけないというのか、それが、弱い僕の唯一の道なのか。

なにか「そうだよ」と、石版の天使に言われたようで、意味もななくむかついた。

「ああ、君はルールを破っていない。彼女と違ってね」
会長の表情が少し曇る。

その言葉と表情で、僕は確信した。

会長の狙いは

「黒のこと…ですか？」

僕の言葉に、会長は深く頷く。

「随分と親しいようだね。彼女は好きかい？」

「はぐらかさないで下さい……」

会長は深刻そうな表情で、僕に問いかける。

黒は好きだ、そう言いたかったが、今はその事が関係あるのだろうか。

僕は、彼女がなぜ、生徒会に目をつけられているか、知りたかった。

前回の計音委員長との戦いの発端は、委員長の個人的な感情だったのではないか。

だからこそ、計音委員長は肅清されたんじゃないのか。

「では、単刀直入に言おう」

こほん、と咳払いし、玉座から身を乗り出す生徒会長。

僕は、思い切り息をのんだ

「最近になって起こった生徒会メンバー連続奇襲事件、あの犯人は
狗川黒だ」

会長の言葉に、僕は頭の中が真っ白になった

つづく

第15話 私は童貞でね、君もだろう？

1

「最近になって起こった生徒会メンバー連続奇襲事件、あの犯人は
狗川黒だ」

会長の言葉に、僕は頭の中が真っ白になった。
そして、足が震えていた。

「そ、そんな…冗談ですよね？」

僕の脳裏に、生徒会四聖天、知床寢床の満身創痍の姿が浮かんだ。
黒いマダラ模様が出来て片腕が吹っ飛び、息も絶え絶えだった彼
は、狗川黒に倒された、というのか

「いや、彼女が見ていた」

会長がそう言つと、セーラー服の上に黄色いパーカーを着て、顔
を眼球を模したピンにより完璧に閉じてあるフードで隠した少女、
神城褥が一角獣に乗って現れた。

「…」

褥は無言のまま、僕の向かい側の椅子に座った。

「み… 見間違いですよね？」

大体、この人前見えてんのか。

フードが顔を完全に隠しているし。

「… いいえ」

と、短く言つと、彼女の制服の裾から、芋虫のような小さな二匹
の触手が這い出てきた。

その触手の先端には、眼球がついていた。

この触手が見ていた、ということなのだろう、恐らくは。

「な、なんで… 黒は生徒会の人を襲っているんですか!？」
そうだ。

彼女と生徒会が戦う理由が見つけれられない。
計音委員長に目をつけられたことへの腹いせか、にしては、生徒会全体を敵に回すなんて、大げさ過ぎる。

生徒会と戦うのだから目的があるはずだ、それはもう、大きな目的が

「彼女は生徒会を壊滅させてここを占拠し、あの『セントモリス』の力を手に入れようとしているのだ。だから、彼女はこの学校に転校してきたのだ。」

嘘だ。

彼女は、ここに転校してきたのは、僕がここにいるからじゃないか
ったのか。

家庭の事情で隣町から引っ越してきた、と黒は言っていたが、彼女ほどの完璧人間なら、もっといい高校があるはずだ。

黒が僕に好意を抱いているから、僕がここにいるから、彼女はわざわざここに転校してきたと、雑然と思っていた。

「彼女の狙いは君の『力』、だから君を守っているに過ぎない」

僕の希望を、会長の淡々とした言葉が打ち砕く。

「ち… 僕に力なんて、ありませんよ。猿白とか、黒ならまだ分かりますけど」

そうだ。

彼女の僕に対する好意は本物だ。

でなければ、こんな何のとりえも無い少年に、あれほど躍起になるものか。

「『デストラグル能力』、あの草花から生まれた最初の人類に近い、清き体をもった選ばれたもののみが使える『力』」

会長は、右手を、雲がかかってしまった太陽にかざす。

すると、その掌から白い光が漏れ出し、太陽を隠した雲を打ち消した。

これが、生徒会長たる彼の力の断片だということのか

「清き体って…」

会長はふん、と笑いながら僕を見つめた。

「私は童貞でね、君もだろう？」

得意げに言う会長。

おそらく、こんなに自信満々にそういうことを告白できる人も、世界中でこの人だけであろう。

というか、僕と違って、この容姿なら卒業のチャンスなんて腐るほどあつたらうに。

この人はどこで間違ってしまったのだろう、まあ、あまり興味ないが。

「ま… まあ、はい」

そう。

僕は美少女二人に囲まれながらも、純潔を保ったままであつた。

さすがは草食系。

いや、単にヘタレなだけであるが。

「ならば君は確実に能力者なのだ、思い出してみたまえ。今まで生きてきた中で、一回は使ったことがあるはずだ」

いやいや、ないない。

というか、なんで断言できるんだこの人は。

どんなに記憶を辿っても、僕はそんな中房みたいな能力、使った

覚えがない。

「そんなわけ……」

会長の視線が僕に突き刺さる。

絶対的な自信に満ちた瞳に釘付けにされ、僕は動くことが出来なかった。

そして、その背後から緑色の光が差し込んでいく

「ここでは『セントモノリス』の力で君の思い出す力も増幅されている。大丈夫だ、思い出せる」

セントモノリスが光り輝き、僕は、自分の体に違和感を感じ、頭を抱えて俯く。

それは、自らが忘れていた記憶を呼び起こすような、思い出す能力が増幅していくような、感覚であった。

これがあの石版の、進化を促す力ということなのだろうか。

「ぼ……僕は」

そして、僕は忘れられた記憶の断片を、思い出していった

2

僕がまだ、幼稚園に通っていた頃。

同じ幼稚園に、一人の少女がいた。

名前は、もう覚えていない。

長い髪に、春夏秋冬問わずいつも長袖の服を着ており、下は長いズボンを履いている、活発的な格好の女の子であった。

しかし、服とは対照的に性格は大人しく、いつも僕の歩くあとを

ついてくる子であった。

ある日、その少女が一人で横断歩道を歩いていた時、一台の車がそこにつっ込んできた。

その時だ。

その時、僕は確かに使ったのだ、『デストラグル能力』を。
その力で、僕は彼女を宙に浮かせ、歩道まで移動させた。
そうだ、僕は使っていたのだ、異能の力を。

そして、その際、車が弾いた石が僕の頭为天辺を通過し、小さな傷が出来た。

なぜ、その女の子がそこを歩いていたのかまでは思い出せないが、確かに、僕は女の子を助けたのだ。

そして、女の子はいつの間にか、この街から消えていたのだ

3

僕は、髪で隠れている小さな傷を触ってみた。

確かに、頭为天辺には、小さな傷があるようであった。

「まさか、あれが僕の能力？」
思い出した。

そうだ、僕は小さい頃、一人の少女を助けた。

名前は忘れてしまったが、その少女を助けた時に、物体を操る力を発揮している。

それが、僕の『デストラグル能力』だ。

「どうやら… 思い出したようだね」

呆然としている僕を見て、会長が満足げに口元だけで笑う。

「え、ええ… どうやら、会長の言うとおりだったようです」

なぜ、会長は分かったのだろうか、僕は不気味に思ったが、この会長なら、何でもお見通しなのだろう、非常に嫌な感じではあるが。「そうか、なら、君はその『力』を、どう使うね？」

会長は僕を見下ろしながら問いかける。

力もなにも、物体を動かすだけなんて、それだけじゃ、現状を変えられない。

もつと圧倒的な力さえあれば。

ひたすらに強大で、破壊力に満ちていて、このすかした顔をしゃがる会長から全ての決定権を奪うくらいの力があれば、僕は今ここで使っている。

どう使うも、使いようが無いじゃないか。

何をやっても、無駄だ

「ブラックエンド 狗川黒の力は絶大でね、能力名『終局の漆黒』。君も見ただろう？ 今日襲われた寢床は今も保健室で寝ている。彼女は『力』をそういう風に使うのだよ」

それはあんたも同じだろう。

力で人々の意見を封殺し、絶対者になろうとしている。

だから、今もその玉座に座り、僕を見下ろして語っているのだ。まるで王のように、啓示のように、僕に語ることができるのは、その『力』を圧倒的な暴力に使っているからだ。

黒の気持ちも、分からないでもない。

「もうこちらは、寢床と褥、そして、君は見たことないが『高町くん』の『四聖天』の残りメンバーしかいなかった。普通の武装した委員長達は皆、彼女の倒されてしまったのだよ」

凄まじい快進撃だな、黒。

しかし、このままでは、互いに潰れるだけだ。

彼女がどんなに強くても、あの四聖天とかいうアブノーマルな連中と、この会長が一気に攻めてきたら、君は負けてしまう。

巻いたら、どうなるかなんて、君は分かっているだろうに

「そ、そんなバカな… そんなの… 嘘だ!!」

しかし、僕にとって一番認めたくないことは、彼女が僕に近づいた理由だ。

会長の言うとおりに、僕の能力が黒の目的であるはずがない。

こんな能力くらい、他の人でも十分代えがきく。

だから、彼女にとって、僕でなければいけない理由があるはずなんだ。

きっと、僕でいけない、何かがある

「今日、試してみるといい。彼女を誘っても駄目だったら、あの女は自分と君の『デストラグル能力』喪失を恐れている、ということになる」

恐ろしく淡々と言う会長。

確かに、僕の能力が目的なら、自分の能力が惜しいなら、僕が誘っても彼女は拒むはずだ。

まあ、僕が彼女をそういう行為に誘えるほど甲斐性はないのだが。

しかし、会長の言っていることが確かならば、最近、僕との間に距離をおいている彼女の行動に説明がつく。

信じたくはないのだが

「それと同時に、彼女にとって、君は手駒ということだ」
そんなことはない、と言いきれない自分が悔しかった。

「会長は 僕にどうしろと言うのです？」
そうだ。

なぜ、僕をここに呼んだのだ。

わざわざ、そんな事実を伝えるためだけに、僕を呼ぶほどの人は暇じゃない。

何か他に理由があるはずだ。

この人にとって、圧倒的にことを有利に運ばせるような何かがある

「君に生徒会のメンバーに、そして『四聖天』の一人なって狗川黒の拘束に力を貸してほしい。そして、その後は学園秩序の回復に努めてほしいのだ」

会長が、小さく頭を下げていた。

そんなに、こんなちっぽけな力が必要なのか。

「そ、そんな… 僕が」

明確な答えを出さない僕に対し、会長は少しだけ眉をひそめる。

「生真面目な君はムカついていただろう？ ルールを平気で破る輩に私も、そういった人間のクズには憤慨している」

確かに、そうだ。

いや、そうだった。

僕はルールを平気で破る奴が、大嫌いだった。

それでいて、リア充な奴なんて、みんな死ねと思っていた。

そして、その調子こいたリア充を粛清してくれる生徒会を、心の底から正義の味方だと思っていたのだ。

しかし、それは、『だった』に過ぎない、過去形なのだ。

「だけど… 僕は」

僕は、黒にからかわれるのが、楽しいと感じた。

猿白の胸に抱かれて、安心した。

ルールに縛られて完全に荒んだ僕の心を助けてくれた彼女達との関わり合いは、学校のルールからは外れている。

だが、僕は確かに、そのルールから少し外れた彼女達の行動に、助けられたのだ。

黒と、猿白と出会う前であつたのなら、会長の誘いに即答しているであろう。

しかし、今は違う。

生徒会の崇高な理念に従いながら学園生活を送るのは、苦痛だ。

僕には、ルールよりも大切なものがある

「君は騙されているんだ、あのルール破りの狗川黒に。君が協力してくれるなら、なんとかそんな彼女でも捕獲できるかもしれない、特別な便宜を図ろう」

だけれど、僕には今の現状を変える力はない。

だから、せめて彼女を助けるために、会長に助力した方がいいのではないか、という考えが頭をよぎる。

しかし、会長が特別な便宜など図るわけがない、ありえない。

状況は完璧なまでに八方塞りであつた。

「このままでは、私が『本気』で戦わなければいけない、そうなつたら、彼女に未来はない」

会長は玉座から立ち上がり、壇上から跳躍した。

「そ、そんな…」

そして彼は僕の傍らに立ち、ぼん、と肩を叩いて、僕を真っ直ぐに見下ろした。

「もう時間がない、なるべく早く、答えをくれ。そして覚えておいてくれ、我々、生徒会は君の味方だ」

相手に選択させるつもりなど微塵も感じさせない口ぶりで、会長は僕に言う。

「……」
強きものの言うことを聞き、自分よりも弱いものを見下す。それが、十数年の人生の中で身につけた僕のなけなしの処世術である。

だから、本来ならば、生徒会長の言う通りにするのが、僕の選択肢なのだが。

「……明日には、答えを出しておきます」
僕は、そう答えていた。

あまり時間がない、というなら、明日でいい。
こんな気持ちのままでもいい。
なら、明日が期限でいい。

「そうか。いい答えを期待しているよ」

会長が口元だけで笑う、もう、彼は僕を生徒会に入れたつもりなのだろう。

僕はその場から、駆け足で逃げ出していた。

不思議動物や、ロボット兵などにわき目も振らず、僕は地上の学校と繋がる扉へと、来た道を戻っていく

「なんなんだよ…… なんなんだよ、なんなんだよ、なんなんだよ
おお！！」

情けない声をあげて、僕は通路とフェンスの間にある、赤い扉につっ込んでいく。

もう、何が何だか、分からなかった。

黒は、僕が好きだから。

僕も黒を、好きだから。

黒に、好かれていると、今でも思っているから。

それなのに、なぜ、彼女を疑うような気持ちだが、沸いてきている

のだろうか。

もう、僕では、何も出来ない。

強い力を持った絶対的な存在、それこそ、あの石版に刻まれた悪魔のようなものよ、僕を救ってくれ

「誰でもいい、誰か… 僕を助けてよお!!」

叫びながら、ドアを開け、僕はその場から逃げ出した。

もう、二度と来たくはない、天国のような、地獄から

つづく

第16話 だから先輩は我慢しなくて、いいんですよ？

1

僕を取り巻く状況は、最悪であった。

僕の彼女で転校先で優等生で能力者で美少女、狗川黒は生徒会と全面戦争をしていたのだ。

しかも、僕に何も言わないで。

生徒会長の話を全て鵜呑みにするほど馬鹿ではないが、計音と戦った次の日から彼女が僕を避けていた理由も、彼の言っていることで説明がつく。

彼女は最初から、僕の『デストラグル能力』が目当てで、最終目的は生徒会室（という名の天空の城）の『セントモノリス』の力。

信じたくないのに、黒は今日も僕の傍らにいてくれなかったから、信じそうになってしまっている弱い自分がいた。

そんなはずはない。

そんなことのために、僕に近づくわけがない。

大体、僕がまだ、あの力を使えるとは限らない。

使えないかもしれない。

というか、万全に使える、更に強力な力なら、この状況に陥った僕は生徒会と表立って敵対している。

だから、違う。

彼女は僕の力が目的ではない。

そう、信じたかった

「先輩、大丈夫だったっすか?!」

ドアを開けて薄暗い廊下に戻ると、向かい側の窓際に猿白砂麦が立っていた。

ずっと待つててくれたのだろうか、ハンカチをくしゃくしゃに握りしめて表情を曇らせていた彼女は、僕が無事であることを確認し、少し安心したようであった。

「さ、猿白か…」

はああ、とため息をつき、僕はとつさに彼女と目を逸らす。

今の僕にとって、彼女はまぶしすぎた。

いや、元々、僕には不釣り合いなんだが。

「本当によかったっす… 逸珂先輩、私を置いていっちゃうんスもん!しかもこのドア全然開かないし!」

べしべし、と重力すら無視出来る筋力を誇る腕で、涙目の猿白は生徒会室の扉をぶん殴る。

しかし、この校舎の真上にある天空の庭に繋がる生徒会室の赤い扉は、傷一つついていないようであった。

頑丈すぎるだろう。

「先輩が、無事で…」

猿白は口をへの字にして言葉を呑む。

そして、赤くなつた右手をさすりながら体を震わせ、潤んだ瞳で僕の顔を見つめた

「でも、猿白… 僕は… つ!?!」

僕はまた、彼女に抱きしめられていた。

柔らかい胸に包まれ、前かがみに立つたままの状態の僕は視界を塞がれた。

「よかつたっす… 本当に…」

猿白は、ぐぎゅうつ、と音が出るくらいに、僕を強く抱きしめる。しかし、その柔らかさで、不思議と痛いという感覚はなく、ただひたすらに気持ち良かった。

「先輩… 大丈夫だから、もう怖くないから…」

彼女がまた、らしくない口調で、僕に語りかける。

まるで、無償の愛で包み込むような、優しい声。

温かく、まふわふわとした感触に、やはり僕は窒息しそうになる。

セーラー服と、汗と、フレグランスの香りがした。

この前は、この抱擁でかなり癒されたものだ。

しかし、今は

「僕は…」

しかし、今は前回と状況が違う。

以前のようにはならない。

僕はもう、選択肢すらない深い絶望の中にいるのだ。

そう、僕は涙など流さない

「な… なんてだよ…」

そう、思っていたのに、僕は彼女の胸の中で、涙を堪えていた。

また、この胸で泣くわけにはいかない。

今の僕は最低すぎるから、そんなことはしてはいけない。

でも反則じゃねえか、こんなの。

癒されるに決まっているだろ。

気持ちいいに決まっているだろ。

泣きたくなるに決まっているだろ。

僕に足りない欠けた心を、彼女が埋めていくような感覚に、僕は包まれていた。

「僕は… なんでこんなに… 無力なんだよ…」

自分の意思を通すことも出来ず、彼女を助けることも出来ず、右往左往するだけの存在。

そんな僕が、こんなことをしていいんだろっか。

こんなに、気持ちよくなっただいいんだろっか。

「なんで… 猿白は… 僕のことを」

そっだ。

君は、なんでこんな僕を好きなんだろっ。

僕は、ルールに縛られた根暗、容姿は中の下か、下の上。

君たちに会うまでは、なにもなかった男だ。

黒や猿白に会って、初めて、幸せを感じることが出来たのに。

「昔… 交通事故を起こしそうになった時、あなたに助けられたから」

彼女の言葉に、幼少の頃の記憶がフラッシュバックする。

僕と仲のよかった少女に起こった、あの事故。

僕が、デストラグル能力を発動させた唯一の出来事。

僕は少女の名前も忘れ、事件自体の記憶も欠如していたのに、彼女は覚えていたのだ。

その頃の面影ももうないだろうに、彼女は、分かっていたのだ。

「そっか… 猿白、君が」

僕は、胸から脱出し、抱きしめられたまま、猿白の顔を見つめる。彼女は、瞳を潤ませて泣きそうであったが、必死に笑顔を作っていた。

泣きそうな僕の前で、精一杯強がって、彼女は笑っていた。

僕を包み込むために。

僕を、不安にさせないために。

彼女は、泣きそうな顔で、笑っていた。

「君が、僕が助けた女の子
君、だったのか。」

幼稚園児だった僕が助けた少女は。

それが、君が僕を好きな理由。

それなら、全て説明はつく。

僕はこの学校で、君に出会ったのではなく、再会を果たしたのか。
なら

なら僕は、君の胸で今、泣いてもいいよね。

僕は、もう限界だから。

色々なことが起き過ぎて、でも、選択肢はなくて、自分が無力で
最低過ぎるから。

だから、もう、いいんだよね。

僕は、また、泣いていいんだよね。

なあ、猿白

「だから先輩は我慢しなくて、いいんですよ？」

人けのない放課後の廊下に、茜色の夕焼けが包み込む。

そんな世界の片隅で、ちっぽけな僕は、一人の少女の胸に、自らの顔を埋

うず

めた。

そして僕は、声をあげて泣いた

U
U
U
U

第17話 バナナの皮を踏んでしまった。

1

そこは、彼女の部屋だった。

フローリングの床の、真新しく、少女には少しだけ広い部屋。壁にはかわいい栗色の猫が眠っているポスター、窓には花柄のカートンがあり、木製のベッドには白いシーツと布団があり、枕元には赤いリボンを額にティンベアがいた。

勉強机の上には様々な料理の本やマンガ本が散在し、タンスも置いてあり、その上にはこの前作っていたガンプラが置いてあった。

そんな、ファンシーな部屋で、学ラン姿の僕はテーブルの前に座って、セーラー服のままの猿白と鍋を囲んでいた。

鍋の中には、鶏肉のダンゴや鶏肉、葱に白菜に白滝、などなど、とりあえず色々なものが入っている。

そう、猿白の提案で、学校帰りにスーパーにより具材を購入し、僕達は鍋を食べていたのだ。

あんなことがあったばかりなので最初は拒んだのだが、彼女がどうしても、というので、そうしていた。

彼女も、僕を思っていることであろう、だから、僕は彼女の言うとおりにしたのだ。

「なあ猿白お〜もお僕はいやだあ〜」

僕は真っ赤な顔で立ち上がり、千鳥足で猿白に接近し、彼女の膝に顔を埋め、うずめた

める。

柔らかい、そして、制服のスカートの感触も、よい。思考が遅く、体がふらふらとして軽く、熱い。

そう、僕は飲酒をしてしまっていたのである。

勿論、校則どころか法律違反である。

良い子も悪い子も真似しないで頂きたい。

そして、良い子にも悪い子にも普通の子にもお飲酒を勧めないでいただきたい。

僕が言えたことじゃないが。

僕も、飲酒など、するつもりはなかった。

しかし、仕方がないのだ。

猿白の父さんが大量に買い込んであったという冷蔵庫の中のチューハイを見て、ああ、これを飲めば少しは楽になるのか、と思ったのが、発端であつたあ。

魔がさしたのだ。

「ういっいっ」

もう、嫌だ。

何もかもが、嫌だ。

だから僕はシラフな状況であることを拒んだ。

もー本当に、このまま酔っ払っていたい。

初めてのアルコール類で、思考が鈍るが、それがいい。

もう、考えたくないのだ、色々なことを。

「先輩、もうお腹いっぱいっすか？」

猿白が僕の顔を覗き込む。

膝まくらをされ、とても頭が気持ちいい。

ああ、もう、本当に何でもいいや。

「まだ食べたい」

まるで赤ん坊のように、太股にスリスリと頬をすりよせる。

「ふふっ、甘えんぼさんがいるッス。はい、あーんっ」

ああ、なんか眼前にポニーテールの女神がいます。

「あーんっ」

僕ははふはふ言いながら、彼女が箸でつまんだ鶏肉を食べる。

あつたけえ。

「猿白お… 転校しようもつゝあそこヤダよ、マジで。くそウザい童貞会長を筆頭に童貞処女軍団

せいとかい

が独裁してるしッ！！最低だよッ！！」

僕はそう言い、どんどん、と床を叩いた。

既に、僕の周囲で起きていること、この学校で起きていることは猿白に全て話した。

そして、それが今は酒が回り、愚痴になっていた。

しかし、なんて甘い匂いなんだろう。

この部屋にもフアンスイーな匂いが充満しているが、猿白本体からは、それを何倍にも濃くしたような香りがした。

もう、なんでもいいや。

「明日、黒先輩を何とかつかまえて、初鮫先生に相談しましょ…
ね？」

猿白の言葉使いが、普段の気さくなものから、母性に満ちたものへと変わっていた。

この状態の猿白は普段の二倍増しの可愛さだ。

というか、どストライクだ、普段もかわいいんだが。

「うん… 僕は、猿白の言つとおりにするー」

しかし、うちの学校の先生達の無能さ、無責任さといったららないな。

あのチビスケな初鮫先生だって、転校の相談くらいのとてくれる
だろうけど、本来なら、もっと今回だって介入してもいいはずだ。
ほんつとに大人つて奴は、保守的で、自分だけが大切な奴らば
っかりだ。

自分達が危ないと思ったら、平気で生徒達を放置しやがる。
あの事件のときもそうだ

『血の一年生歓迎会』

2

僕達の学年は、入学してきた当時、不良達が三割、という、どう
しようもない人間達の集まりであった。

彼ら不良達は、入学当初、この学園を取り仕切ることなど簡単だ、
と豪語していた。

上級生に不良がほぼ、いなかったからだ。

だから、彼らは入学式で壇上上がり、他の生徒達に迷惑をかけ
まくった。

上級生はその光景をみて、ただただ、怖れていた、不良達ではな
いものを

そして、入学式の次の日、『一年生歓迎会』が行われた。

生徒会の主催で、体育館で行われたそれは、大帝都学園という組
織の在りようをこれ以上ないほど表現していた。

なんと、入学式を妨害した主犯格である13人の不良生徒達が壇
上の上に設置された十字架に磔にされてリンチにされ、残りの不良
達は生徒会メンバーと一对一の戦いを強いられた。

それを、生徒会は見世物のように行い、僕達を戦慄させた。

流れる不良達の血は、広い体育館の床を赤く染め、今でもその跡が残っている。

その時、先生達は何もしなかった、生徒の自主性を尊重する、という理由で。

僕達の学年は先輩達の中になぜ不良がないのか、入学式で何を怖れていたのか、ようやくそこで理解した。

この学園にとって、生徒会は全ての決定権をもつ絶対の組織であり、僕達はそれに従うしかないのだと

3

圧倒的な力による、一方的な粛清。

それが、『血の一年生歓迎会』の全容だった。

そんな狂気に満ち満ちた学園で、いちやいちやしつつ、学業を全うすることなど、初めから不可能だったのだ。

誰だよ、シナリオ書いたヤツ。
狂ってるよ。

バイオレンスでアナーキーだよ。

なら僕は、いつまでも、こうしていたい。

もう、彼女の太ももに住もうかしら。

「だって僕は猿白の彼氏だし〜ねえ？」

それもいつそ、それでいいかもしれない。

このフトモモの感触をいつまでも、味わっていたい。

「うん、逸珂先輩は私の彼氏だから… いちばん、好きだから」

猿白は、僕を受け入れてくれるから。

彼女は、僕を包んでくれるから。

「猿白くもう、何も考えたくないよおく僕はもう限界だよお… 本
当に…」

僕はテーブルの上に置いてあるチューハイを手に持ち、ちびちび
と飲む。

「センパイ… 辛かったんですよね、本当に辛かったですよね
」

そんな僕の髪を、彼女は優しく撫でる。

柔らかい指の感触が、心地よい。

「僕はいつもそう、小さい頃から誰もこうしてくれなかった 母
さんだって、僕より仕事が大事だったんだ」

そう、結局人間なんて、一番自分が大切なのだ。

だから、僕が僕を一番大切にいて、何が悪い。

僕は悪くない。

悪いのは、この歪んだ世界全体だ。

「だから僕は一番になりたいんだ、一番好きでいてほしいんだ。こ
んな最低の状態になつても… 絶対に嫌いにならない、そんな絶対
的な愛が欲しいんだ」

僕は秘めた思いを吐露する。

それは、産まれたて赤子と同じものである。

それは分かっちゃいるんだ。

だけど、仕方ないじゃないか。

僕は、本来与えられるべき愛情を、与えてもらえなかったのだか
ら。

歪んでも仕方ないのだ。

そうでなければ、弱い僕は生きてこれなかったのだ。

「先輩はずつといちばんだったんですよ、私にとって。だって、あなたに助けられた命だから…」

猿白は、僕を見下ろして、優しく微笑む。

その微笑は、まるで女神であった。

いや、本当に女神なのかもしれない。

ああ、女神さまなのだ、彼女は。

三本目のチューハイを空にした僕は、すりすり彼女めがみ

のお腹に顔を擦り寄せる。

すると、彼女はくすぐったさそうに体を震わせる。

「だから、私は先輩を否定しませんし、嫌いになんてなりません…

私は、先輩の女です」

ちゅく、と、彼女は僕のおでこに昆布ダシの匂いのするキスをして、二号だけれど、と笑った。

どうせなら唇のほぅがよかったかな、と思いつつも恍惚としていると、彼女はそれを察したのか、柔らかい右手の指先を、僕の口の中に侵入させる。

「猿白… きもちいいゆび、やわらけ」

まるでマシユマロのような指を甘噛みして、僕は目を瞑った。

本当に、このままでいたい。

しゃぶっていたい、彼女の指を。

なんだから、体がぼかぼかして、温かい。

「はうっ… 歯並びいいですね、センパイ」

しかし、僕は甘噛みし過ぎていた。

僕は飲酒をしていたため、なんとなく、こみあげてくるものを感じた、しかも、一気に。

我慢できない。

やばい、これは非常にまずい

「うっうぶ…」

なんてことであろうか。

僕は膝枕の体勢のまま、彼女のスカートと太ももに戻ってしまった。
た。

女神のお召し物を、汚してしまったのだ。

「きやつ」

さすがの猿白も、驚いて小さく声をあげる。

僕は、酔ったままではあるが、彼女の膝枕から離れ、土下座した。
それはもう、深々と土下座していた。

頭が、真っ白になっていた。

嫌われてしまう。

流石に、これはまずい。

どうしよう。

怒られる、嫌われる、幻滅される。

捨てられる。

母や父が、鳴かず飛ばすの僕を見限ったように。

僕を好きじゃなくなる、一番じゃなくなる。

嫌だ。

僕は、なんてことをしてしまったんだろう。

全てが、一瞬にして、奪われた。

いや、自滅だ、墓穴だ。

僕のせいだ、全て僕のせいだ。

僕が…

「ごっごめ!!猿白… 僕は!」

土下座したまま、何回も謝罪の言葉を口にする。

猿白は、驚いた表情のままテーブルの上の雑巾でスカートの上の僕のリバーズをひとまず集める。

「だ、大丈夫です。ちよつと、驚いちゃったけど…」

そう言いながら、彼女は立ち上がり、その場でスカートをすると脱ぐ。

「もう、大丈夫だから。不安なことなんて、ないから。センパイは、安心してください… ね?」

そして再び、あの女神のような微笑をたたえ、部屋の照明を背にうけながら、僕を見下ろした

「さ… 猿白… 砂麦… 君は…」

いや、女神のような、ではない。

僕は確かに、彼女の姿に、女神を見た。

彼女は、女神だ。

こんな最低な、本当にこれ以上墜ちることのないほどに最低な僕を赦し、愛し、包んでくれる。

彼女を女神と呼ばずして、何を女神と呼べばよいのだろうか。

僕を助けてくれる、絶対的な愛。

それは、僕の小さな世界の、唯一の希望、光だ

「あ、ありがとう…」

彼女に汚れた学ランとシャツを脱がされ、上半身裸になった僕は、ただただ、感謝の言葉を口にしていた。

それしか僕には出来なかった。

それしか出来なかったのに、僕は今、幸せだった。

絶対的な存在が、眼前にいるのだから

「猿白ッ！」

僕は、猿白を抱きしめようと彼女に抱きつこうと一步を踏み出す。

「あっ……」

が、その一步で僕はバナナの皮を踏んでしまった。

なんでそこにバナナの皮が置いてあったのかは分からない、僕も猿白も食べてない。

バナナでコケルなんて、コントかよおい。

「せつ！？先輩っ！？」

驚く猿白の声が、遠くに聞こえた。

そして、僕の意識は黒い渦の中に消えていった

4

「なんでお母さんは、いつも家にいないの？」

物心ついた時に、僕は母にそう訊いていた。

母が僕を抱きしめたのは、たった一回だったという。

赤子の頃のことは知らないが、確かに、僕は母に抱きしめられたことがないように思える。

僕は生まれたときにだけ抱きしめられ、あとは、何もなかったの

だ。

母は仕事をしており、僕を産み、体力が戻らないうちから病院で仕事をし始め、そして、退院と同時に職場に復帰した。

僕の育児は、じいちゃん（故人）と保育園の保育士さんが行ってくれたのだ。

だからであろうか、僕はひどく他人の体に触りたがる子供だったようだ。

そんな子供が、周囲の人間に受け入れられるわけもなく、僕は先生からも煙たがられるプチ問題児であった。

保育園のお迎えの時間が、一番嫌いだった。

なんで、他の子はお父さんとお母さんが迎えに来てくれるんだろう。

なんで、あんなにくっついてるんだろう。

なんで、僕の母さんはいつまでたっても、むかえにきてくれないんだろう。

別に、迎えに来てくれる祖父が嫌いだったわけではないが、数々の疑問を抱えた幼い僕は、夜遅くに帰ってきた母に訊いていたのだ。なんで、家にいないのか、と。

「それはね、お母さんは、あなたが愛おしいと思えないからよ」

背中を向けながら、母は、そう答えた。

その時の僕は幼く、その意味がよく分からなかった。

少し大きくなるまで、母の言葉の意味を、その残酷さを理解できなかったのだ。

産んでは見たものの、母にとって僕は全てではなく、自分の人生を食い潰す、邪魔者だったのだ。

邪魔だから、せめて、いい子であってほしい、自分の邪魔はしな

いでほしい、そう、願ったのだ。

不幸中の幸いだったのは、母が、息子に愛がないことを十分理解し、自覚していたことであろう。

偽りの愛は次第に歪む、傍にいたくもないのに傍にいたら、憎しみに変わる。

そして、その答えが、僕を次第に歪ませていった。

なぜ、僕をつくった。

避妊に失敗したのか。

いや、社会的な立場から結婚し、子供をつくったのか。

どうして、ここに僕がいるのだ。

愛し合って、生まれた尊い命が、僕ではなかったのか。

それが違うと知ったとき、僕は納得した。

僕は多分に怠惰であったが、それは、仕方のないことだったのだ。

むしろ、そんなに世界から疎まれてる僕ならば、生きているだけで素晴らしいではないか。

僕は、他の人間よりも、生きている価値があるのだ。

他の人間は恵まれているから、生きていて当たり前、努力が出来る当たり前、しかし僕は、生きているだけで素晴らしいのだ。

だから、どれだけ他人が泣いていても、僕が笑えればいい。

僕が笑顔になれるなら、他の人間は、泣いていていい。

だが、現実には厳しい。

僕以外の人間は笑っていた、笑いながら、他人と手を取り合い、僕が与えられなかった愛に満ちた人生を歩んでいく。

僕は、そんな奴らを見るたびに、灰色の涙が流れてしまった。

どんどん、世界から色が消えていくような、感覚。

もし『力』があれば、僕は幸せそうな奴らを、片っ端から、消していったであろう。

粛清し、殺戮し、皆が平等に、ルールに則って生きる世界。しかし神は、それをなす力を僕に与えなかった。

僕は、羽をもがれた黒い天使だったのだ。

だから、死にたかった。

投身、入水、首吊り、等々。

色々な願望が、逃避したい思いが僕の胸の中で渦巻き、世界への怒りのマグマと融解し、心の中に混沌

カオスを生み出す。

だが、僕は死ななかった。

それで、よかったのだ。

生きていて、よかった。

生きていてよかったのだ。

僕は、生きていてよかったのだ。

死なないでよかったのだ。

モノクロの世界は、今、終わる。

彼女が、僕の歪んだ物語を終わらせてくれる。

そのあとに何があるのかはわからない。

大切なのは、今。

もしも、とか、だったら、とか、そういう仮定の話ではなく、僕が選択し、そして、直面している今なのだ。

折れても曲がっても、ゲロ吐いても、バナナでコケても愛してく
れる人がいる、そんな僕が生きている、今なのだ

第17話 バナナの皮を踏んでしまった。(後書き)

18禁版ではここからが濡れ場だったんですが、某知事が規制するのでバナナを置かざるをえなかったのです。

第18話 私は、いつくんのカノジョになるんだから！

1

僕が、幼稚園に通っていたときのことである。

他人の体に触れたがる僕は保育園の先生や周囲の人間から嫌われていた問題児であったが、唯一、仲良くしてくれる女の子がいた。いや、正確には、僕が一方的に仲良くしようとして、彼女はそれを拒まなかった、というのが正しいのだが。

僕は、その子が、いつも気になっていた。

その子は、普通の子とは、少し違った雰囲気を出していた―

彼女は、いつも汚れた服を着ており、他の女の子よりも、明らかに痩せていたのだ。

感動も喜びもしない瞳で彼女は周囲を見つめていた。まるで、目に映る物が全て自分には関係ない、とでも言うかのように。

そんな、不思議な雰囲気の少女であった。

彼女は普通の幼稚園児からしてみたら、かなり近寄りがたい雰囲気をしていたので、今思えば。

しかし、当時の僕は愛に飢え、他人が自分に対してどう思っているかお構いなしであったため、彼女と関わることに抵抗はなかった。「なんで、そんなにひつつくの？」

僕が手を繋ぐと、そう彼女は言い、不思議そうに首を傾げる。

「ん… あったかいから、かなあ」

幼い僕は自分が満たされていないことを、全く自覚できていなか

った。

寂しい、という感覚は毎日、雑然と感じていたが。

「そうなんだ」

彼女は、ただただ不思議そうに、首を傾げる。

いつも、こんな感じのコミュニケーションを僕たちはとっていた。

かみ合わない二人であったが、なぜか、僕は彼女のことを気にな
って仕方なかった。

僕が、一方的に彼女と共にしようとする。

彼女は、それを拒むわけでも、受け入れるわけでもなく、ただ、
受け流していた。

両親のお迎えの時間に、僕と彼女は最後まで残るので、一緒にい
る時間は自然と多かった。

祖父が僕を迎えきたのと同じくらいに、彼女の母はやってくる。

僕の通っていた幼稚園は保育園に入れなかった子供の受け入れも
行っていて、かなり遅い時間まで、先生達が面倒を見てくれていた。

僕も彼女も、その保育園に入れなかった部類の子供だった。

どうやら、少女には父親がいなく、母に育てられているら
しい。

彼女の母は、薄幸そうな感じのやせ細った人で、髪はぼさぼさ、
顔はノーメイク、服はくたびれたジャージ、という風貌であった。

そんな母を見て、僕は彼女のことを、僕と同じで寂しいのかな、
と思った。

だから、僕は、彼女と更に共にいた。

そうすることで、彼女も楽しくなるのでは、寂しくないのでは、
と思ったから。

しかし、事件は起こった。

彼女はある日、見通しの悪い道路の横断歩道から、左右を確認して飛び出したのだ。

乗用車が横断歩道に迫るその刹那、偶然その場に居合わせた僕は『デストラグル能力』を初めて使い、彼女を助けた。

車に乗った男性と、その娘も無事だったが、そこは、よく覚えていない。

僕は自らの力に恐怖しながらも、彼女に問いただした。なぜ、飛び出したのかを。

すると、彼女の口から信じられない言葉が飛び出した

「お母さんが、私がここで轢かれればお金になるからって……」

少女はぐしゃぐしゃに泣きながら、そう言った。

僕は、彼女の涙を始めて見た。

彼女は、母親に虐待されていたのだ。

必要最低限か、それ以下の食事、日常的な暴力、ネグレクト、それに類する扱いを受けていることを、彼女は告白した。

そして、彼女は保険金をかけられていたのだ。

金のために、母親は彼女を殺そうとしたのだ。

僕は守りたい一心で、彼女を連れて交番に駆け込んだ。

彼女は親が捕まるのを嫌がったが、それでも僕は彼女を引っ張って、お巡りさんに動いてもらうように懇願した。

そして翌日、少女の母は児童虐待の罪により逮捕され、彼女は施設に入ることになった

「ありがとう、逸くん……」

お別れの日、僕の家の玄関の前で、彼女はそう言って頭を下げた。僕は、彼女の母を逮捕させてしまい、恨まれているかと思ったから、その行動が意外であった。

「ごめんね……僕のせいで」

僕は、お礼に対して謝罪の言葉を口にしていった。

「ううん、いつくんのおかげで、今、生きてる。だから」

彼女は、僕とキスをしていた。

小さな僕は、普段はおとなしい彼女だけに驚いた。

「いつか、同じ『がっこう』に行けるようになったら、私がいつくんのカノジョになってあげる！」

そして、彼女は僕の手を握りながら宣言する。

僕のために、彼女になってくれる、と。

一緒に学校に、行く、と。

「いつくんが自慢できるくらい完璧なカノジョになって、私の全部をあげる！ずっと一緒にいてあげる！」

そして、これからも頑張り続けることを。

彼女がとんでもない逆境の中にいることは、幼い僕でも分かった。

だから、僕は彼女の約束が嬉しかった。

彼女が前向きに生きていこうと思ってくれていることが、嬉しかった。

この上なく、嬉しかった。

「じゃ、じゃあ、『がっこう』でも、手をつないでくれる？僕と、キスしてくれる？」

そして僕は興奮し、勝手に色々な約束をとりつける。しかし、彼女は嫌な顔一つせず、うんうん、と頷く。

「うん！私は、いつくんのカノジョになるんだから！」

そして、感極まった僕は、彼女に今、何かしてやれないか、幼いなりに考えた。

「じゃ、じゃあ…これ、あげる！」

「な、これ…いいの!？」

「うん！あげる…君だから、あげる！」

僕はそう言って、ポケットから、リボンを取り出した。それは、幼稚園の制作の時間で作ったリボンであった。古い服を流用した赤い布で作られているそのリボンはチープなこのこの上なかったが、彼女は喜んで、頭につけてくれた。

「ありがとう、本当にありがとう…いつくん、大好き！」

そう言って、笑いながら、彼女は迎えの車へと走っていった。

僕は手を振りながら、泣いていた。

嬉しいけど、寂しくて、泣いていた。

そして、なぜか、僕は彼女を、忘れてしまった

深い眠りにつきながら、僕は欠けた記憶の断片が、少しずつ、蘇
っていくのを感じていた。

そう、彼女は約束を果たしたのだ。

だから、こうして思い出して、夢に見ているのである。

彼女のおかげで、今、僕は幸せだ。

世界でいちばん、幸せだ

つづく

第19話 狗川黒は会長にさらわれました…

1

昨日僕はここで彼女と鍋を囲み、酒を飲み、そして

「つつー!!」

僕は思わず、ベッドの中に顔を隠す。

今、僕は裸の状態だった。

そう、僕は昨日、ゲロを吐いてしまい、バナナでこけて倒れたのだ。

「先輩！おはようございまっす！」

「ゴセパ ザバギンバシグラ ゴ・ガドル・バザ!!」

意味不明な叫び声をあげ、僕は赤面する。

砂麦が僕の隣で眠っていたのだ。

「だ… 大丈夫ですか先輩？」

彼女は少し苦笑いをしながら、僕の顔を覗き込む。

大丈夫か、大丈夫じゃないかでしたら

「大丈夫」

僕は砂麦の頭を右手で支えたまま、彼女の唇に軽くキスをした。

「んっ… 先輩、あつたかいつス」

「ごめん砂麦、昨日、あんなカッコ悪くて…」

僕が謝罪すると彼女はたはは、と笑い、ベッドから降りて立ち上

がった。

「お酒入ってたし仕方ないっすよ！」

やっぱり砂麦は怒らなかつた、代わりに、太陽みたいに元気で屈託のない笑顔を僕に見せてくれた。

あの状態の僕を受け入れてくれた彼女だ、些細なことでは幻滅しないんじゃないか。

まあ、それに慣れては、男としてダメなんだろうけど。

「制服： 大丈夫だったの？」

確か僕、彼女が着ている制服のスカートの上に吐いた気がするんだけど。

「スカートだけ冬服のものを使ってたっす、昨日のやつはクリーニングに出しときました。大丈夫っす、大丈夫っす」

はは、と笑いながら、ぴらぴらとスカートをめくってみせる砂麦。ポニーテールと豊満な二つのメロンが、ふさふさと揺れた。

というか、僕はなんでそんな場所ばかり見ているのであるうか、発情期のウサギかよ。

「そ、そうなんだ…」

手際がよい彼女に、僕は恐れ入っていた。

この子は人のフォローをさせたら宇宙一なんじゃないだろうか、恐らく。

「制服と下着はそこに置いてあるんで、着替えたら下に来てくださいっす、朝食作ってあるんで、一緒に食べましょっす」

まあ、なんとということでしょう。

彼女は僕よりよっぽど早く起きて制服をクリーニングに出し、代

えの制服と朝食を用意してくれたというのです。

なんと出来た彼女なんだろうか。

リフォーム番組のビフォーアフターのナレーションもびっくりするくらいに、よく出来た少女である。

「……」

砂麦が階段を使い一階に降りていく音が小気味よく響く。

一人になった彼女の部屋の中で、僕は制服に着替えながら、気持ちの整理をしていた。

「そうだ… 僕が童貞でもただの童貞ではない、あんなかわいい彼女がいるんだから。昨日までの僕じゃ、駄目だ」

そうだ、こんなにもよく出来た彼女がいるのに、僕がこのままじゃ、釣り合わないじゃないか。

砂麦は僕のために、数え切れないくらいのことをしてくれたのだ。だから、僕は、このままじゃ、いけないのだ。

普通に生きている人間なら、この時点で具体的な目標を立てることが難しいと思う。

ただ、僕の場合は明らかに違う。

どうにもならなくて、昨日の僕が丸投げしていた、問題を解決しない限り、僕は彼女に釣り合う男にはなれない気がした。

だから、僕は、やれるだけ、やってみようと思う。

とりあえず、今、僕が一番最初に解決しなければいけない問題は

砂麦の家の一階のリビングに、僕たちはいた。

床がフローリングとなっていてリビングには、大きな液晶テレビとソファ、ジュークボックスがあり、彼女の家の生活水準の高さを感じさせる。

そんな広い部屋の真ん中の床に座り、僕と砂麦と朝食をとっていた。

「砂麦、僕は黒と生徒会の闘争を、止めたいと思うんだ」

僕はよく焼けた秋刀魚にポン酢をつけてもぐもぐと食べながら、決意を述べた。

そう、僕は逃げないことを、決心したのだ。

確かに、生徒会に怯えて、転校することだって、出来ないことはない。

ただ、逃げたくないのだ。

僕は、猿白の、そして黒の恋人として、恥ずかしくない行いをしたいのだ。

僕は、今までは考えられないほどに前向きで、それでいて、色々吹っ切れていた。

悔いのない選択をしたいのだ。

だから、これ以上悩むのはなしだ。

悩んだって、この問題は解決しない。

自分の過去とか、そんなのは、逃げる理由にはならない。

僕はもう、逃げない。

それが、不器用な僕が表現出来る、彼女達への誠意だ。

「そうっすか！では、この猿白砂麦、どこまでも先輩について行きますよ！」

砂麦はそう言い、ご飯をぱくぱくと頬張る。

僕が吹っ切れたことが嬉しいのだろうか、彼女の笑顔には、一点の曇りもなかった。

それほどまでに、僕を信じてくれている、ということなのだろうか。

とにかく、そんな彼女は、とても心強かった。

生徒会は未だに怖いけれど、彼女達がいれば、百人力だ。

僕は、頑張れる気がした。

「あ、砂麦、しょうゆ取って」

「あ、はっいつス」

それにしても、砂麦の料理は美味しい。

シンプルな日本の料理ではあるが完成度が高く、家庭の味がする。

僕も一通りのものは作れるが、彼女くらい美味しいものが作れるかといったら、ノーだ。

今度、料理も教えてもらおうかな。

出来れば、彼女は裸エプロンで。

って、それじゃ、料理覚えられないか。

「つつ！砂麦！これチョコレートソース！」

僕は、卵焼きに思い切りチョコレートソースをかけてしまった。

生徒会と黒の闘争を止める。

そんな一大決心をして、戦いを止めるために、どんなに苦難の道であつても話し合いで解決しよう、と思つたのに、その矢先であつた。

僕と砂麦は、家から飛び出し、学校に向かおうとしたのだが、扉を開けた瞬間、そこには、地獄絵図が広がっていたのだ。

「なんなんだ…一体」

何が、起こつたというのだ。

砂麦の家の前の、民家に囲まれた小さな道路。

そこには、僕たちが通う大帝都学園の三人の生徒が血まみれになり、倒れていた。

「な、なんなんスカ…？」

砂麦は瞳を見開き、驚きを隠せずに後ずさりする。

「ど、どうしたつて言うんだ…こいつら」

僕は思わず、スポーツバックを地面に落としてしまった。

それほどまでに、衝撃的な光景が、目の前に広がっていたのだ。

手前に倒れている、二人の生徒の顔（正確に言えば覆面であるが）には、見覚えがあつた。

二人とも、生徒会メンバー、しかも『四聖天』の人間であつた。

「この人は…生徒会の人っスよね」

うつ伏せになってぶっ倒れているのは、知床寢床。

顔には、いつもの如く『仮死』と大きく草書体で縦に、そしてその下に横書きで『911』と書かれた紙が付いていたが、今日はその紙にも亀裂が入っており、見ようと思えばその素顔も覗けるとは思うのだが、パンドラの箱と。

エヴァ量産機のようにニヤリと笑っている口元は、だらしなく半

開きになり、血をだらだらと流している。

色も、缶スプレীরグランプリホワイトを使い漂白剤で洗ったのか、と言うほどに白い肌や、対照的に黒い学ランはところどころに傷つき、茶色い砂をかぶっていた。

目だった欠損はなかったが、片腕を失っていた時以上に、今の彼は虫の息であった。

もしかして、本当に死んでいるのでは と、僕は少し怖くなった。「それでいて、この人は… あの時の」

そして、その知床の横の豪快に倒れている小さい女子は、生徒会四聖天の一人、『神城禱』。

セーラー服の上に羽織っている黄色いパーカーはボロボロに破れ、顔に被ったフードの前面を閉じている眼球を模したピンも、半分以上砕けていた。

彼女の周囲には大小様々な触手の残骸が無数に転がっており、血なまぐさい臭いが鼻をつく。

「で、あちらは… どなたでしょうっすか？」

砂麦が恐る恐る指差した、二人の背後に倒れていた少女だけは、僕は見たことがなかった。

セーラー服のスカートがふくらはぎに届くほどに長い、純白のその布は真っ赤な血で汚れていた。

また、制服の腕部分にとりつけられた生徒会副会長という腕章は、真っ二つになり、全身傷だらけであった。

黒くて長い髪をツインテールに結んでいるが、その髪により半分以上は隠れていた顔はまるで死んでいるかのように生気がない。

どうやら、他の二人よりも傷が深く、昨日の知床のように、黒いマダラ状の模様をした液体が全身を覆っていた

「そ、その人はボク達生徒会が誇る『四聖天』最強の少女、『コン
ブリート・オブ・エース』高町あねは先輩… です…」

ぐへっ、と大量に吐血しながら、足元の知床寝床が顔を上げた。

どうやら、起き上がることにすらままたまらない深手を負ったらしく、
触手の死骸を枕にごろんと寝転んだ。

「って… 生きてたのか」

あまりの惨状に、不死能力をもつ彼も流石に死んでしまったのか
と、一瞬思ってしまった。

「とりあえず勝手に殺さないで下さい、一応生きてますよ。その二
人も大丈夫でしょう、恐らく」

知床はそう言いながら、首をきよろきよろと動かし、残る二人の
生徒会メンバーの姿を確認して、「あ、やっぱ大丈夫」、と頷く。

「な、何があつたんすか… これは」

砂麦は、この惨状を前にして、ふるふると足を震わせ、僕の制服
の端をつかむ。

だが、それでも、彼女は僕の隣に立ち、真相を知ろうと、知床に
問いかける。

本当に肝の据わった少女である。

「ええとですね… 僕達『四聖天』は鬼ヶ島会長の指示で、狗川黒
を撃滅するために… ここを歩いていた彼女を強襲して… そりゃ
もう、絵にも描けないくらい凄まじい戦闘をしていたんですわ…」

なぜ、こんな場所を、黒は通っていたのだろう。

いや、この際、そんな事は大きな問題ではない。

生徒会の最強の四人（今は一人減ってしまったが）が総出で、黒

を倒そうと戦ったのである、砂麦の家の前で。

そこまで、彼女を倒したかったのか、この生徒会という組織は。全てのメンバーを犠牲にしてまで、一人の少女を、倒したかったのか。

わからない。

それでも、この三人を倒す黒の底の知れない力も理解できないが、それ以上に、なぜ、ここまで、生徒会が彼女を倒そうとするのか、理解出来なかった

「なんでそこまでするかって…顔、してますよね、桃山センパイ」

知床が、僕の顔を下から覗き込み、苦笑いする。

「あ、ああ… なんでだ、なんで黒をあそこまで
気持ちが高ぶり、語気が少し強くなる。」

寝床は、枕にしていた触手の死骸をぶん投げ、小さく舌打ちした。ここまでポロポロにされていらいらしているのはなんとなく分かるが、これ以上街を散らかすな。

「ああ、酷いんすよ… 生徒会長のヤツ、本当の狙いは狗川黒の『能力』だったんすよ… 腹立たしいことなんですがね」

僕は、少し驚いていた。

なぜ、彼は生徒会長に対し、苛立っているのか。

生徒会は、一枚岩の組織ではなかったのか。

「どつという意味なんだ… 黒の能力って… 昨日言ってた『終局の漆黒

ブラックエンド

』か？」

知床はポロポロの体をごろごろと動かし、苛苛を全身で表現していた、全力で。

相当、彼は気が立っているのだろう。

「そうですね、昨日『エンジェルガーデン生徒会室』で見た、ダークモノリス』があるじゃないですか」

ああ、あつたなそんなもん。

エンジェルガーデンとは、某天空の城の庭を彷彿とさせる生徒会の活動拠点である。

そして、『ダークモノリス』は、その庭の中心部にある巨大な石版。

強大な悪魔『だいかんじく大姦獄』が封印されていて、その悪しき力で少しずつ人類に災厄をもたらすもの、と会長は言っていた。

しかし、その『ダークモノリス』が、どうしたというのだ。この話に関係あんのかよ。

「会長は『ブラックエン終局の漆黒』を使い、フ狗川黒を生贄にして『大姦獄』を完全に封印するつもりなんですわ……」

僕は思わずしゃがみ、知床に掴みかかっていた。

心の中で、何かがぶちん、と弾けたのを感じる。

「何が封印だ！生贄にされた黒はどうなる！お前達はルールを無視している生徒を肅清するのが目的じゃなかったのか！ふざ…… けんな！」

僕は、激しく知床を叱責した。

ふざけるな。

こいつらには、こいつらなりの正義があるから、ルールを破るものと戦っていたんじゃないか？

それがあるから、こいつらは、黒とここまで戦ったんじゃない、なかったのか。

「そんなにキレられても… つうか、ボク達だって… そう思ってたってたんすよ。でも、この件に関して会長は最初から狗川黒の能力が目的だった。だから、ボク達には真相を隠して… 唯一、最終目的を知っていた天秤計音委員長の口も封じた」

寢床は胸倉をつかんでいた僕の手を振り払い、力なくうつ伏せの状態になった。

「そんな… 馬鹿なこと
そうだったのか。」

こいつらは、生徒会長の言う正義を信じて、間違っているなりに、戦ったというのに。

最初から、黒が転校してきた時から、もう既に会長は彼女の能力が目当てだったというのか。

計音委員長が今そこでぶっ倒れている神城に肅清という名目で陵辱されたのも、その最終目的のため、だったのか。

だから、あの時、計音は、理不尽そうな顔をしていたのか、黒を倒す目的通りに動いたのに、その指示を出した人間に裏切られてでも、それはもう人のすることじゃない。

人間のしている、ことじゃない。

「そんなのって… ないっすよ！」

僕の隣で、砂麦が震えながらも憤慨する。

「そこまで… やるのか、鬼ヶ島千草という男は」

僕は、もう怒りを通り越して、憎悪すると共に、半ば感心していた。

「そこまでやるのか、と。」

「そこまでして、あの童貞生徒会長は、自分のやりたいことをやるのか、と。」

「全てを犠牲にして、生徒会のメンバーにすら嘘をつき、そこまで」

して彼は学園の秩序を守りたいのか。

いや、もうこれは、秩序を守るとか、そういう綺麗なもんじゃない。

彼は、世界を自分の思うとおりにしたいだけなのだ、きっと。

僕も童貞であつたのなら、黒や砂麦と出会つてなかつたのなら、その欲望はまだ理解出来たであろう。

世界を自分の思い通りにしたい、あまりに幼稚で、独りよがりで、勝手に、残虐な欲望。

その気持ちをもつてしても、僕は具体的な行動は何もしてこなかつたが、鬼ヶ島生徒会長は、違う。

彼には、力がある。

だからであろう、周囲の人間の価値などない、全て、自分のためにある、と思つているのだろう、本気で、心の底から。

「歪んでる… おかしいよ、そんなの…」

僕は、過去の僕に対しての戒めの意味も込めて、小さく呟いた

「そして、僕たちはそうとは知らずに三対一で何とか彼女と相打ちにまで持ち込みまして… 満身創痍の狗川黒は会長にさらわれまして…」

僕は、一瞬、耳を疑つた。

僕の全身の血が凍つたような感覚に陥り、ただただ、僕は立ち尽くす。

憎悪の感情が消え、一瞬、思考が完全に停止した。

狗川黒は、こいつらを倒して、逃げていったんじゃないのか。理不尽な戦いでも、なんとか、凌いだんじゃないのか。

「なんだっ… て？」

僕は、耳が悪くなったのだろうか、それとも、聞き違いだろうか。

狗川黒が、さらわれた。

そう、うつ伏せになった彼が言った気がしたのだ

つづく

第20話 私がいつくんのカノジョになってあげる！

1

狗川黒が連れ去られた。

その事実を受け入れることが出来ない僕は、立ち尽くした。

「う…嘘だろ」

何かの悪い冗談だろ。

きつとそうだ。

こいつは、ふざけてやがるんだ。

ふざけた組織のメンバーだから、ふざけやがっているのだ。

「いえ、センパイ方が来る丁度10分前くらいに…あの野郎、自分の目的を全部ばらして『ご苦労』とだけ言いやがりました」

でも、こいつの顔はマジだ。

本気で、黒は連れさらわれたのだ。

くそ。

どうにか、しなきゃ。

僕は、彼女を助けなきゃ。

「あの」

知床寝床が、ふるふると体を震わせながら、僕に話しかけていた。舌打ちしながら、僕は彼を見つめた。

「なんだよ…」

ボロボロのはずの知床が、ふらふらと立ち上がる。

まるで、白いスプレーで塗った力カシのようである。

風が吹いたら、すぐ倒れそうなくらいに、不安定な直立をして、

彼が僕に尋ねる。

「狗川黒が言ってたんすけど、学校で手を繋ぐことって、そんなに大切なんですか？」

僕は彼の言葉の意味が分からず、苛苛としながら彼を睨みつける。

「… どういう意味だよ？」

僕が言くと、知床は気まずそうに頭を掻きながら言葉を続けた。

「いやね、狗川黒に聞いたんですよ、なんでそこまで戦えるのかって。そしたら彼女、『手を繋ぐって約束したから』って答まして…
まあ、その数十秒後にボクはぶっ飛ばされましたが」

約束。

手を繋ぐ、約束。

黒は、約束のために、戦っていたのか。

「約束？」

そんな約束、僕もしたような気がする。

いや、気がするじゃなくて、確実にしていた

学校でも、手を繋いでくれる？

うん！私は、いつくんのカノジヨになるんだから！

僕の脳裏に、少女と交わした約束が蘇る。

「その少女が、猿白砂麦だと言うのか
……」
「だとしたら、全ての辻褄が合う。」

昔… 交通事故を起こしそうになった時、あなたに助けられたか
ら

そう、砂麦は「起こしそうになった」と、言っていた。
決して「轢かれそうになった」とは言っていない。

砂麦のあの言葉は、そういう意味だったのだ。

「そ、そういうことだったのか……」
僕は、呆然としながらも、あの時、あの状況が、脳裏に蘇って
いくのを感じた。

今、欠けた記憶が鮮明に蘇っていく

2

いぬくろちゃん。

幼い頃の狗川黒のことを、僕はそう呼んでいた。
彼女にそう呼べと言われたわけではなく、僕が勝手に、そう呼ん
でいた。

そして、自分のことは『いつくん』と呼ばせていた。

特に彼女がそうあだ名を付けたわけではなく、僕が考えたのだ。逸珂だから、呼びやすいように、いつくん。

このエピソードだけでも、我ながら一方通行なコミュニケーションだったんだなあ、と痛感する。

しかし、そんな一方通行の一方、彼女は、いぬくるちゃんは、母親から虐待を受けていたのだ。

だから、幼稚園では浮いた存在だった。全てを客観視しているような、少し歪な少女だったのだ。

彼女はある日、見通しの悪い道路の横断歩道から、左右を確認して飛び出したのだ。

乗用車が横断歩道に迫るその刹那、偶然その場に居合わせた僕は『デストラグル能力』を初めて使い、彼女を助けた。

僕は自らの力に恐怖しながらも、彼女に問いたただいた。なぜ、飛び出したのかを。

すると、彼女の口から信じられない言葉が飛び出した

「お母さんが、私がここで轢かれればお金になるからって……」

少女はぐしゃぐしゃに泣きながら、そう言った。

「私は、必要ないからって」

そして、僕から逃げるために、走り出した

「ちよっ！待って！いぬくるちゃん！」

走り出そうとした僕の手を、もう一人の少女が掴む。

車に乗った男性と、その娘も無事だったのだ。

その時の車に乗った少女、猿白砂麦が、僕の手を掴み、拝み倒していた。

「ありがとうございます！何か… お礼をさせてください！」

車から出てきて礼を言ったのは、運転席にいた男ではなく、僕と同じくらいの歳の少女であったが、僕はそれどころじゃないので、早く、とにかく早くこの手をふり解きたかった。

少女の髪は肩まで伸びており、フリルが沢山ついたワンピースを着ていた彼女は、どことなく生活水準の高そうな感じがした。

僕は気が動転していたからよく分からなかったが、運転席の男も僕と同じく呆然としていたらしい。

だから、この少女が、僕に何回も頭を下げていた。

僕は、いぬくろちゃんを追いかけなきゃいけないのに。

「お礼なんていい！今は君と話してる暇はない！」

だから、僕は彼女の手を振り払った。

「そ、そんな… お礼をさせてください！お父さんはあんなだし… 連絡先だけでも！」

その振り払った手を、彼女は両手で掴む。

「また会ったらな！今はそんな時間ないんだ！ほら、頭の傷が目印になるだろ！」

僕は石がかすって出来た浅い傷が出来た頭を指差し、彼女の手を完全に振り切った。

「それ、前からじゃ見えないですよお！」

距離をとり、走り出した僕を、彼女は追いかけてようとする。

しかし、僕の方が走るのが速く、彼女との距離はどんどん開いていった。

「じゃあ天井でも歩け！僕はもう行く！」

急いでいた僕は、少し言葉が荒くなってしまった。

それほどまでに、僕は焦っていたのだ。

「あつ…」

そして、僕は彼女　猿白砂麦に捨て台詞を吐き、いぬくろちゃんを探して街中を走り回った。

息が切れるまで走り回って、数十分後、僕はようやく彼女を見つけた

3

いぬくろちゃんは、街の外れの橋の下の河川敷にいた。

全く手入れされていない河川敷は雑草が幼かった僕のお腹くらいに伸びており、足元は泥でぐちゃぐちゃだった。

彼女の着ているＴシャツと半ズボンも、水や泥で、かなり汚れていた。

「自分の価値なんて、他のひとに決められることじゃないよ…」

僕ははあはあと息を切らしながらも、膝を抱えていたいぬくろちゃんに、そう言っていた。

「…　いつくん」

彼女は涙を流し続けていたようであった。

目が少し充血しており、鼻水を必死にすすっていた。

「なんで…　いつくんは私がいるの？」

なぜ自分が必要なのか、彼女は分かっていたいなかった。

幼い僕も、ようやくそこで理解した

僕は、寂しかったのだ。

彼女が、僕には必要だったのだ。

「君がいないと……僕はさびしいから」

僕は、自分の気持ちを正直に言い、彼女を抱きしめた。

「僕は……いぬくろちゃんが好きだから」

そう、僕にはいぬくろちゃんが必要だった。

一緒にいてくれる存在が、僕には必要だったのだ。

「でも、お母さんは、私がいららないって」

一番大切で、一番愛してくれるべき母親に価値を否定された彼女は、それでも自分の存在を無意味だという。

そして、彼女は僕を真っ直ぐに見つめて、自分の体から引き剥がそうとする。

「それでも……僕は……」

僕は、それでも、彼女を抱きしめていた。

子供心に、このまま離れたら、彼女がどこかに消えてしまうような気がして

「それでも僕は、いぬくろちゃんにいてほしいんだ……そばにいてほしいんだ……」

そう僕が言うと、いぬくろちゃんは、とても驚いて目を見開き、おとなしく僕に抱きしめられていた。

そして、小さく震える声で、「ありがとう」とだけ言った。

そしてその日、僕はいぬくろちゃんを連れて、警察に行った。

次の日、彼女の母親は逮捕され、僕は悲しいけれど、安心していった。

これで、彼女を傷つける人はいなくなった。

幼かった僕は、彼女を守ることが出来たのだ

4

「ありがとう、いつくん……」

お別れの日、僕の家玄関の前で、彼女はそう言って小さく頭を下げた。

僕は、彼女の母を逮捕させてしまい、恨まれているかと思っただけで、その行動が意外であった。

「ごめんね……僕のせいで」

僕は、お礼に対して謝罪の言葉を口にしていった。

「いつくん、いつくんのおかげで、今、生きてる。だから」

彼女は、僕とキスをしていた。

小さな僕は、普段はおとなしい彼女だけに驚いた。

「いつか、同じ『がっこう』に行けるようになったら、私がいつくんのカノジョになってあげる！」

そして、彼女は僕の手を握りながら宣言する。

僕のために、彼女になってくれる、と。

一緒に学校に、行く、と。

「いつくんが自慢できるくらい完璧なカノジョになって、私の全部

をあげる！ずっと一緒にいてあげる！」

そして、これからも頑張り続けることを。

彼女がとんでもない逆境の中にいることは、幼い僕でも分かった。

だから、僕は彼女の約束が嬉しかった。

彼女が前向きに生きていこうと思ってくれていることが、嬉しかった。

この上なく、嬉しかった。

「じゃ、じゃあ、『がっこう』でも、手をつないでくれる？僕と、キスしてくれる？」

そして僕は興奮し、勝手に色々な約束をとりつける。

しかし、彼女は嫌な顔一つせず、うんうん、と頷く。

「うん！私は、いつくんのカノジョになるんだから！」

そして、感極まった僕は、彼女に今、何かしてやれないか、幼いなりに考えた。

「じゃ、じゃあ…これ、あげる！」

「な、これ…いいの!？」

「うん！あげる…君だから、あげる！」

僕はそう言っ、ポケットから、リボンを取り出した。

それは、幼稚園の制作の時間で作ったリボンであった。

古い服を流用した赤い布で作られているそのリボンはチープなここの上なかつたが、彼女は喜んで、頭につけてくれた。

「それで、『がっこう』に行くようになったら、僕が守るから！いぬくるちゃんを絶対に守るから！」

僕は、彼女を守りたいと思った。
母に酷い仕打ちをされ、自分に価値がないとすら言った彼女を、
守りたいと思ったのだ。

僕と、一緒にいてくれた人だから。
大切な、人だから。

「ありがとう、本当にありがとう… いつくん、らいしゅき！」

そう言って、笑いながら、彼女は迎えの車へと走っていった。

「またね！いぬくろちゃん！」

僕は走り去る車に手を振りながら、泣いていた。

後部座席で、彼女は泣きながらガラスに張り付いている。
僕は嬉しいけど、寂しくて、泣いていた。

そして、僕は、彼女と別れた

僕が助けたのは、二人の少女であった。

それが、僕の欠けた記憶の真実だったのだ

つづく

第21話 僕は… 君の彼氏だ！

1

狗川黒は戦っていた。

全ては、約束のために。

学校で、僕と手を繋ぐために。

僕と、学校でキスをするために。

それを許さない生徒会と、真っ向からぶつかっていたのだ。

そして、鬼ヶ島会長に連れさらわれた。

黒のデストラグル能力『終焉の漆黒』を、彼は悪魔の完全封印に利用したらしい。

そんな勝手な理由、僕は許せなかった。

「まさか！！」

猿白の家の前の道路に立つ僕は、スポーツバックを取り、そこに付いていた小さな袋を見つめる

この袋は、彼女が僕の家を探すために勝手に取り付けた、五色米が入った袋であった。

僕は、それを凝視する。

やはり、そうか

この袋は、僕がいぬくろちゃんと別れるときにあげた、リボンの布が使われていた。

彼女は、狗川黒は、最初から、こんなにも不器用なヒントを出していたのだ。

わかんねえよ、これ。

昔からそうだけど、君は、何でも出来るのに、不器用過ぎるよ。
そこが、かわいいんだけどさ。
そこが、ほっとけないんだけどさ

「いぬくろちゃん… 僕は！」

僕は、走り出していた。

学校へと続く街中を、わき目もふらず、駆け抜ける。
もう、迷いはない。

彼女は、僕との約束を守るために、戦ってくれた。

だから、今度は、僕が約束を守る番だ。

「先輩！」

砂麦が、後ろから馬車の如き猛スピードで追いかけてくる。

「ごめん砂麦！君は普通に授業に出てくれ 出席しないと単位や
バイんだろ！？」

僕がそう叫ぶと、彼女は立ち止まった。

そして、どんどん僕と距離が遠くなっていく。

「… 分かったっす！」

振り返り、そう叫んでいた彼女を確認し、僕は一層速く走った。

猿白砂麦、君も僕は守る。

あんなにぞんざいな態度で別れた僕を見つけだしてくれて、どん
底だった僕を助けてくれた、好きでいてくれた、君を。

だから、そのために僕は戦う。

僕は男になったから、もうデストラグル能力なんてない。

だけど、僕はどんなに非力でも、どんなに勝ち目がなくても、戦
わなきゃいけないんだ。

僕は、狗川黒と約束したから。

僕は彼女達の恋人だから。

だから僕は戦う、生徒会長と。

「はあ… くそッ」

僕は、長い桜並木を抜け、校門を通過し、ようやく校舎の前に広がる校庭へと辿りついた。

きつと、いや、確実にやつは生徒会室にいる。

なぜなら、奴は生徒会長だから。

そして、彼が『ダークモノリス』の中の悪魔を封印するとしたら、考えられる居場所は、生徒会室しかない。

眼前にそそり立つどこから見ても普通の高等学校の上空にある、
『エンジェルガーデン聖なる空中庭園』に、彼は確実にいる。

「待ってるお… 生徒会長、鬼ヶ島千草あ！」

僕は、まだ誰も登校していない、静まりかえった学園の校舎に向かって叫んだ。

おお、なんか今、凄い主人公っぽいぞ、僕。

そうだ、僕は主人公なのだ。

これがバトル漫画なら、僕は確実に主人公だ。
だから、なんとかなるかもしれない。

ちゃんと補正が入って、あの童貞を、どうにかして倒せるかもしれない

数分後のことである。

生徒会室に、僕はいた。

その生徒会室『（エンジェルガーデン）』は、大きく姿を変えていた。

ここは以前来たときは、この世のものとは思えないくらいに美しい花々に囲まれ並び立つ二つのモノリスを中心に十字の形を描くように、床にタイルが張られている通路になっており、タイルが張つてある部分意外の場所は草木が生えていた。

というか、数分前まではその形であったのだ。

しかし、今、巨大な二つの石版『セントモノリス』と『ダークモノリス』は宙に浮かび、その下には6メートル四方の四角形の純白のリングが出来上がっており、その外は誰もいない観客席に変化し、『聖なる空中庭園

エンジェルガーデン

』全体が、巨大な特設ステージになっていた

「驚いたよ、まさか君が来るなんてね　桃山逸珂くん。だが、これは　何の冗談だい？」

その特設リングの、丁度真ん中に、僕と、鬼ヶ島はいた。

鬼ヶ島は、両足で踏ん張ってリングに立っている僕の首に両足を絡めつつ、両腕を思い切り万歳の格好のまま握り締めて僕の肩の乗っている。

頸動脈が確実に締め上げられていく。

両腕の間接が、あらぬ方向に曲がっていく。

両足が、がくがくと震えて、今にも膝をつきそうになる。

凄まじく、痛い。

「僕も驚いてますよ、本当に……」

こんなに勇気を振り絞れることに、僕は驚いていた。

今、僕は、あの生徒会長鬼ヶ島に、一步も引かずに、膝もつかずに、戦っている。

昨日までの僕では、考えられないほどの勇気であった。

昨日の僕だったら、ジャンピング土下座で黒を自分と引き換えに返してくれるよう懇願するのが、限界だったと思う。

しかし、今日の僕は、彼と戦っていたのだ。

その事実には、一番僕が驚いていた。

「こんな……はずでは」

それと共に、自分自身の主人公補正のなさに、驚いていた。

こういうものは、心意気でなんとかなるものだと、思っていたからだ。

全然、どうにもなってなかった。

「ぐうえっ……」

生徒会室のドアを蹴破るところまではよかった。

いや、玉座に座る鬼ヶ島を思い切り挑発し、彼がデストラグル能力（なんだろうな、恐らく）で出現させたこの特設リングに颯爽とリングインして、メンチを切るところまではよかった。

白ランを脱ぎ捨て、白い制服のズボンと、やっぱり白いタンクトップの戦闘スタイルとなり、腰の刀をコーナーポストに突き刺してリング中央に立ち、ボクシング風のファイトスタイル（だと思う）をとる鬼ヶ島を前にして、一步も引かなかったのも、素晴らしい勇気の賜物だと思う。

主人公らしく黒い学ランを脱ぎ捨て赤いTシャツと黒いズボンの姿となり、頭上に浮かぶ黒光りする大理石のような形状に変化し、緑色に輝く『ダークモノリス』に両手と腰から下を吸収されたまま

固定され意識を失っていた制服姿の狗川黒に「もう大丈夫だ黒！僕が… 絶対君を助ける！」と叫んで勇気を振り絞り、闘志がギラギラと燃える瞳で鬼ヶ島を見据えながら拳を構え、誰が鳴らしたかわからないゴングと共に駆け出した僕は、バトル漫画の主人公のようにかっこよかったと自負したい。

しかし、ゴングが鳴ってから数秒後、彼は僕の背後をとり、背中から僕の肩に乗ったのだ。

そして、両腕の間接を万歳の格好で極められ、全く脱出出来ずに現在に至っている

「で、君は生徒会に入ってくれるのかい？」

この期に及んで、彼はわかり切ったことを訊いてきやがる。

大体、生徒会は童貞の集団ではないか。

僕を入れる気など更々ない癖に、この男は、こういう事を言うのだ。

どうせ彼は今、僕の肩の上で勝ち誇ったような微笑を浮かべているに違いない。

首を絞められて確認は出来ないが。

うぜー。

「ノーですな！」

容赦なく絞まり続ける咽喉から、僕は声を張り上げる。

「君は万歳の格好をしているけど、これは降参という意味かい？」

まだ訊くか。

絶対ニヤニヤ笑ってるだろ。

超うぜー。

「ノー… です… な！」

声が絶え絶えになっっているが、それでも僕は明確に拒否する。

降参なんて、死んでも嫌だ。

ネバーギブアップだ、この野郎馬鹿野郎。

「じゃあ… ちょっと消えてくれないかい？」

彼は、自分以外の意にそぐわない全てに、そう思っているに違いない。

消えて欲しいのだ。

以前の僕なら、少しは分かったであろう、その気持ち。

自分以外の人間が妬ましい、うっとおしい、うざい、消えてくれ。

死ね、壊れろ、くたばれ、なくなってしまえ。

そう思っていたのだ、僕も。

だけど、そんな僕を変えてくれた二人のために、僕は反撃しなければいけないのに

「断じ… てノーだ…」

言葉とは裏腹に、僕の全身から散々振り絞っていた力が抜け、膝が地面につきそうになる。

折れないように踏ん張っていた両腕も、力が一気に抜けていく。

その時であった

「… うつつ」

僕の頭上から、小さな呻き声が聞こえた。

それは、ブラックモノリスに縛り付けられた狗川黒のものであった。

僕が散々叫んだから、意識が少しだけ戻ったのであろう。

「黒っ！！」

僕は、思い切り頭上を見上げた。

思い切り絞め付けられているというのに、僕は彼女を見つめたのだ

「いつ… くん…」

黒は、泣きそうな顔で、僕の名前を呼んでいた。
その姿が、幼稚園の頃の彼女と重なる。

強そうに見えるけれど、心が脆くて、不器用で、それでも未来に希望を見出して僕と別れた彼女を、僕は思い出だした。

この現実が、彼女の願った未来が壊れた姿なのだろうか。

「たすけ……て」

否。

断じて、否。

そうじゃない、彼女が願っていた、もつと暖かくて、優しく、それでいて、未来は、まだ、壊れちゃいない。

だって、まだ彼女は生きているんだ。

一番大切な親に、死ねと言われても。

本当に、死にそうになっても。

その親が逮捕され、施設に行くことになっても。

彼女は負けずに生きてきたじゃないか。

そして、僕も、今、まだ生きているじゃないか。

なら、まだ、未来はある。

今からだって、十分間に合う、間に合わせる。

「あ……ああ！いぬくろちゃん！」

僕は、頭上の彼女に言うと、彼女はこくん、と頷いて、再び意識を失った。

その顔に先ほどまでの不安の色はなく、まるで幼子が昼寝をしているかのように、安らかなものであった

「いぬくろちゃんは……僕が……助ける！」

そうだよ、僕は、バトル漫画の、この世界の主人公なんかじゃない。
い。

そんなの、子供の発想じゃないか。

世界は皆のものだ、僕のものでも、もちろん鬼ヶ島のものでな

い。

僕は、ただの人間だ。

だが、僕は、僕という物語の主人公だ。

桃山逸珂という人間の、物語の主人公だ。

その物語は、二人のヒロインがいて、その少女達と共に僕が歩んでいく、人が起こした奇跡の物語。

愛しくて、恋しくて、楽しくて、おかしくて、ふざけていて、それでいて、どうしようもなくかけがえのない物語の、主人公なのだ。

それだけで、沢山だ。

それが僕の発想だ。

誰かが聞いたら笑うかもしれない、否定するかもしれない、それでもいい。

だが、僕は胸を張って誇りたい、僕が僕であることを。

そして、そう思えるようになったのは、黒と、砂麦のおかげだ。

だから、僕の物語をここで終わらせるわけにはいかない。

この物語は、絶対にハッピーエンドにしなければ、ならないのだ。

「僕は… 君の彼氏だ！」

僕の中で、なにかが弾ける。

全身に、僕自身でも計り知れないほどの力が漲るのを、感じた。

世界で一番幸せな童貞の物語は、どうやら、もう少し続くようであつた

UJU

第22話 これで終わりだ

1

「な… なんだ、この力は?!」

その台詞は、僕のものであった。

自分自身でもどこにそんな力を隠していたのか分からないくらいに、強大な力が全身に溢れていたのだ。

膝をつきそうだった両足に、まるで山をも踏み抜くほどの力が漲り、僕は会長を肩に乗せたまま思い切り背を伸ばした。

そして、間接を完全に破壊されるくらいに曲げられた両腕には大地をえぐるくらいに強大な力が漲り、僕は肩に鬼ヶ島を乗せたまま、思い切り跳躍した。

「なにいッ!?!」

そして、僕は脳天から落下し、肩に乗せた鬼ヶ島を思い切りマッ トに叩きつけた。

「ぐべっつ!?!」

脳天から地面に激突したらしく、鬼ヶ島は低い悲鳴を上げる。

鬼ヶ島に落下の衝撃を全て叩きつけた僕は、彼の腕を離してリングの上に立ち上がった。

「はあはあ…」

息を切らせながらも、僕はリングに倒れて血だらけの頭を抱えている鬼ヶ島を見下ろした。

「も、桃山… 逸珂、なにをした」

「僕に訊くな！」

完全に粉碎したと思っていたであろう僕が反撃に転じたため、鬼ヶ島は明らかに動揺していた。

それはそうだろう。

戦闘開始して、数秒経たずに関節技をかけて倒せる状況になったというのに、今、彼は脳天から大量の血を噴射させ、マットに這い蹲っているのだ、驚きもする。

だが、彼以上に、僕が一番驚いていた。

一度は完全に消えかけた力が今、僕の体に充満していくのを、感じる。

しかも、その力は止まることを知らず、まるで体を僕ではない別ものに変質させているようであった。

というか、本当に変身していた。

鬼ヶ島の脳天から噴出してマットに溜まった大量の血に映る僕の姿は、既に人間のそれではなかった。

僕の頭は 羊のもののように曲線を描いている灰色の角が側面に生え、剣道の防具にも似ている三つのスリットが刻まれた黒い殻で前面が覆われていた。

そして、その殻の三つのスリット（細く鋭い隙間）から、まるでナイフのような鋭い二つの眼が、赤い光を放っていた。

身に着けていた赤いＴシャツも、胸の部分に黒い太字で『悪』と書き殴られており、まるでしまらで売っているようなデザインになっている。

首から下は人間のままであったが、それでも、筋肉などの付き方が今までの僕と違い、まるで格闘ゲームのキャラのように筋骨隆々であった。

「ふっ… まるで悪の大幹部だな！」

そう吐き捨て、鬼ヶ島生徒会長はコーナーポストに突き刺していた日本刀を握りしめ、リング中央に立つ僕を血走った瞳で真っ直ぐに見つめながら、ゆっくりと近づいてくる。

「おいおい、武器ありかよ。」

さっきまでの格闘戦（と言えるほどの接戦じゃなかったが）はななんだったんだよ。

「サービスタイムは終わったのかよ、あんたフリーザかおい。」

「悪かったな！」

僕はそんな会長に向かって、一步も引かずに両脚を開いてマットを踏み、拳を構える。

「だが確かに、今の僕の顔面は悪の大幹部にしか見えない。」

「Tシャツはしむらだが。」

「お前が正義のヒーローなら、僕はそれでいい！」

「そうだ、僕は悪でいい。」

「黒を守るなら、それでいいのだ。」

「よく言った！なら正義の刀の錆と消えるがいい！」

鬼ヶ島は顔面を流血させたまま満足げに笑い、日本刀を僕に向かって振り下ろす。

しかし、僕は顔面の側面にある曲がった角を真っ直ぐに伸ばし、まるで槍のように刀を迎撃する。

「ぐっ！？私のエクスカリバーが！」

刀はボロボロに砕け散り、その破片がマットに四散する。

「というか、なんだその厨房くさいネーミングは、日本刀でエクスカリバーはないだろう。」

「くっ… まさか、この力 『悪のカリスマ』、大姦獄なのか？」

「！」

会長は驚きを隠せない様子で、狼狽しながら叫ぶ。

「だ… 大姦獄だって？」

大姦獄。

それは、ダークモノリスに不完全な形で封印されている、悪魔。

確かに、今の僕の頭部は、ダークモノリスに刻まれた悪魔『大姦獄』そのものであった。

そして、この全身から溢れる力は、確かに人間のものではない。今の僕なら、片手で新幹線を米粒サイズのスクラップに出来る。右足だけで、富士山を平地に出来る。

それくらいに凄まじい力を、全身から感じていた。

僕は、悪のカリスマに、体に乗っ取られてしまったのか。力を、欲したあまりに

「そ… そうらしいな。よかったぜ、これであんたを倒せるよ」

そうだ、この力は、僕が欲したのだ。

今、僕たちの頭上でブラックモノリスに吸収されそうになっているいぬくろちゃんを、助けられる力を。

この眼前の鬼ヶ島を、倒せる力を。

それだけでいい、それだけのために力が欲しい。

だから『大姦獄』、お前の力を貸してくれ。

僕の体は、ボロボロになってもかまわない。

彼女と一度だけ、学校で手を繋いで、キスができればそれでいい。それだけでいいから、今は、僕に力を貸してくれ

「これで、終わりだ！」

僕は、鬼ヶ島を指差す。

しかし、満身創痍であるはずの彼は、血まみれの顔面で不敵な笑

みを浮かべていた

「ふっ… いいだろう！今から見せてやる この私、生徒会長鬼ヶ島千草の最強のデストラグル能力を！！」

どうやら、彼はまだ奥の手を隠しているようであった。

それならば、それでいい。

僕は戦う。

僕の彼女を傷つける、お前と。

そして、絶対に勝つ

今、史上最強の童貞と、天下無双の童貞の頂上決戦が始まった

つづく

最終話 互いの手を、繋ぎながら

1

「おはよう、いつくん」

目覚めると、僕の部屋のドアのあたりから黒の音が聞こえた。朝っぱらから、彼女は僕を起こしに来てくれたのだろう。

なんと健気な彼女であろうか。

ほぼ毎日、恋人を起こしに来てくれる彼女など、そうはいないであらう、多分。

そんな彼女がベッドの横まで近づいてきたというのに、僕は布団の中に潜り、うずくまっていた。眠いのだ。

「お… おはよう、くる
とにかく、眠い。」

昨日は比較的早く寝たというのに、全身がだるい。

「ねえ、いつくん、起きないの？」

じれったそうに彼女は言い、そして、僕にかけられていた毛布を強引に剥ぎ取った。

「まだ… 眠い」

寝汗を腕で拭い、僕は欠伸をしながら彼女を見つめる

眼前の美少女、狗川黒は、僕の彼女であった。

腰まで届くほどに伸びた、艶やかな黒髪。

優しい視線を送ってくる、切れ長の瞳。

少しだけ赤く染まっているシャープな顎のラインと、ぷりっとした唇。

少し背が高いスタイル抜群のボディラインと、それを包む紺色のセーラー服。

かなりのサイズがある、放漫な胸。

上履きと、黒いストッキングを履いている、綺麗で細い脚。

全身の黒い衣類とその表情から、どこことなく、黒猫のような少女であった。

特に、人間を達観したような視線で見ているその表情は本当に猫のようである、名前は狗川であるが。

しかし、どこのパーツを見ても、完璧である、服屋のマネキンも形無しである。

このまま、いい服を着せればファッション雑誌の表紙を飾れるのではないだろうか。

うっとりするほど綺麗で、本当にかわいい娘である。

僕が見とれていると、彼女は微笑をたたえながら、壁にかけられたアナログ時計を見つめた。

「ねえ、いつくん。まだ5時半だし…」

「朝、早っ!」

どう考えても早起き過ぎるだろう、眠いわけだ。

「キス、しよ?」

彼女はそう言って、小さくすぼめた唇を僕に突き出してくる。

「うん…ちゅっ」

僕達は、その後2時間近くキスをしていた

あの戦いから、もう三週間が経過していた

鬼ヶ島千草生徒会長は、『大姦獄』と一つとなった僕に敗北した。その戦いはあまりに中2くさくて、あまりに圧倒的だったので、あまり回想したくない。

でも、時間が経過した今も思う、やはり、鬼ヶ島千草という男は、以前の僕によく似ていたのだ。

全てのものが、自分のためにあると思っている、自己中心的な性格。

他人の不幸を望み、自分の幸せのためなら、いかなるものでも犠牲に出来る、ひたすらに邪悪な存在。

かつての僕も、そういう存在だった。

ただ、力がなかっただけで、僕も、彼のように、学校で好き勝手やっている連中を叩きのめしたい、と心の底から思っていたのだ。

だが、今は違う。

僕はもう、そんな気持ち、微塵もない。

僕は変わったのだ、彼女のおかげで。

狗川黒という、少女のおかげで

「
…」

朝食を済ませた僕は、先ほどまで彼女と交わっていたベッドの上に座り、自らの右腕に白くて真新しい包帯を巻いていた。

黒は僕の横で気ま自分の黒髪をいじりながら、その様子をまじまじと見ている。

彼女の切れ長の瞳にはさっきまでの明るさはなく、少し気まずそ

うであつた。

「その手、よく… ならないの？」

彼女が深刻そうに訊いて来るので、僕は苦笑してしまった。

こんなこと、気にすることは無いのに。

「あ、別に… 僕は気にしてないよ」

そう、これは仕方ないのだ。

あの戦いの中で、僕と『大姦獄』は、完全に一つとなつてしまつた。

そのお蔭で、僕は鬼ヶ島生徒会長を圧倒し、彼を謹慎処分にさせることができた。

いや、彼は自ら、謹慎処分を申し出た。

何か、思うところがあつたのだろうが、僕にはよく分からなかつた。

この両腕に巻いている白い包帯は、その力が暴走しないように制御している拘束具なのである。

まあ、怪人の姿から戻れないと思つていたから、反動は少ない方だと思つているのだが、なんとなく自分のナリが生徒会の面子のようなデザインになつてきているような気がした。

これで顔を隠したら、確実に、完璧に旧生徒会メンバーのナリである。

「私のピンチに駆けつけてくれたいつくん… 本当にヒーローみたいでかつこよかった」

彼女は瞳をキラキラさせて、あの日のことを回想する。

というか、駆けつけたときは気絶してたよな気がするんだが。

は、恥ずかしいな、おい。

「生徒会をばっさばっさと倒してたくろもね」

恥ずかしさ隠して、以前から思っていた本音がポロリと口から出た。

僕は眩しい日差しが差し込む窓際で、胸の中央部分を中心に赤い十字が描かれ、包帯の手入れがし易いように袖の部分がまくってある、黒い学ランを着た。

学ランは、胸の中心から端にかけて、赤い十字が描かれており、威圧的な感じを醸し出している。

これを着ると、完全に旧生徒会のような面子である。

だが、見た目は、あまり関係ない。

問題は中身だ。

確かに、外見は大切かもしれないが、人間、大切なのは大体が中身だ。

だから、今、僕が着ている服は華美であるが、気にしない。

「もう、使えないけど……まあ、別にいらないわ、あんな力なんて」

そして、彼女は僕の部屋から出て行き、階段を降りていく。

僕も、そんな彼女の後をついて行った。

「だって、いつくんが守ってくれるから」

彼女が、僕の腕を掴んでにこりと笑う。

あの頃、見ることができなかった満面の笑顔が、今、ここにはある。

僕は、この笑顔を守っていきたくないと、思った。

「うん、僕が君を守るよ、僕はくろの彼氏だから」

そう、ずっと、ずっと守っていく。

どんな時でも、僕は、君を守る。

それが、狗川黒と、僕が交わした約束だから。

僕は、君が好きだから。

「いつくん……」

黒は、外て靴を履いて、ひたすら真っ直ぐに僕を見つめた。

そして、まるで僕との身長差や、玄関の段差を埋めるかのように、ぴん、と爪先立ちをした

「ありがとう、いつくん」

僕は、彼女と唇を重ねていた。

彼女の爪先立ちが終わるまでの、短いキス。

でも、僕達は、それで、どうしようもないほどに、満たされていた。

まるで、欠けた月が、満ちていくような感覚。

それを、僕は味わっていた

「さて、行こうか」

僕は、靴を履き、玄関の壁にかけられているマントを学ランの上
に羽織る。

表側が黒く、そして、内側が血のように黒味を帯びた黒いマント
を靡かせ、僕は勢いよく玄関の外に出た

「行きましようか」

玄関を開けると、真っ直ぐな道が広がっていた。

ここをただひたすらに歩いていくと、校門前の桜並木が右手に繋
がっている。

僕達は、ここを歩いて、学校に行く。

春も終わり、蒸し暑い季節が近づいてくる。

夏休み前の地獄のようなアスファルトの通学路も、どんと来いだ。

僕は、彼女と行くのだから

「学校へ」

二人の声が、重なる。

僕と彼女は、玄関から出て、眩しい日差しの中、青く晴れ渡った
空を見上げる。

黒は僕の隣で瞳をきらきらさせて、こちらを見つめた。

僕は、顔をほころばせながら、一步を踏み出す。

そして、僕たちはゆっくりと歩き出した

互いの手を、繋ぎながら

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6266m/>

真説 狗川黒の告白 The Extreme Boy Meets Girl

2011年1月4日22時10分発行